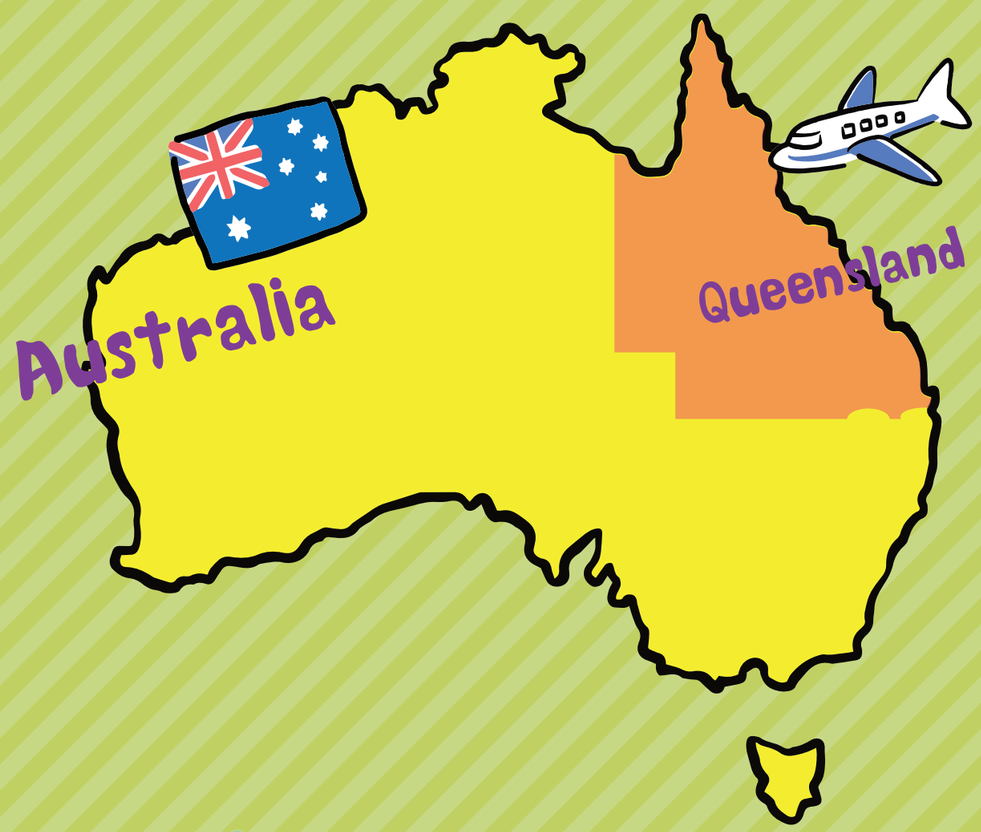
日本中央競馬会 令和5年度畜産振興事業 畜産ティーン育成プロジェクト

JRA
日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

令和５年度

畜産ティーン育成プロジェクト

事業報告書



公益社団法人　国際農業者交流協会

日本の畜産をもっと元気に!!

私たちが学んだオーストラリアの畜産業
その中で感じたこと、考えたことが、
日本の畜産をもっと元気にする！

私たち 畜産アンバサダー

1 はじめに 1

2 プロジェクトについて 2
- プロジェクトの目的 2
- 畜産ティーン育成プロジェクトの１年 3
- 参加者一覧 5
- 事前研修 6
- 海外研修 7
- オーストラリア研修でお世話になった方々 10

3 写真でたどるオーストラリア研修 11

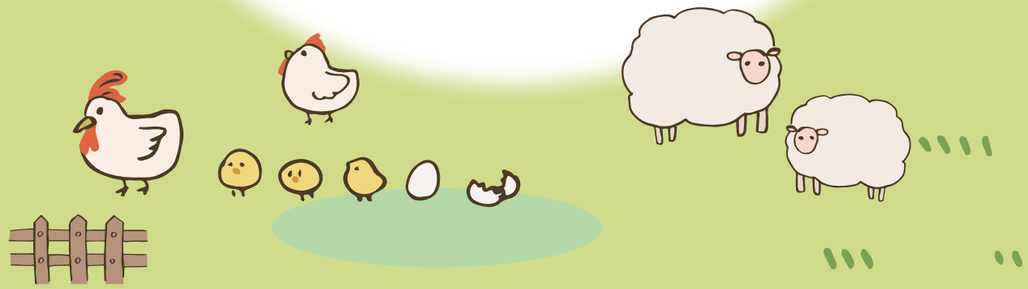
4 畜産アンバサダー活動の報告 21

5 畜産業に関する参加者への意識調査 27

6 参加者の報告 33
- 引率教員　土肥 正毅 ３３
- 畜産アンバサダー ２０名..... ３５
- メンター　藤田 春恵 ７５
- メンター　森田 七海 ７７
- 引率教員　福重 美帆 ７９

7 未来の畜産業に対するアイデア 82

8 むすび 103



1 はじめに

公益社団法人　国際農業者交流協会
会　長　　五月女　昌巳

公益社団法人 国際農業者交流協会は、英語名を The Japan Agricultural Exchange Council（略称 JAEC）と表記し、海外において先進農業技術や経営などを実務的に学ぶプログラムを提供する専門機関として昭和 63 年に設立されました。前身団体からの累積では、これまでに 15,000 名を超える日本青年が海を渡り、言葉の壁や文化、生活環境の違いを乗り越えて先進農業を学んできました。海外で研鑽を重ねた方々は、培った知識と経験を生かし、我が国における中核農業者として、さらには農業関連諸企業や国際協力分野において活躍されています。

本会では、上記に加え ASEAN やヨーロッパ諸国の農業青年に日本の農家で実務研修をしてもらう受入事業、研修を終えた方々に向けた農業の研究会やセミナーの実施なども手掛けています。これらの事業は、米欧豪及びアジア諸国の政府機関、関係団体との長年に亘る協力と信頼関係によって実現されているもので、その質と研修効果の高さは国内外から高く評価されています。

畜産ティーン育成プロジェクト事業は、JRA 日本中央競馬会の助成により実施されています。若年層における畜産業への興味喚起が主なる目的であり、海外研修を通じた学びを主眼とし、参加者は学んだことを自らの口でひとに伝える・発表することとなっています。いうなれば、インプットとアウトプットがセットになったプロジェクトです。

新型コロナの影響が続き、2021 年、2022 年と 2 年間はオンラインを中心としたプログラムを展開してきましたが、今年度のプロジェクトについては、実際にオーストラリアを訪問し、4 年ぶりに海外での研修を行うことができました。

研修のコーディネートは、クイーンズランド州の北の玄関口ケアンズに拠点を構え、1996 年からオーダーメード型の教育プログラムを提供している Banora International Group にお願いしました。ふんだんに盛り込まれた農業視察、滞在中のそのほとんどがファームステイ、そして現地の高校での農業授業や実習、生徒との交流と、クイーンズランド州の畜産業や文化、慣習などを総合的に学ぶ機会となりました。

研修参加者は、オーストラリアでの経験をもとに畜産業の魅力を伝える畜産アンバサダーとして活動しました。高校生たちの言葉は、聞く人たちの心を強く惹きつけ、畜産業の魅力を元気いっぱいに発信する機会となりました。将来の日本農業を担う人材として、皆さんの今後の活躍を心より祈念申し上げます。

最後になりますが、本プロジェクト実施にあたりまして、ご指導・ご支援・ご協力を賜りましたすべての方々に感謝申し上げますとともに、引き続き、本会運営事業へのご理解とご協力を頂きますようよろしくお願い申し上げます。

2 プロジェクトについて

◆◆ プロジェクトの目的 ◆◆

畜産ティーン育成プロジェクトとは

JRA 日本中央競馬会の令和 5 年度畜産振興事業により実施されました。平成 30 年度から実施してきました未来の畜産女子育成プロジェクトから名称を変更し、令和 4 年度から畜産ティーン育成プロジェクトとなりました。
この事業では、その時々の現状課題を踏まえた必要性や緊急性等に応じ、年度ごとの公募テーマと重点的に対応する事項が定められます。
公募テーマの中から「労働力・担い手の確保」、重点的対応事項の中から「経営を支える労働力や次世代の人材の確保のための対策」を選び、この公募テーマと重点的対応事項に沿って事業を実施するため、海外研修と啓発活動を組み合わせた事業が畜産ティーン育成プロジェクトです。
次世代の農業者につながる人材育成のため、全国から20名の高等学校生徒が参加しました。コロナ禍の状況を踏まえ、過去 2 年度はオンラインでの研修を中心としたプログラムを実施していましたが、令和 5 年度は 4 年ぶりに海外研修を実施することができました。

舞台はオーストラリアのテーブルランド

高校生たちに学んでほしい畜産先進国として、オーストラリアを選びました。研修地域に選んだオーストラリアの北東に位置するクイーンズランド州は、日本の 5 倍の面積を持つオーストラリア屈指の農業州です。クイーンズランド州の北の玄関口であるケアンズから、南西に約 100km の位置にあるアサートン高原を中心にテーブルランドでの研修を行いました。テーブルランドは、標高差の違いから、ほんの数キロ離れただけで気候が変わり、豊富な水資源により農業が盛んに行われています。

また、オーストラリアは、世界幸福報告書（The World Happiness Report）2023 による幸福度ランキングで第 12 位（日本は 137 か国中第 47 位）という結果の国で、滞在中のファームステイから、家族の在り方、社会保障制度などの社会的支援、健康寿命、人生の自由度、他者への寛容さ、国への信頼度などオーストラリア国民の文化や慣習にも触れる機会となりました。

啓発活動

研修から得た知識と経験をもとに日本の現状を比較考察し、得られた結論や意見を身近な人たちに広く啓発する「畜産アンバサダー活動」を実施しました。20 名の生徒が所属高等学校内外で広く宣伝・啓発し、若年層への畜産業参入の動機づけや、担い手の確保の重要性について意識改革をはかりました。将来の畜産業の担い手となる高校生が、海外の実情を知って感化され、日本国内で広く未来の畜産への提案をしたり、畜産の魅力を広く PR する機会を設けました。

未来の畜産業に対するアイデア

20 名のプロジェクト参加者は、海外研修後、自身の畜産アンバサダー活動を実施する中で、未来の畜産に対するアイデアを考えました。このアイデアは、研修を通じて得た知識や考えをもとに、各自で考えられる我が国の畜産に対する提案や宣言です。
82 ページから始まる畜産アンバサダーたちのアイデアは、20 人の畜産アンバサダーが、このプロジェクトを通じて学び考えたことを、一枚の紙にまとめたものです。
外国のやり方が素晴らしいから日本に取り入れるというのではなく、畜産が素晴らしいから、どうしたらもっと魅力的になるのか、フレッシュで心温まるアイデアをご覧ください。

◆◆ 畜産ティーン育成プロジェクトの１年 ◆◆

①推進委員会（5月12日）

準　備

②事前調査（5 月 14 日～ 20 日）
- 受入学校との打ち合わせ
- 農畜産概況等の確認

②事前調査
プロジェクトの核となる海外研修を実施するため、オーストラリアのクイーンズランド州北部地域周辺を訪問し、調査を行いました。

③プロジェクト参加者募集（4月28日～5月23日）

④プロジェクト参加者選抜（5月下旬）
- 書類審査
- オンライン面談

③④プロジェクト参加者募集と選抜
全国農業高等学校長協会、全国高等学校農場協会、日本学校農業クラブ連盟にプロジェクト周知のご協力をいただき、全国の高等学校から応募がありました。
書類審査、オンライン面談により、プロジェクト参加者を選抜しました。

①推進委員会（6月16日）

①推進委員会（8月17日）

研　修

オンライン

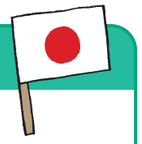
⑤事前研修（6月12日～16日）
- オリエンテーション
- 畜産業有識者からの講義
- グループディスカッション
- テーマとキーワード選択

⑥渡航前研修（7 月 27 日）
- クイーンズランド州政府駐日事務所からの講義
- 渡航前のオリエンテーション

オーストラリア

⑦海外研修（8 月 6 日～ 16 日）
- テーマとキーワードに沿って研修
- 農業視察
- 畜産業従事者へのインタビュー
- マランダ高校での農業実習や授業
- マランダ高校の生徒との交流
- ファームステイ

東　京



⑧研修成果報告会（8 月 17 日）
- 研修の成果を社会に発信
- 畜産アンバサダー活動のキックオフ

①推進委員会　⑨成果評価委員会
プロジェクトを客観的、意欲的、専門的に運営し評価するため、外部の専門家４名及びメンター２名による委員会を開催しました。

⑨成果評価委員会（3月15日）

畜産アンバサダー活動（8月～翌年3月）

パンフレット、
報告書にまとめ
広く配布

Instagram、Facebook、
TikTok、X などの SNS、
ホームページにて
広く発信

未来の畜産へのアイデア

**学んだことを
ふまえた
自分の意見**

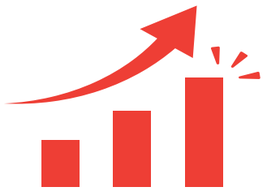
畜産業の魅力・若者の活躍促進

若者たちを鼓舞
- 高校生
- 畜産を目指す若者
- 中学生･小学生など

所属高校を中心とした
発表会や農業イベント
で畜産業の魅力を発信

**農畜産業界に
広く PR**
- 農家
- 農畜産関連企業
- 農畜産団体
- メディア

就農者の増加



農畜産業界の活性化

◆◆ 畜産ティーン育成プロジェクト参加者 ◆◆

●畜産アンバサダー（高等学校生徒）

	姓	名	所属学校	学科	学年
1	舛屋	笑麗奈	北海道帯広農業高等学校	酪農科学科	3 年
2	松本	結愛	北海道静内農業高等学校	食品科学科	3 年
3	大久保	愛和	北海道倶知安農業高等学校	生産科学科	2 年
4	泉	海偉	宮城県加美農業高等学校	農業科	2 年
5	藤沼	大志	栃木県立栃木農業高等学校	動物科学科	2 年
6	星	まどか	群馬県立勢多農林高等学校	動物科学科	3 年
7	大島	那哉	群馬県立勢多農林高等学校	動物科学科	3 年
8	下川	弥音	筑波大学附属坂戸高等学校	総合科学科	2 年
9	吉田	穂乃里	東京都立瑞穂農芸高等学校	畜産科学科	2 年
10	青木	希恋	神奈川県立中央農業高等学校	畜産科学科	2 年
11	市川	真優	長野県佐久平総合技術高等学校	食料マネジメント科	2 年
12	河野	花音	静岡県立磐田農業高等学校	生産流通科	3 年
13	浅野	椿	岐阜県立岐阜農林高等学校	動物科学科	3 年
14	松江	璃音	大阪府立農芸高等学校	資源動物科	2 年
15	木村	自然	島根県立出雲農林高等学校	動物科学科	3 年
16	田邊	綱汰	広島県立油木高等学校	産業ビジネス科	3 年
17	原田	里佳子	熊本県立熊本農業高等学校	畜産科	2 年
18	井	真莉亜	熊本県立熊本農業高等学校	畜産科	2 年
19	松尾	晏奈	熊本県立菊池農業高等学校	畜産科学科	3 年
20	永緑	花琳	宮崎県立都城農業高等学校	畜産科	2 年

●海外研修引率教員

大阪府立農芸高等学校　資源動物科　指導教諭　土肥 正毅
宮崎県立都城農業高等学校　畜産科　教諭　福重 美帆

●推進委員

本事業が目的達成のためにしっかりと正しく運営されているかを評価するため、推進委員として事業運営のアドバイスをいただきました。

横田　祥　農業生産法人（有）横田農場 / AGRI BATON PROJECT 代表
青山 浩子　新潟食料農業大学 食料産業学部　准教授
遠藤 友治　文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程調査官
星　知希　農林水産省 経営局 就農・女性課 農業教育グループ

●メンター

畜産業で活躍する女性畜産農家の藤田さん、2018 年未来の畜産女子育成プロジェクト参加者の森田さんにメンターとして参加していただきました。お二人とも海外農業研修経験者です。

藤田 春恵　左草ブラウンスイス牧場　2002 年・アメリカ研修参加
森田 七海　帯広畜産大学 畜産科学課程 4 年　2022 年・スイス研修参加

海外研修を実施したオーストラリアには、畜産アンバサダー 20 名、引率教員 2 名、メンター 2 名、本会職員 2 名の計 26 名が渡航しました。

◆◆ 事前研修 ◆◆

⑤事前研修　6 月 12 日～ 16 日

効果的な海外研修を実現するため、プロジェクト参加者に対して、プロジェクトの意義と目的、心構えの習得、日本の畜産業の理解促進、グループワークのため、5 日間の研修を夕方 16 時～ 18 時にオンラインで実施しました。

2 日目の講義を担当された関谷さんと一緒に牛の角ポーズ

日次	月　日	曜日	内　容
1	6 月 12 日	月	**・プロジェクト説明 ・参加者自己紹介 ・グループワーク** プロジェクトの意義や目的、スケジュールなどを説明しました。 20 名の高校生たちが、元気いっぱいに自己紹介しました。 4 つのチームに分かれて、チームの役割分担を決めました。
2	6 月 13 日	火	**・日本の肉牛について ・グループワー** 北海道上川郡新得町屈足トムラウシの畜産農家である関谷達司氏より、日本の肉牛産業について講義いただきました。
3	6 月 14 日	水	**・畜産業のキャリアパスについて ・グループワーク** 事業推進委員であり、新潟食料農業大学 食料産業学部青山浩子准教授より、「畜産という仕事、そして畜産業について」というタイトルで、キャリアパスについて講義いただきました。
4	6 月 15 日	木	**・日本の酪農について ・グループワーク** 尚絅大学 現代文化学部 光成有香 先生より日本の酪農について講義いただきました。
5	6 月 16 日	金	**・事業推進委員挨拶 ・グループワーク ・研修テーマの発表** **・事前研修の振り返り** 事業推進委員の横田先生、青山先生、遠藤先生、星先生から応援のメッセージをいただきました。 グループに分かれて、それぞれが決めたキーワードを発表してもらいました。 今回の学びをとりまとめて、8 月の本研修に向けた意気込みを発表してもらいました。

3 日目の講義を担当された青山先生と一緒に「ヤッホー」のポーズ

4 日目の講義を担当された光成先生と一緒に筋肉ムキムキポーズ

⑥渡航前研修　7 月 27 日

クイーンズランド州政府駐日事務所の田村杏奴 上席商務官より、クイーンズランド州の農業事情、滞在中の安全や治安のこと、そして応援のメッセージをいただきました。また、海外研修に向けた最終オリエンテーションを行いました。

グループワークの様子。オンライン会議アプリ Zoom のブレイクアウトルーム機能により、毎回、グループに分かれてディスカッションの機会を設けアウトプットを行いました。

◆◆ 海外研修 ◆◆

⑦海外研修　8 月 6 日～ 15 日

高校生の夏休み期間を利用して、クイーンズランド州北部にある Tableland で海外研修を実施しました。Banora International Group にプロジェクトのコーディネートを依頼し、農畜産業視察、畜産農家へのインタビューを通じた意見交換等を実施しました。滞在中には、マランダ高校を訪問し、同年代の畜産を目指す若者たちとの農業授業や農業実習を通じて、交流機会の場を設けました。さらに、Tableland 滞在期間中はファームステイとなり、異国の生活や文化背景が畜産に与える影響、オーストラリア農家の生活スタイルの理解につながり、グローバル感覚を養うことができました。

海外研修～帰国時研修成果報告会 日程

日次	月日（曜日）	時間	内　容
1	8 月 6 日（日）	15:30 17:30 20:00	インターナショナルガーデンホテル成田 集合 出発前オリエンテーション 成田国際空港第 3 ターミナル到着 ～ チェックイン 成田国際空港第 3 ターミナル出発 via ジェットスター航空 JQ26 便
2	8 月 7 日（月）	04:20 07:30 11:00 15:30	ケアンズ国際空港到着～入国審査～税関検査 チャーターバスにて Cairns 中心部へ移動 農業視察① Byrnes Quality Meats（食肉加工施設を備えた小売肉屋） Tableland へ移動 農業視察② Lecker Farms（肉牛農家） ファームステイ先へ移動
3	8 月 8 日（火）	09:00 14:00 16:30	農業視察③ Mareeba Sale Yards（肉牛のせり市場） 農業視察④ Mete Farms（肉牛農家） ファームステイ先へ移動
4	8 月 9 日（水）	09:00 14:00 16:30	農業視察⑤ Mungalli Creek Dairy（酪農家） 農業視察⑥ Gallo Dairyland（6 次産業化に取組む酪農家） ファームステイ先へ移動
5	8 月 10 日（木）	09:05 10:15 12:10 13:20 13:45 15:30	農業実習① ヤギの哺乳と体重測定及び投薬 マランダ高校の生徒との交流① 農業実習② 牛群移動と牛の体重測定 アフタヌーンティー（文化体験） マランダ高校の生徒との交流② ファームステイ先へ移動
6	8 月 11 日（金）	09:05 10:15 11:25 12:30 16:00	農業実習③ 牛の妊娠鑑定と直腸検査体験 農業実習④ 牛群の移動と牧草地での講義 お別れのティーパーティーと修了証書授与 Lake Eacham にて 研修の取りまとめ① ファームステイ先へ移動
7	8 月 12 日（土）		ファームステイ
8	8 月 13 日（日）		ファームステイ 引率者による受入農家巡回訪問を実施
9	8 月 14 日（月）	12:00 15:00	Mareeba Heritage Museum にて Graduation Ceremony Cairns へ移動 YHA Cairns Central にて 研修の取りまとめ②
10	8 月 15 日（火）	08:00 11:25 17:55 19:30 22:00	ケアンズ国際空港到着 ～ チェックイン ケアンズ国際空港出発 via ジェットスター航空 JQ25 便 成田国際空港第 3 ターミナル到着～入国審査～税関検査 チャーターバスにて東京都内へ移動 大田区蒲田到着
11	8 月 16 日（水）		意識調査アンケート 2 回目 研修の取りまとめ③ 発表リハーサル
12	8 月 17 日（木）	08:30 10:00 12:00	最終発表リハーサル 研修成果報告会 報告会終了後 解散

⑧研修成果報告会　8 月 17 日（木）10 時～正午
プラザ・アペア（東京都大田区西蒲田）

帰国直後には、研修成果の周知を目的に、事業関係者、農畜産業関係者、メディアを参集し、研修成果報告会を実施しました。 5 名 1 組がテーマごとに 4 グループ、それぞれ 15 分間プレゼンテーションを行い、最後に海外研修引率教員の土肥正毅先生に総括していただきました。日本の畜産現場が抱える問題点や既存のやり方についての改善点を見いだし、高校生ならではの感性を生かして見聞を広めたことが分かり、さらには、畜産アンバサダー活動の第一歩として自分自身の言葉を発信することができました。

1．畜産イメージアップ ～人にも牛にもやさしく～
松尾晏奈、市川真優、浅野　椿、大久保愛和、藤沼大志

2．創造する畜産スタイル ～消費者と創るおいしいお肉～
原田里佳子、松本結愛、田邊綱汰、河野花音、吉田穂乃里

3．若者が働きやすい経営 ～ライフ・ワーク・バランスの確立～
大島那哉、松江璃音、井　真莉亜、舛屋笑麗奈、下川弥音

4．若者中心の畜産 ～若者の畜産従事者を増やすために～
青木希恋、木村自然、永緑花琳、星　まどか、泉　海偉

◆◆ オーストラリア研修でお世話になった方々 ◆◆

◆プログラムコーディネート
Banora International Group
CEO Ms. Janine Bowmaker　マネージャー Mr. Michael Bowmaker
バスドライバー Mr. Michael Thomason

◆受入学校
Malanda State High School
校長 Mr. Gary Toshach
受入コーディネート Ms. Karen O'Shea　国際交流担当 Ms. Inge Avnold
農業講師 Mr. David Kilpatric　農業実習アシスタント Mr. Kevin Mallyan
獣医師　Dr. Tamawa Olley

◆農業視察
① Byrnes Quality Meats
マネージャー Mr. Andrew McIntosh
食肉加工施設を備えた販売所で、カンガルー、クロコダイル、ワニなど、エキゾチックな食肉も数多く扱うケアンズ内の小売肉屋。
② Lecker Farms
農場主 Mr. Gerald Kath　農場主夫人 Mrs. Cordula Kath
約 270ha、180 頭規模の肉牛農家。畜産の他にもパパイヤを広大に生産している。
③ Mareeba Sale Yards
Mr. Mark Peters
オーストラリア畜産市場協会によって運営管理されている 75 年の歴史を持つ北クイーンズランド州の肉牛せり市場。
④ Mete Farms
Mr. Phillip Mete
約 80ha の規模で肉牛経営をサイドビジネスとして行う農家。
⑤ Mungalli Creek Dairy
農場主 Mr. Rob Watson　農場主夫人 Mrs. Michelle Watson
バイオダイナミック農法により酪農を行う農家。
⑥ Gallo Dairyland
農場主夫人 Mrs. Jacqui Gallo　Mr. Giovanni Gallo　Mr. Cale Mirarchi
1937 年に Tableland 地域に土地を購入し、畑作と野菜、酪農を始めた Gallo 家が経営する農場。ロータリーパーラーを導入し、総合的な酪農教育農場として、地域社会に門を開いている。

◆通訳
深津あけみ（あけみさん）
ケアンズ在住の英語・日本語通訳。高校生に寄り添った通訳で、海外研修の学びを広く深くしていただきました。

◆旅行手配
近畿日本ツーリスト株式会社 公務営業支店
海外航空券の手配、現地や国内の移動バス手配、オーストラリア入国に必要な ETA 電子渡航許可取得のアドバイスなどお世話になりました。

3 写真でたどるオーストラリア研修

DAY1

成田国際空港に集合し、いよいよ出発。初めての海外、初めて飛行機に乗る人もいました。ドキドキですね。

夜に出発し、翌早朝に到着。約 7 時間かけ、5,800km 先の Cairns を目指します。

DAY2

予定時間よりも早く Cairns へ到着したので、朝日を見ることができました。ラッキー。

ケアンズ国際空港に到着。南半球のオーストラリアは冬で、少し肌寒かったです。

オーストラリア最初の視察先 Brynes Quality Meats に到着。

店内では、カンガルー、クロコダイル、ワニなど、日本ではなかなかお目にかかれない食肉も販売されていました。

週に 1 回は BBQ をするというオーストラリアならではのアイテムを発見。

店内部の食肉加工施設も見学させていただき、出来立てサラミも試食させていただきました。

Lecker Farms の農場主 Gerald さんとの 1 枚。牛たちを間近に畜産アンバサダーたちは大興奮。

Lecker Farms は畜産業の他に、クイーンズランド州内トップクラスのパパイヤ生産農家。牛たちは農場のパパイヤが大好物です。

農場主の Gerald さんと夫人の Cordula さん。

オーストラリアに到着して最初の食事。Gerald さん、Cordula さんが、美味しいハンバーガーや農場で採れた新鮮なパパイヤを振る舞ってくださいました。

夕方、ファームステイ受入家族が迎えにきてくださいました。
これから 8 日間お世話になります。

DAY3

地域の肉牛せり市場を案内してくださったMark さんとの 1 枚。この日、Mark さんは私たちを案内しながらせりに参加されていて、牛を何頭か買っていました。さすがこの道 40 年のベテランバイヤー。

毎週火曜日に行われる肉用牛のせりに立ち会うことができました。

こぶのある特徴的な牛がいました。
左臀部の 4HI はブランディング（焼印）で、生産者を指しています。

この日、最高値で取引された牛。Mark さんが、いくらで取引されたか問題を出してくださいました。

個体判別のための耳標を見せてもらいました。

「情熱さえあれば畜産はできる！」Mark さんの言葉に畜産アンバサダーたちは勇気をもらいました。

肉牛農家 Phillip さんとの 1 枚。Phillip さんのご両親はイタリアからの移民で、5 名の畜産アンバサダーのファームステイを受け入れてくださいました。

Phillip さんへの聞き取りの様子。質問が尽きません。

Tableland は 40 年ぶりの異常気象で雨が続き、牛たちも寒そうにしていました。

大型バスドライバーの Michael さん。
毎日、ケアンズから 2 時間かけて来てくださいました。

「天空の城ラピュタ」のモデルになった木とも言われる Curtain Fig Tree の前で、パシャリ！

DAY 4

Mungalli Creek Dairy を訪問。農場主の Rob さん、夫人の Michelle さんが案内してくださいました。

農場特製のチーズ、ヨーグルト、アイスクリームを試食させていただきました。

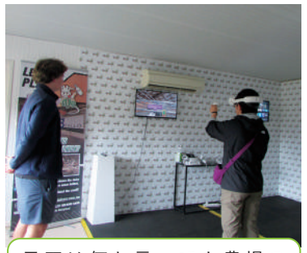
世界で最も基準が厳しいともいわれるオーガニック認証の 1 つ Demeter の認証農家で、Michelle さんからはバイオダイナミック農法の解説。Rob さんからは、こだわりの土づくりについて圃場で説明いただきました。

最後の視察先 Gallo Dairyland を訪問。農場主夫人 Jacqui さんとの 1 枚。

タワーサイロについて説明してくださいました。

Jacqui さん肝いりのチョコレート工房。地域の特徴を生かした農産物の加工品について、熱く語ってくださいました。

農場のロータリーパーラーも見せていただきました。



目玉は何と言っても農場のロータリーパーラーを模倣して作られた搾乳ゲーム。ゲームを通じて畜産の面白さを伝える拠点になっています。

DAY5

マランダ高校を訪問。学校全体で畜産アンバサダーたちを大歓迎してくださいました。

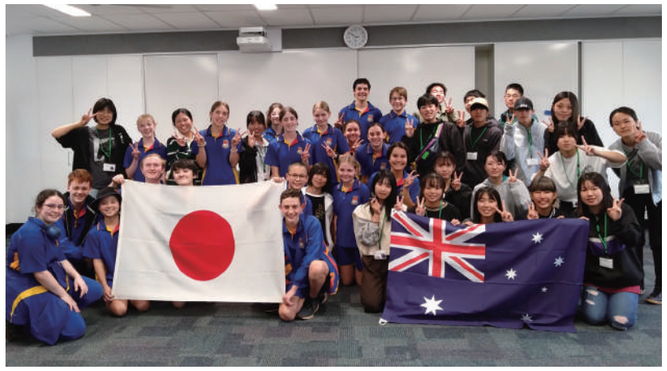
ミスター・アグリカルチャーと呼ばれる David 先生。オーストラリアの畜産についてまずは授業です。

はじめの農業実習では、ヤギの哺乳や体重測定を行いました。さすが、お手のものです。

David 先生の熱血授業に畜産アンバサダーたちもついていきます。

ランチタイム。農業実習を一緒に行ったAussie 高校生たちと一緒に BBQ です。

Gary Toshach 校長先生が歓迎してくださいました。FIFA 女子ワールドカップがオーストラリアで開催されていたこともあり、リーダーの４名からメッセージ付のサッカーボールをプレゼントしました。



マランダ高校の日本語の授業に参加。生徒たちと交流し親睦を深めました。希望者による今年の修学旅行は、大阪に行くそうです。

DAY6

この日も農業実習を行いました。まずは牛の体重測定です。測定した情報は、黄色のスティックで記録していきます。

海外研修引率教員の土肥先生と福重先生。イタリアを代表する最高級ブランド牛 Chianina の前で、パシャリ！

「牛の妊娠鑑定と直腸検査体験をしてみたい人はいる？」と David 先生。たくさんの手があがり David 先生はビックリです。

Tamawa Olley 獣医師より指導を受け、牛の妊娠鑑定と直腸検査体験を行いました。

牛たちと雨のなかのお散歩。
マランダ高校の放牧場へ向かいます。

マランダ高校の放牧場での授業の様子。
生憎の雨ですが、みんなとっても元気です。

David 先生による牧草の授業。マメ科植物による窒素固定のメリットについて説明いただきました。

マランダ高校での授業もおしまい。Gary Toshach 校長先生と、国際交流担当の Inge Avnold 先生がお別れ会を開いてくださいました。

畜産アンバサダーたちの海外研修を支えてくださった Ladies。
通訳のあけみさんとは今日でお別れです。5 日間どうもありがとうございました。

Lake Eacham にて、これまでの研修をチームごとに取りまとめていきます。

メンター春恵さんより、これまでのオーストラリア研修の学びを総括していただきました。

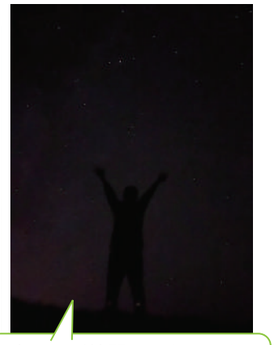
DAY 7-8

ファームステイをしながら、オーストラリアの生活や文化に触れます。農作業もさせていただきました。
ホストファミリーへの英語インタビューを通じて、研修の質を高める機会になりました。

週末になってようやく Tableland が晴れました。見渡す限りの大自然です。

Tableland 流 スーパーかめはめ波。

ベテランメンターの春恵さん、畜産アンバサダー 1 期生でメンターの七海さん。
海外で畜産研修をした 2 人は、畜産アンバサダーたちの学びを深く良くサポートしてくださいました。



この日の夜は星が綺麗に見えました。南半球なので南十字星が見れました。

DAY 9

Tableland での研修もいよいよ最終日。綺麗な朝日に、おはようございます。

Mareeba Heritage Museum の研修修了式会場に到着。続々と出席者がやってきます。

研修をコーディネートしてくださった Banora International Group の Janine Bowmaker 社長（左）、プロジェクトリーダーの皆戸顕彦（中）、Mareeba Shire Council の Angela Toppin 市長（右）。

グループを代表して、青木希恋さんが英語で見事なスピーチを披露しました。

一人ひとり修了証書をいただき、Angela Toppin 市長からメッセージをいただきました。

研修修了式にはお世話になったホストファミリーも参加され、お別れに涙する姿も。
短かったけど素晴らしい経験になりました。あまりの貴重な経験と出来事に、別れを惜しむ畜産アンバサダーたちでした。

翌朝の帰国フライトに備え、ケアンズ市内の YHA Cairns Central へ移動。

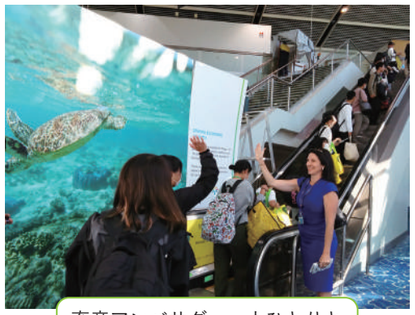
YHA Cairns Central の敷地内で、
研修の成果を取りまとめていきます。
これが大変なんだ。でも面白い。

チームごとのまとめの話し合いや
議論は夜まで続きました。

DAY10

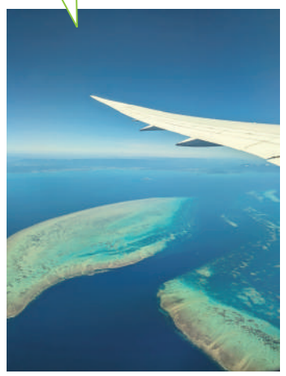
海外研修もいよいよ最終日。東京への帰国日です。国際空港でのチェックインも、慣れたものです。

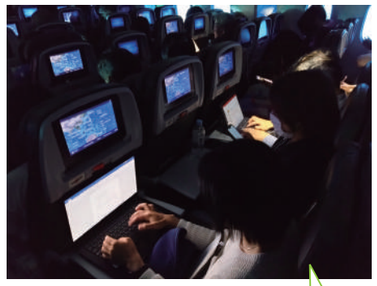
Janine さんがケアンズ国際空港まで
お見送りに来てくださいました。



畜産アンバサダー一人ひとりと
High Five でお別れです！
また来ます！

Cairns から離陸直後。窓からは世界最大のサンゴ礁地帯
グレートバリアリーフを見ることができました。





Cairns から東京へ。研修の取りま
とめは飛行機内でも続きます。

DAY11 帰国時研修

大田区内の研修施設にて、
帰国直後の研修の取りまとめと報告会の準備です。

海外研修の報告ではなく、日本の畜産をもっと元気にするためのアイデアまで考えていきます。
明日は、研修の成果をたくさんの人に届けるため頑張るぞ！

DAY12 研修成果報告会

5 名 1 組のテーマごとのグループが、
それぞれ 15 分間プレゼンテーションを行いました。

畜産イメージアップ
～人にも牛にもやさしく～

創造する畜産スタイル
～消費者と創る
おいしいお肉～

若者が働きやすい経営
～ライフ・ワーク・
バランスの確立～

若者中心の畜産
～若者の畜産従事者を
増やすために～

「帰国してわずかな時間でここまでの報告
は素晴らしい」出席された方々から、お褒
めの言葉をたくさんいただきました。

総括していただいた土肥先生。「オー
ストラリアの畜産だけでなく、日本の
畜産の良さも再確認することができま
した」とまとめてくださいました。

2023 プロジェクトチーム。
日本の畜産をもっと元気に！また、会える日まで。

4 畜産アンバサダー活動の報告

畜産ティーン育成プロジェクトでは、参加者がこのプロジェクトから得た学びを自分自身の考えにまで昇華し、畜産に対する熱い思いを対外的に示していくことが求められています。畜産業の魅力を PR する発表やイベントへの参加等で畜産に対する理解を広める役割を持った青年たちは「畜産アンバサダー」と称し、その PR 活動を畜産アンバサダー活動として広く推進しています。

オーストラリアの畜産から学んだことをふまえて、日本の畜産との比較考察を行い、さらに、これからの日本の畜産をより良くしていくためにできることを考えました。そして、畜産の魅力を伝えるために、所属高等学校内での研修報告会、地域のイベント等での発表を通じて、畜産の魅力、担い手の確保、次世代の畜産業をテーマに研修成果の積極的な普及活動を行いました。
校内では、同級生や下級生たちに対して、また学校祭などのイベントでは、新年度入学予定の中学生や、来校した方々に思いを届けました。その他にも、小学校、地元のスーパー、地域のお祭りなど様々な場所で活動しました。また、SNS ソーシャルネットワーキングサービスやメディアにより広く活動を発信した畜産アンバサダーもいます。
畜産アンバサダー活動では、参集者に対してアンケートを取り、発表を聞いての感想や畜産に対する意識向上を調査しました。

◆畜産アンバサダー実施期間

2023 年 8 月 21 日～ 2024 年 3 月 6 日

◆実施回数

○ 学校内（プロジェクト参加者母校での活動、学校の文化祭なども含む）…32 回
○ 地域（小学校、地元のスーパー、地域のお祭りなど）… 5 回
○ SNS、地域の広報誌、メディアの活用など… 5 回
○ 国際化対応営農研究会…5 回　※全国を 5 ブロックに分け各 1 回

◆アンバサダーの声を届けられた人数

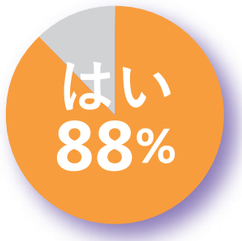
総数　17,080 人

畜産アンバサダー活動によるアンケート結果　有効回答数：2,151 名

1 畜産業に対する印象が良くなった

2 畜産業に対する理解が深まった

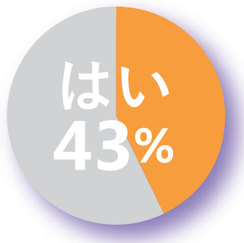
3 畜産業では若者の活躍が期待できる



4 このような発表の機会がもっと必要だ

5 日本の畜産は変わる必要がある

6 将来畜産業に携わりたいと思う



7 私も畜産アンバサダーになりたい

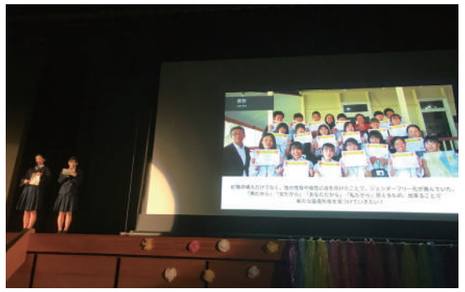
8 海外農業研修に行きたい

畜産アンバサダー活動の事例

学校祭での活動

熊本県立熊本農業高等学校
原田 里佳子 さん　井 真莉亜 さん

文化祭のステージで、全校生徒、教職員へ向けて発表しました。900 名を超える参集者があり、海外研修で学んだことを中心に、畜産業への考えや思い、研修を経て変容していった考え方を自分の言葉で堂々と発表することができました。



学校行事での活動

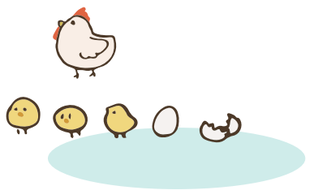
栃木県立栃木農業高等学校
藤沼 大志 さん

文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業の指定校となっている栃木県立栃木高等学校の SSH 研究成果発表にゲスト学校として参加し、プロジェクトでの経験を取りまとめたオリジナルポスターを使って発表しました。同年代の高校生 240 名へ畜産業の魅力を PR する機会となりました。

地域に根差した活動 ①

宮城県加美農業高等学校
泉　海偉 さん

地域交流牧場全国連絡会・中央酪農会議等の団体に支援をいただき、同校が認定を受けている酪農教育ファーム認証牧場の出前型酪農体験活動「もーもースクール」の中で活動しました。地元の小学校生 120 名に対して、このプロジェクトで学んだこと、食と命の有難さ、家畜を大事に育てる仕事の意義、アニマルウェルフェアなど、畜産の魅力について伝えることができました。



地域に根差した活動 ②

群馬県立勢多農林高等学校
大島 那哉 さん

前橋市内のスーパーマーケットとりせんローズタウン店で、勢多農産豚肉の販売を行った際に、プロジェクトのことを取りまとめたオリジナルパネルを作成して活動を行いました。豚肉コーナーに立ち寄られたお客さんへ声をかけ、たくさんの方に興味を持っていただきました。お店のご配慮で、チラシに情報を載せてくださり「新聞で見たよ！」というお客さんからの声は、何よりも励みになりました。

地域に根差した活動 ③

群馬県立勢多農林高等学校
星 まどか さん

前橋舞楽祭の販売会ブースにて活動を行いました。農産物を買いに来られたお客さんに向けてプロジェクトで学んだこと、畜産業界の現状について説明し、畜産に興味のある子どもやその家族が足を止めて話を聞いてくださいました。また、山本 龍 前橋市長（当時）もブースに立ち寄られ、話を聞いてくださいました。

地域に根差した活動 ④

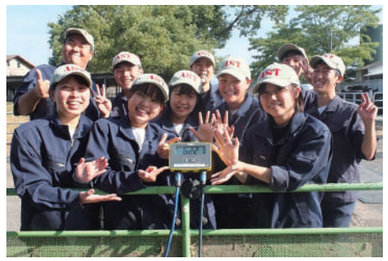
広島県立油木高等学校
田邊 綱汰 さん

地元の中学生 46 名が来校した際に活動を行いました。学校の取り組みの紹介とともに、牛のブラッシング体験を通じて、畜産体験をしてもらっている際に、プロジェクトで学んだこと、畜産の魅力やアニマルウェルフェア関連の話をし、中学生の皆さん、静かに集中して聞いてくれました。この体験を通じて、少しでも多くの生徒が、畜産の道に進んでくれたら嬉しいです。

地域に根差した活動 ⑤

熊本県立菊池農業高等学校
松尾 晏奈 さん

菊池地域農業協同組合 JA 菊池の広報誌『いぶき』11 月号に寄稿した菊農通信の中で、プロジェクトの説明、活動内容の成果などを取りまとめ発信しました。地元紙に掲載することで、プロジェクトを幅広く知ってもらう機会になりました。また、菊池市の福祉まつり「キクロスまつり」で、学校代表として発表し、地元市民へ活動を知ってもらうことができました。



SNS での発信

北海道静内農業高等学校
松本 結愛 さん

SNS ソーシャルネットワーキングサービスの Facebook、Instagram を使って、学校のアカウントから投稿しました。記事の書き方、写真の選定、動画の投稿を工夫することで、投稿するごとに興味を持ってくれる人が増えていきました。1,000 を超えるリーチ数を達成し、投稿には " いいね " がたくさんつきました。

メディアでの発信

長野県佐久平総合技術高等学校
市川 真優 さん

SBC ラジオ「いい JA ん！信州 農業高校レポート」に出演し、アナウンサーの質問に答えるかたちで、プロジェクトから得たことや、今取り組んでいること、自分の将来の夢などを伝えました。また、テレビ信州「ゆうがた Get ！」に生中継出演し、学校の菱池農場牛舎にて搾乳する様子や、畜産の魅力、夢などを話しました。メディアを通じて、畜産の魅力を多くの方に伝えることができました。

国際化対応営農研究会での活動

本会が主催し、全国を 5 ブロックに分けて開催する農業者や農業関係者の学びを目的とした会合、国際化対応営農研究会にて畜産アンバサダー活動を行いました。宮城県、静岡県、京都府、香川県、そして福岡県で開催し、「日本の畜産をもっと元気に！」というタイトルで発表しました。高校生たちは畜産アンバサダーとして、自分の畜産にかける思いや、将来の夢などを会場に集まった皆さんに元気いっぱい伝え、各会場で大いに共感いただき、エールが贈られました。

北海道・東北ブロック

2024 年 2 月 2 日（金）
仙台市中小企業活性化センター

- 舛屋 笑麗奈 さん
- 松本 結愛 さん
- 大久保 愛和 さん
- 大島 那哉 さん
- 吉田 穂乃里 さん

関東甲信静越ブロック

2024 年 1 月 31 日（水）
中島屋グランドホテル

- 泉　海偉 さん
- 河野 花音 さん
- 青木 希恋 さん

東海・近畿・北陸 3 県ブロック

2024 年 2 月 6（火）
京都ＪＡビル

- 下川 弥音 さん
- 市川 真優 さん
- 浅野　椿 さん
- 松尾 晏奈 さん

中国・四国ブロック

2023 年 11 月 24 日（金）
高松東急 REI ホテル

- 藤沼 大志 さん
- 星　まどか さん
- 松江 璃音 さん
- 田邊 綱汰 さん

九州ブロック

2024 年 2 月 1 日（木）
ホテルニュープラザ久留米

- 木村 自然 さん
- 原田 里佳子 さん
- 井　真莉亜 さん

事業普及パンフレット

日本の畜産をもっと元気に！

研修成果を広く普及するため、研修のダイジェストとなるパンフレットを作成し、全国の農業高等学校や関連機関及び企業、農畜産業関係者等に配布しました。

5 畜産業に関する参加者への意識調査

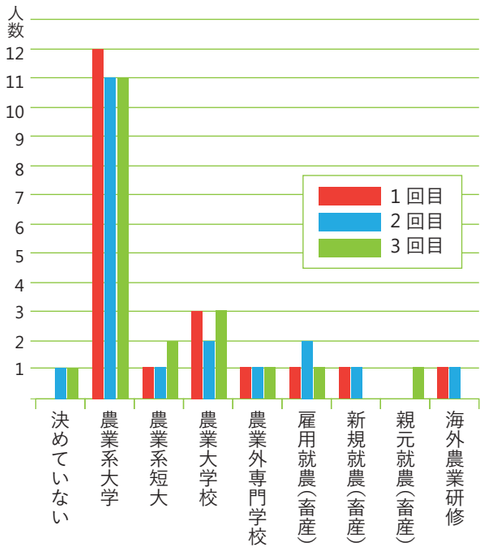
畜産ティーン育成プロジェクトが、参加した高校生 20 名の畜産業に関する考え方にどのような影響を与えたか、アンケートによる意識調査を実施しました。プロジェクトに参加した段階（初期）、オーストラリア研修を終えて海外の畜産を知った直後（中期）、そして、全てのプログラムを完了した段階（終期）と 3 回に分けて実施しました。

1 回目：プロジェクト参加者として選抜された時（6 月上旬）
2 回目：海外研修から帰国直後（8 月中旬）
3 回目：畜産アンバサダー活動後（3 月上旬）

1．高校卒業後の進路「プロジェクトは、進路を決めるきっかけとなった」

3 回のアンケートを通して、農業系大学や農業大学校への進学を考えている人が最多数でした。農学部や生物資源科学部など畜産系学科がある、酪農学園大学、帯広畜産大学、鹿児島大学などへの進学を希望していました。アンケートの度に変化が生じていますが、高校での進路相談などを通じて具体的な進路計画を立てる中で、自分に最適な方向性を見出していってた様子が見受けられます。

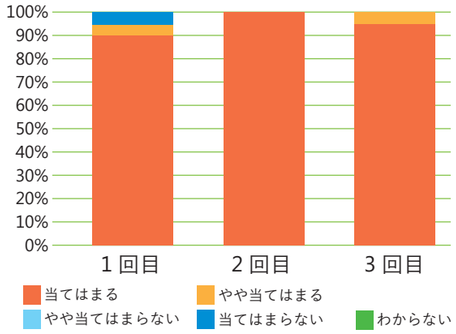
1．今 考えている高校卒業後の進路は？



2．畜産はかっこいい仕事である「苦労＝やりがい」

畜産業を学ぶ高校生たちなので、当初から畜産業に対して“かっこいい”というイメージがあったように見受けられます。海外研修から帰国直後の意識調査では、20 名全員が「当てはまる」と回答しました。普段、学校の授業で畜産を学ぶことによって、大変さや苦労と同意義で、やりがいや誇りを感じている様子もアンケートのコメントから読み取ることができました。

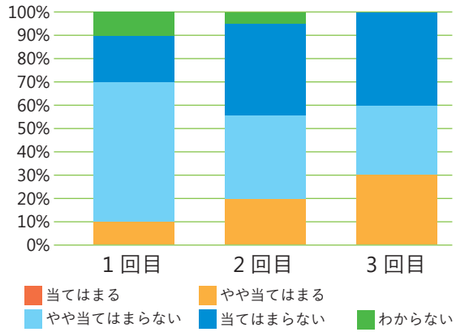
2．畜産はかっこいい仕事である



3．畜産業は人気の職業である「マイナスイメージが拭えない」

畜産業はかっこいい仕事と回答しつつも、畜産業が人気であるかについては「当てはまらない」という回答が多くなりました。周りに畜産農家や就農を目指す人がいなかったり、きつい仕事、人に知られていない仕事というネガティブな印象を拭いきれない印象があります。現状から考え、体験的に畜産業はなり手が少なく、目指す人がいないと考えているようにも見受けられますが、畜産アンバサダー活動時にクラスメイトにアンケートを取った結果、3 割の人が畜産業に興味を持ってくれたことや、将来性や重要性を加味して、希望的観点から人気があるとした人もいました。

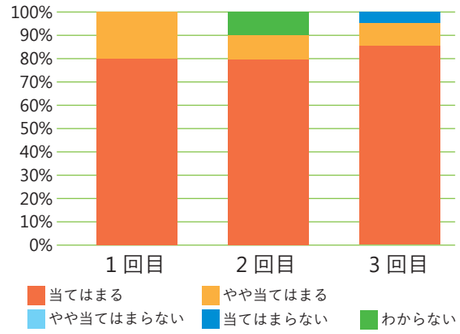
3．畜産業は人気の職業である



4．畜産の生産現場で働いてみたい「尊敬する父を超える農家になりたい」

畜産業への就農意識は、当初から高い数値を示していますが、畜産業に就くことが将来の夢、何年か先に就農したいという漠然とした思いを含んでいるようです。中には、畜産業に熱心に取り組んでいる家族の姿を見て畜産業が大好きになり、憧れである父の牧場を後継し、尊敬する父を超えるために畜産農家を目指している参加者もあり、必ずしも具体的なビジョンを持たない中での回答ではないと考えられます。一方で、オーストラリアの畜産現場や畜産アンバサダー活動を通じて「畜産現場で働くより、畜産農家をサポートする職業に就きたい」と考えを改める人もいました。

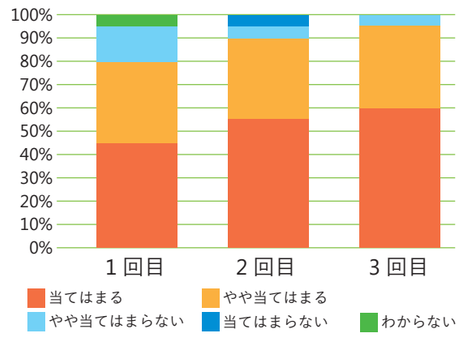
4．畜産の生産現場で働いてみたい



5．畜産を支える仕事に興味がある「畜産業を外から支えることも魅力的な仕事である」

畜産業への就農を目指している人が大半を占める一方、畜産業を支えている様々な仕事にも興味がわいたようです。農業高校の教諭、獣医師、飼料会社、乳業メーカー、農業機械会社、畜産の公務員等の記述がありました。当初は、家畜に直接触れる現場の仕事に強く惹かれていた人も、このプロジェクトへの参加をきっかけに様々な立場から畜産に係る職業があり、それらが全て一緒になって畜産業をつくっているということに気がつき、畜産業を支える仕事にも魅力を感じたようです。

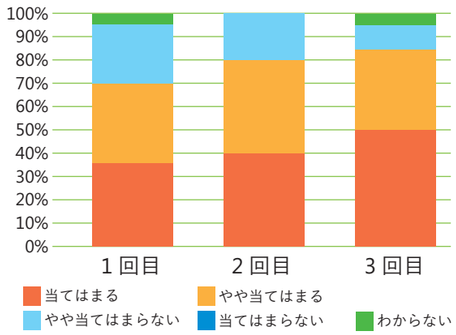
5．畜産を支える仕事に興味がある



6．将来 畜産業に就農するための道筋を理解している「プロジェクト参加がキャリアパスを考えるきっかけになった」

今回のプロジェクトには 20 名の内、3 年生 9 名、2 年生 11 名が参加しました。将来の進路を決める多感な時期でもあり、畜産業を本気で志すメンバーが多いこともあって、畜産のキャリアパスについては理解度が高いようです。時間の経過とともに「当てはまる」の割合が徐々に増えていますが、プロジェクトの中での学びが畜産を目指すという意識を強め、少なからず具体的な進路選択になったと思わせるコメントもありました。

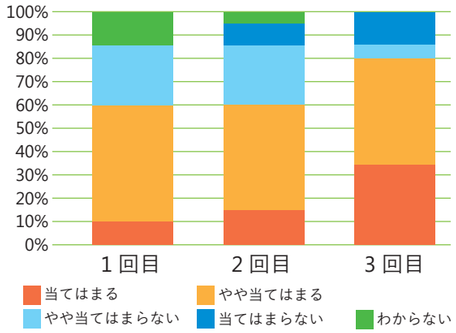
6．将来 畜産業に就農するための道筋を理解している



7．畜産業界には就職しやすい「より良い条件であれば畜産も選びたい」

1 回目のアンケートでは「分からない」を選ぶ人がいました。前出の項目のアンケート結果の様に、ネガティブな情報を元にした畜産業のイメージが定着している一方で、実際の畜産業界を知らない、どのように畜産業に就くのかが分からないというのが本当のところのようです。一方で、実家が畜産業を営む参加者は、この問いに「当てはまる」と回答するケースが多く見受けられました。2 回目のアンケート以降では、オーストラリアの研修を通じて、畜産で活躍する女性や若い世代の意識を目の当たりにしたことで、職業として選択の余地があることがはっきりし、他の職業を選ぶのと同じように、作業が高度にオートメーション化され、従業員の負担を軽減する機械化が導入されていたり、しっかりとした福利厚生を整えている法人であれば就職したいと考えを改めた人もいます。

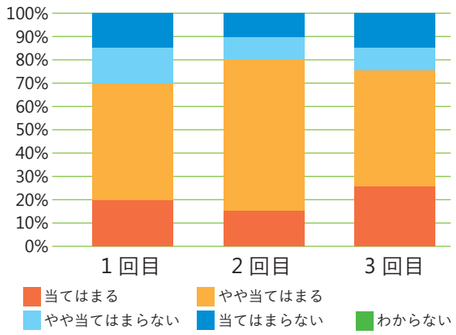
7．畜産業界には就職しやすい



8．畜産農家や従業員になることに不安がある「学んだことにより心境が変わる」

グラフ上は数字に大きな変化が表れていませんが、1 回目に「当てはまる」を選んでいた人が「やや当てはまらない」を、「当てはまらない」を選んでいた人が「やや当てはまる」を選ぶこともあり、偏向性のない内面的な変化があった設問でした。最初に不安を感じなかった人が、プロジェクトでの学びを通じて畜産業を行うことに責任を感じて、結果的に不安になったり、最初は良く分からない中でイメージしていた不安が、学びを通じて不安を拭うことができた様子が見受けられました。心境の変化は、学んだことをどのように受け止めたかにもよると考えられます。

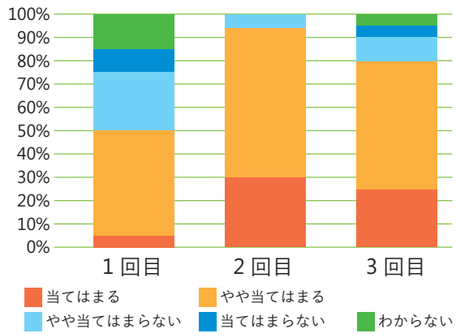
8．畜産農家や従事者になることに不安がある



9．どうやって畜産業で儲けるかが分かる「実感を伴う経験が経営マインドを醸成する」

当初は「当てはまる」の数値が少なかったものの、2 回目のアンケートでは大きく増えています。また、「やや当てはまる」を組み合わせると 9 割以上の参加者がポジティブな回答をしました。オーストラリアの農家が大きな家に暮らしていたり、休暇をしっかり取って休むことができるのは、安定した収入があるためで、その情報は大きなインパクトがありました。成功例を学び実感を伴う経験が、経営マインドを醸成すると感じさせられます。また、畜産農家の子弟では家族内で経営に関する会話があり、より良いビジネスを心がけることで十分に儲けが出るのではないかと考えるようになったケースや、逆にさらにしっかり経営を学ばなくては、しっかり稼ぐことが難しいことにも気がついたケースもありました。

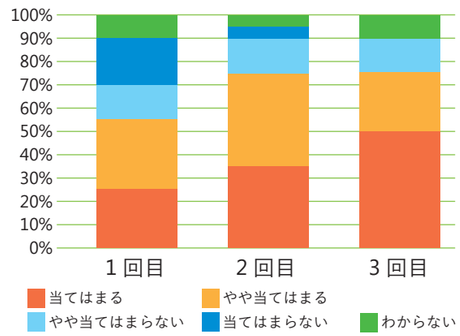
9．どうやって畜産業で儲けるかが分かる



10．どうやってワークライフバランスをとるべきか考えがある「心の充実や幸せが家畜の幸せに」

高校生にとって仕事と家庭の両立や労働環境の改善などは、少し遠い話しかもしれませんが、プロジェクトを通じて、一生懸命働くために十分な休みがあることや、家族との時間を大切にするための工夫を怠らないことの重要性に気がつきました。
オーストラリアの研修を通じて、出産時期を合わせる季節繁殖や、放牧による省力化で休みを取りやすくしていること、畜産現場に機械化・自動化を導入し、農作業時間を短縮するなどのヒントを得ました。お金にも体にも余裕があると精神的にも余裕が生まれ、仕事にもメリハリが生まれます。人が幸せな気持ちで経営ができれば、家畜の幸せも保障されていく、そしてより経営が安定していくというお話しもオーストラリアで伺いました。

10．どうやってワークライフバランスをとるべきか考えがある

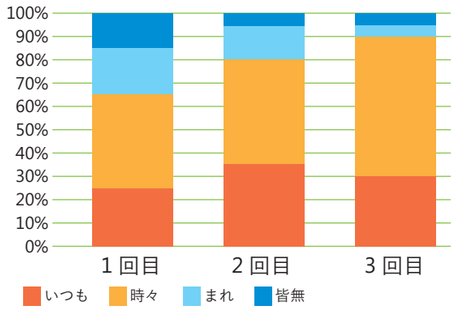


11．自分の口に入るものが国産の畜産物かどうか意識しているか「消費者としての畜産物への意識」

当初は国産かどうかを気にせずにいた参加者の中にも、オーストラリアの研修を経験した後に意識が変化した人が多くいました。実際に、オーストラリアでファームステイをした際、ホストファミリーと一緒にスーパーへ行き農畜産物の話題になったり、普

段輸入品として食べているオーストラリアの牛肉などを国産として食べる機会があり、色々と考える機会となりました。帰国後、国産かどうかを意識するようになったという回答がありました。さらに、畜肉の部位によって原産国が異なることなどにまで、着目するようになった人もいます。生産者としての意識も磨かれましたが、消費者としての意識も刺激を受けたようです。国産の魅力に気がつき、スーパーでの買い物がより楽しくなったと回答する人もいました。

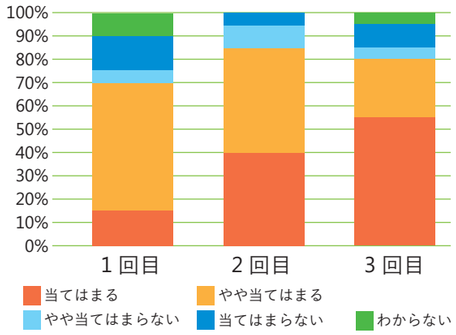
11. 自分の口に入るものが国産の畜産物かどうか意識しているか



12. 外国語を使う現場で仕事がしてみたい「海外の人と話すことは不安だけど挑戦したい」

プロジェクトを通じて「当てはまる」の回答が伸びていきました。海外研修時に滞在したファームステイ中のホストファミリーとの会話や、マランダ高校の同年代生徒と、自分の力だけでしっかりとコミュニケーションが取れた自信、自分の英語が相手に伝わったときの達成感、逆に相手が何を言っているかが分かったときの充実感があったと考えられます。今後も英語を使って仕事がしてみたい、外国語をブラッシュアップしたいと希望する人がたくさんいました。不安だけど、挑戦してみたいという人もいます。海外研修から帰国直後には、別に設けた「海外農業研修に参加したい」という問について、20 名全員が「当てはまる」と回答しました。外国の方々とのコミュニケーションに前向きになれる若者が多いことは、日本が世界と向き合う未来を描く重要な要素ではないでしょうか。

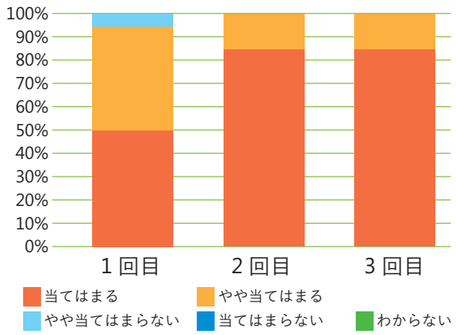
12. 外国語を使う現場で仕事がしてみたい



13. 畜産の魅力について自信をもって語ることができる「畜産アンバサダーとしてこれからの活躍に期待」

元々、畜産が大好きな高校生たちなので、当初から「当てはまる」の回答が多数ありました。海外研修から帰国後は、参加者同士の仲が深まり、帰国直後の研修成果報告会に向けた発表の取りまとめや意見交換により、畜産アンバサダーとしての意識が高まっていきました。畜産アンバサダー活動では、1,000 人規模の会場での発表や、参加者からの質疑応答に対して自信をもって受け答えができたりと、畜産の魅力をしっかりと自分の言葉で表現し、相手へと伝えることができました。

13. 畜産の魅力について自信をもって語ることができる



意識調査については、記述式のアンケートも実施しました。畜産アンバサダー活動後に行った 3 回目のアンケートについて、設問に対する回答をご紹介します。

14. 日本の畜産業の魅力は何だと思いますか？

- 安心安全で高品質
- 和牛ブランドが各都道府県にあり、全世界から日本の和牛は大変人気である
- トレーサビリティシステムにより、牛がどう育てられたかが分かり、安全が保障されている
- スーパーで売られている国産牛には耳標の個体識別番号が書かれていて、安心して食べることができる
- 品質の良さ、大国にも負けない生産量
- 畜産業にプライドを持ち働いている農家さん
- 自分が一生懸命に育てた個体へ評価がされる
- 家畜に感謝して愛情を注ぐことで見返りがある
- 良い家畜を育て値段が高くなったとき、嬉しくなる
- 一頭一頭の個体管理が行き届いていて、良い肉質、乳質ができている
- 限りある土地を有効活用している
- 畜産物が食べ物として流通していて、食を支えている
- 唯一無二の職である
- 消費者の食を支えているという誇り
- 環境とともにあり、人間の原点のような職業である
- 日本の畜産業に多くの国民が安心と信頼を寄せている
- 今までの国産牛を飼育してきた農家さんの成果
- いのちを感じ、命を育て命に繋げる
- 限られた土地で畜産物の生産に励んでいる
- 飼料が高騰しているが、自給飼料をつくる農家が増えている

15. 日本の畜産をより良くするために大切なことは何だと思いますか？

- 畜産業への協力と関心と理解
- 畜産をやっている人もそうでない人も、すべての人で畜産業を勧めていく
- 若者の畜産業従事者数を増やす
- 畜産の大切さや家畜の有難さを消費者も含めて当たり前に知ること
- 非農家の人に興味を持ってもらえるような機会をつくる
- 若者を含めたすべての人に生産者の努力を知ってもらう
- 畜産業に対してもっと関心を持ってもらう
- 畜産のマイナスなイメージを変えて、畜産業がかっこいい仕事になる
- 人とのつながりを大事にする
- Instagram など SNS で、畜産の良いイメージの情報発信を行う
- 飼料自給率を増加させる
- 政府の補助等で、飼料コストを減少させる
- 政府による農業支援の広がりや広報
- 性差別を解決し、男女を問わない農業従事者を増やす
- SDG ｓの達成
- 時代に合った新しい発想力
- 効率を良くするために他の国の技術や、やり方を取り入れる
- 動物への愛情を忘れない
- ワークライフバランスを確立し、畜産業の担い手不足問題を解決する
- 農福連携

6 参加者の報告

引率教員
大阪府立農芸高等学校
資源動物科　指導教諭
土肥　正毅

1．はじめに

私は現任校の大阪府立農芸高校で、ウシと出会い、畜産を教えることになりました。赴任当初は、分からないことだらけで、少し前に習得した知識や技術を伝えるという授業をしていました。それから18年の教鞭生活で、ウシの飼養管理の奥深さ、飼料栽培やサイレージ調製の面白さ、6次産業化の難しさなど、たくさんの経験をして、多くのことを勉強させていただきました。分からないことは今も多々ありますが、知識や技術と共に、ウシや畜産の面白さも一緒に伝えようと授業をしています。

畜産ティーン育成プロジェクトを知ったきっかけは、2018年の第1回ニュージーランド研修に参加したいと申し出た生徒からでした。海外研修の渡航費を日本中央競馬会様に負担していただき、「こんな魅力的な畜産研修に参加できる生徒が羨ましい」と思っていました。その頃から、このプロジェクトの引率教員として、いつか携わりたいと考えていました。この度、その思いが叶った際は、とても嬉しかったと同時に、責任の重さも感じました。

2．研修内容

全国から選抜された20名の高校生たちは、事前研修、海外研修、帰国時研修を経て、学んだ知識や畜産業の魅力をPRすることを目的に、プロジェクトに参加しました。海外研修帰国直後に行ったグループごとに定めたテーマによる研修成果発表を皮切りに、畜産アンバサダー活動が始まりました。研修内容を次の3つに分け、述べさせていただきます。

（1）オンライン事前研修
（2023年6月12日～16日、7月27日）

生徒たちは5人1組のグループを結成し、5日間のオンラインでの事前研修が始まりました。その際、5人それぞれの任務を明確にして、グループの仲間意識を持たせる工夫がありました。毎回2時間の事前研修では、日本の畜産業に関する講話後、グループ別ワークショップを行い、発表、振り返りを行いました。オンライン上で出会ったばかりの高校生が、ディスカッションを行い、その内容をまとめて発表するクオリティーの高さに驚いたことを覚えています。そして、7月27日に渡航前オリエンテーションを行い、海外研修への心構えや準備物等の話を聞きました。計6回のオンラインでの事前研修は、海外研修に向けた知識や仲間意識の醸成に大きな意義があったことに間違いありません。また、講師の方々をはじめ、多くのサポートがあったからこそ、生徒たちは「日本の畜産業」に対する知識を深め、海外研修への意欲が高まったと考えています。

（2）海外研修（2023年8月6日～15日）

オーストラリア研修への期待や不安、それぞれが大いに感じたことだと思いますが、事前研修やSNSでの交流のおかげか、集合場所で生徒たちは以前からの知り合いのように、会話をしていました。そして、約7時間のフライトを経て、オーストラリアでの研修が始まりました。畜産を営む農場や施設の見学では、大きな刺激を受けました。見渡す限りの広大な放牧地にて、牧場主が話される英語に耳を傾け、話の内容に関する質問がいくつも飛び交いました。その度に、通訳のあけみさんが丁寧に対応してくださいました。また、ファームステイにおいて、生徒たちはホストファミリーと英語でコミュニケーションを図ることに努めていました。

海外研修の10日間では、畜産現場の見学以外に、農業や日本語を学ぶ現地高校生との交流等、とても有意義な時間を送ることができたと感じています。これらの経験を通して、「オーストラリアの畜産業」に関する知識を深め、英語学習への意欲が高まったと考えます。

（3）帰国時研修とグループ別発表
（2023年8月16日～17日）

帰国後の研修では、4グループの発表会に向けての準備が本格始動しました。グループごとに、メンター、引率教員が付き、何度も話し合い、発表内容の改善に努めてきました。生徒たちは、発表原稿やスライドの作成に取り組むことで、「日本とオーストラリアの畜産業の違い」を実感し、日本の畜産業を活性化する手段を考察したと言えます。

①「畜産イメージアップ～人にも牛にもやさしく～」と題して発表したチームは、畜産のマイナスイメージを変えたいという思いを抱き、畜産イメージアップカンパニーの立ち上げ、クラウドファンディングの活用等、様々なアイデアを提案しました。

②「創造する畜産スタイル～消費者と創るおいしいお肉～」と題して発表したチームは、生産者と消費者との信頼が大切であり、この信頼関係で経済を回すことができると主張し、レスポン牛、学校出張等、斬新なアイデアを考えました。

③「若者が働きやすい経営～ライフ・ワーク・バランスの確立～」と題して発表したチームは、家族の大切さを訴え、「週休3日・1日5時間労働」を提案し、ライフ・ワーク・バランスの確立に向けた具体策をたくさん挙げてくれました。

④「若者中心の畜産～若者の畜産従事者を増やすために～」と題して発表したチームは、教育ファームの普及・充実を提案し、YouTubeと漫画を活用することで、若者の畜産従事者を増やし、畜産業の活性化につなげたいと主張しました。

3．謝辞

日本中央競馬会および国際農業者交流協会の関係者の皆様には、このような素晴らしい事業を提供していただき、本当にありがとうございました。「百聞は一見に如かず」このたびのオーストラリア畜産研修を経て、この故事成語が相応しく感じております。本事業の大部分の資金を賄っていただいた日本中央競馬会様には、深く感謝申し上げます。

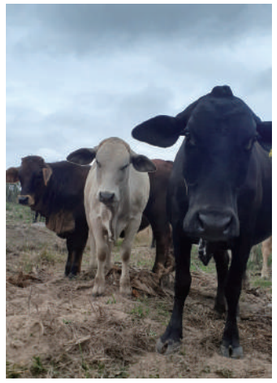
海外研修後、高校生たちは、各個人が掲げたキーワードをもとに畜産アンバサダー活動を続けています。私も担当している授業等で、畜産アンバサダー活動を行っております。オーストラリアの畜産現場を見て体験して学んだ経験は、一生忘れることはありません。だからこそ、この経験ができるように後押ししていただいた周りの方々に、感謝することが大切です。そして、高校生たちも私も、「日本の畜産業をもっと元気に！」していく一員として、これからも携わっていけたら素敵だと思っています。

畜産アンバサダー
北海道帯広農業高等学校
酪農科学科３年
舛屋　笑麗奈

1．テーマ
若者が働きやすい経営

2．キーワード
ICT

3．キーワードのつながりと考察
「若者が働きやすい経営」というテーマで、「ICT（Information and Communication Technology の略称で、情報通信技術）」について考えたとき、最初は ICT を導入するためのコストは掛かってしまうが、後継者不足など、日本の畜産現状から考えると仕方のないことで、導入してしまえばスマートフォンやタブレット端末などで牛の監視ができるため、作業の省力化・軽労化、労働時間の削減や人件費を削減できるのではないかと考えていました。また、ICT を使用することで、搾乳や給餌、給水、一日の増体重や発情発見システムなどがあるため、牛体管理が可能になり経営が楽になるだけでなく、疾病検知システムなどを利用することで、病気や事故の早期発見につながり、生産性の向上や安定化を図ることができると考えていました。
実際にオーストラリアで研修を行ってみると、後継者不足など、日本と畜産の現状はあまり変わらないのにも関わらず、ICT を導入している農家さんが少なかったと思いました。例えば、日本では一つの農家さんで搾乳ロボットや分娩カメラ、首輪装着式センサーなど、いくつかの ICT を導入していることが多いのに対して、オーストラリアの農家さんでは導入していないところもあれば、導入しているが利用している技術が少ないことが分かりました。また、イヤータグという技術では、内蔵されている電子チップでせりの際に持ち主の変更ができたり、バーチャルフェンスという技術では、柵を設置せずに家畜の行動範囲を制限することができるなど、日本には普及していない ICT を導入していましたが、オーストラリアでは ICT よりも、労働時間が短いことによって経営者が働きやすくなっていました。ほとんどの農家さんが放牧を行っており、牛が野生に近い状態で飼養されているため、ICT を多く利用して管理せず、労働時間を削減しているということを知りました。
畜産アンバサダーとして、これから学校や地域の人に今回オーストラリア研修で学んだことや、オーストラリアでの経営方法から、これから先、私たちが経営者になった際に、どのような経営をしていく必要があるのかなどを、多くの人に知ってもらう必要があると思います。また、将来、私が経営者になった際には、オーストラリアほどの放牧は難しいかもしれませんが、放牧を取り入れたり、ICT を導入して労働時間を削減し、若者が働きやすい経営を実現していきたいと考えています。



4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアでは、地域や気候などに合った種類の牛を飼養していました。例えば、日本ではホルスタイン種やジャージー種、黒毛和種など飼養されている牛の種類が限られているのに対して、オーストラリアでは、ブラーマンやドラウトマスター、シャロレーなど放牧を行っている地域や気候に合わせて飼養している牛の種類が違いました。日本でも牛の品種改良をして、北海道や沖縄などそれぞれの気候に適した牛の種類を飼養することができれば、付加価値も付き、もっと日本の畜産が良くなると思いました。また、オーストラリアで「せり」を見た際に、牛を購入する人が重視するポイントが日本と違うことに驚きました。日本では、体重や怪我、病気などが値段に関わっていることに対して、オーストラリアでは購買者が牛を視認し、体の大きさや性別などを見て、希望の買値と予算をもとに入札していました。そして、オーストラリアでは人工授精よりも、自然交配が主流なためほとんどの雄牛が去勢されていないということを知りました。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
オーストラリアと日本の畜産の違いを知ることができたので、さらに日本の畜産が良くなるように今後どのような取り組みをすれば畜産が盛り上がり、若者に興味を持ってもらえるかの提案を広めていきたいです。なぜなら、現在の日本では、深刻な後継者不足に悩まされており、若者が畜産から離れて行ってしまっていることや畜産はきつい・汚い・危険などのイメージがあるため、やりたいと思わない人が多くいます。そのため、労働時間の削減や農家さんにお金を給付するなどを行い、現在、畜産業をやっている人やこれから畜産業に携わる人、畜産を知らない人がやってみたいと思えるような環境づくりを広めていきたいです。
そうすることによって、現在、畜産業に携わっている方が働きやすくなるだけでなく、経営がしやすくなり、離農する農家さんを減らすことができると思います。また、これから畜産を始める方は、新規就農者向けの給付金や離農者から土地を貰うことで、牛舎を建設費用や機械の購入にかかる費用などを抑えることができると思います。さらに、畜産に対するイメージを変えることによって、共進会や家畜市場などの畜産関係の行事などに、畜産を知らない人や進路が決まっていない中学生や高校生などの若者が参加することで、日本の畜産が今よりもさらに盛り上がっていくと思います。
畜産業に携わっている方だけでなく、これから畜産業を始める方も始めやすく、働きやすい支援やサービスを充実させ、離農者を減らし、後継者になりたい人や新規就農を目指す人を増やしていくことです。また、牛が今よりもさらに健康で、牛を第一に考えた経営を行うことです。アニマルウェルフェア認証農場を増やし、命が終わる最後の時まで家畜のストレスや痛みを減らすことや、放牧を行うことで牛が野生に近い状態で生活できるため、牛も人間も幸せに暮らすことができる農場を増やすことです。

6．私の夢、これからやりたいこと
私は将来、祖父が行っている和牛繁殖農家を継ぎたいと考えています。そのために高校卒業後は、十勝の和牛農家さんで、2 年間ほど研修をして知識や経験を積みたいです。また、発情発見後すぐに人工授精ができるよう、家畜人工授精師の資格を取得してから実家へ戻りたいと思っています。現在、祖父は小規模で和牛繁殖を行っているため、私が経営者になった際は大規模経営を目標にし、放牧も取り入れていきたいと考えています。また、2027 年には北海道の音更町で和牛の全国和牛能力共進会が行われるので、自分の牛を出品し、日本一になりたいです。そして十勝和牛の名を全国に轟かせたいです。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私たちが目指している畜産という仕事は、牛乳やお肉を生産する仕事であり、生きていくうえで必要不可欠な栄養素になります。人の命を支える畜産業は、人と人をつなぐ素晴らしい職業であるということに誇りを持ち、未来の日本を担う人材として、新しいアイデアと技術を取り入れ畜産を発展させていきましょう。
そして、様々な畜産の在り方を学ぶため、色々な国や地域で経営スタイルや働き方など知識や経験をたくさん積むことが大切だと思います。
日本の畜産がさらに良くなるよう、頑張っていきましょう！！

畜産アンバサダー
北海道静内農業高等学校
食品科学科３年
松本 結愛

1．テーマ
創造する畜産スタイル

2．キーワード
女性の畜産進出

3．キーワードのつながりと考察
「創造する畜産スタイル」というテーマで「女性の畜産進出」を考えたとき、畜産を創造することで女性でも働くことができ、日本の課題である担い手不足に貢献できるのではないかと考えました。今の畜産業は、「担い手不足」と課題認識しているにもかかわらず、新しい仲間を増やす具体的な動きが少ないように思います。こうしたことから、誰もが畜産業で働きたくても働けない現状ができているのではないかと思います。そこに今までとは違う新しい考えを増やしていくことで、老若男女問わず、誰でも働けるような環境ができれば、日本の担い手不足を解決できるとともに、女性でも働くことができるのではないかと思います。
このテーマとキーワードから導かれた考えは、「世の中がこうだから」と固定概念にとらわれず、自分や周りの人が楽しく働ける畜産スタイルをつくりあげることが、女性でも働ける畜産業につながるのではないかと考えます。実際にオーストラリアでの研修で、農家それぞれが、女性が働くことに対して誰も否定的ではありませんでした。それは政府が、女性が働けるような環境づくりを進めていることや、農家の方もそれを理解することで、国籍や性別、年齢にこだわらず、誰もが従事できる畜産業のスタイルを創り上げることにつながっているのではないかと思いました。ただ周囲の変化を待つのではなく、自ら行動を起こして、挑戦して、経験していくことも大切だと思います。
今回の研修の成果を反映させるためには、オーストラリア研修で学んだ、気候に合わせた飼育管理方法や、牛と環境に配慮した経営、そして、コスト削減などについて、SNS や、畜産ティーン育成プロジェクトのような海外研修活動で発信していくべきだと思います。

SNS は、今の現代社会に浸透しています。実際に私も Instagram で畜産の魅力を発信したところ、牛が好きな人が増えたり、興味を持つ人が多くなり、たくさんの畜産農家とつながることができました。また、畜産ティーン育成プロジェクトのような活動を行うことで、畜産に興味を持つ人が増え、影響力も高まると思います。今の日本の畜産に、今回の研修成果を反映させるためには、情報の入れ替わりが早い SNS を活用して発信、このプロジェクトの名を広め、そこでも発信していけばいいと考えます。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
日本の遺伝的改良と、オーストラリアの遺伝的改良では大きく違いがあることです。日本は、人工授精や受精卵移植での繁殖方法を行っています。そのため遺伝的改良が進むのが早く、産子も大きくなる傾向が強くなっています。それは親牛に大きな子牛を産ませて、大きく育て、たくさんの枝肉をとりたい傾向にあるからだと感じています。同じ日本国内でも、北海道と九州では大きく気候が異なりますが、飼っている品種はほぼ同じで、環境や気候というよりも肉質改善がメインで考えられています。今は良くても、今後 50 年、100 年後を迎えたとき、そのうち遺伝子や系統が偏ってしまい、「和牛」という歴史が終わってしまう可能性があります。
オーストラリアでは、耐暑性などに特化した牛を育てて枝肉をとるという傾向にあると気づきました。オーストラリア国内でも雨季と乾季があり、その気候に合わせ、暑さや寒さに強い牛、虫に強い牛をつくり交配させていました。日本もオーストラリアと同じように肉質改善だけではなく、暑さに耐えられるような牛、虫に強い牛などをつくり交配していく必要があると思いました。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
「畜産の魅力や生命の素晴らしさ」と、「女性も畜産業でも働くことができる」という二点です。
そのために SNS、特に Instagram を活用して広めていきたいと思っています。生産者が毎日愛情を込め、時間をかけて育てた乳牛や肉牛がいることで、私たちの食生活が支えられており、その裏には、子牛や子豚、鶏などの尊い生命の誕生があるからです。しかし、消費者は、生産者の畜産現場を知らない人が多く、さらには、どのようにして私たちの食卓に畜産製品が並ぶのか知らない人たちが多くいます。
また、オーストラリアでの研修で、視察研修した畜産農家さんに、「女性でも畜産業で働くことができると思いますか？女性が畜産業で働くことについてどう思いますか？」という質問をしました。すると、どの畜産農家さんも、女性が働くことを否定する人はいなく、むしろ、「もっと働いてもいいと思う」「女性の方が子牛の育成や観察に優れている」と仰っていました。このお話を聞いたときに、私は強い自信をもらうとともに、同じ想いを持っているからこそもっと日本全国の畜産業で働くことを目指している人たちに伝えたい！自信につながってほしい！と思いました。

今の日本には、これからの畜産業界を支えていく若者が必要です。そのためには、たくさんの時間がかかってしまうかもしれませんが、私たちが経験してきたことを若者目線で、畜産アンバサダーとして伝えていきたいと思います。
女性でも何の問題もなく畜産業に携われるようになれば、日本の畜産業で課題になっている「担い手不足」の解消が期待できると思います。また、女性ならではの観察眼などを生かして、一頭一頭の畜産動物の価値を高め、経営を向上させることができると思います。今の日本の畜産業は、男性が経営する農家が多く、働き手として男性ばかりが求められているようにも見受けられます。そこに、女性が畜産業に進出することで働き手が増加し、高齢の離農者が増えても、若者の新規就農者でカバーできると考えます。消費者目線で考えることができる、家畜への接し方が丁寧であり母性がある、畜舎などの清掃が隅々まで行き届くなど、男性とは異なる女性ならではの視点を生かすことで、優秀な経営管理を実現できたり、おいしい肉を世界各国に届けることができると思います。これらを踏まえて、女性の進出により日本の畜産業は、「和牛」というブランドにもっと価値を付けることができ、畜産に魅力を持つ人が増えたり、日本の様々な課題に柔軟に対応できるのではないかと考えます。

私が考える次世代の畜産業は、女性でも男性でも若くても高齢でも誰もが従事することができる業界です。なぜなら、私は幼い頃から、「女性に牛飼いはできない」と言われてきましたが、オーストラリア研修を通して、そうではないことを確信したからです。実際に、オーストラリアでは女性が働けるように政府が呼びかけを行い、周りは周りのことを理解し、お互いがお互いのことを理解し合っていました。単純にオーストラリアの真似をするのではなく、日本でも似たような、日本に合ったかたちの対策を取れば、男性は、男性持ち前の能力を生かして力仕事や機械操作を、女性は、女性の持ち前の能力を生かし、家畜への接し方が丁寧であり母性があるということから、お互いがお互いの足りない部分を補っていくことで、今までとは違う畜産業ができあがると思います。今の日本の畜産が、一人一人の考えや理解が変わり、誰もが働けるような環境づくりをすることで、社会全体の士気がひとつになってまとまっていくのではないかと考えます。このことから、私は、日本の次世代の畜産業は、時代の発展に合わせた畜産業をつくることにより、誰が働いても否定されることなく、お互いがお互いを助け合うことで、老若男女問わず従事することができる畜産業になると思います。

6．私の夢、これからやりたいこと
私の将来の最終的な目標は、実家の和牛繁殖経営を継ぐことです。同時に、2027 年に北海道で行われる全国和牛能力共進会に牛を出品したいと思っています。そのために、高校卒業後、鹿児島県立農業大学校に進学し、肉牛の生理生態や基礎的な管理技術を学ぶだけではなく、人工授精師や大型特殊免許、農耕車の牽引免許など資格も取得します。また、鹿児島県は、和牛日本一とも言われるぐらい肉牛の生産が盛んな県なので、共進会に出品する牛の調教方法や牛づくり等、北海道では学べないことをたくさん吸収してきたいと思っています。そして、北海道に帰って家業を継ぎ、鹿児島県で学んだ技術や知識を地域の農家の皆さんにも伝え、一緒に良い牛を生産し、共進会に出品したいと思います。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は幼い頃から、周囲の農家の方から「女性は畜産業で働けない」と言われてきました。でも絶対にそんな言葉に負けないでください。自分が心の底からやりたい！と思っている畜産業の夢を絶対に諦めないでください。畜産業に従事することは本当に素晴らしいことです。
どんなに辛いことがあっても、苦しいことがあっても、「あの子頑張ってるね」「あの子すごいね」と認めてくれる人たちが絶対にいます。誰も最初から完璧に上手にできる人なんていません！何事にも挑戦して、たくさんの経験を積んでこその畜産業だと私は思っています。

畜産アンバサダー
北海道倶知安農業高等学校
生産科学科２年
大久保 愛和

1．テーマ
畜産イメージアップ

2．キーワード
畜産教育

3．キーワードのつながりと考察
「畜産イメージアップ」というテーマで、「畜産教育」をキーワードに、オーストラリアの中学校や高校での畜産教育を考えたとき、日本と同じように農業体験実習や農家さんからの講演で教育がされているかと予想しました。農業体験実習では、放牧についてグループに分かれて、長期的な実習をやっていそうだなと考えていました。理由は、オーストラリアの方は農家出身の人が多いと聞き、農家出身の方の多くがあまり他の農場を任されることがないと考えたからです。また、農家さんの講演を聞く教育をしていると思った理由は、実習のことだけでなく、オーストラリアの歴史と一緒に畜産の歴史や現状も学ぶことで、卒業後に畜産に関わる仕事に就かなくても、人生の何処かで関わる機会が生まれた際に、話を聞くことがよい経験となると考えたからです。
実際にオーストラリアで研修を行ってみると、今回、現地で出会った方たちが、畜産のことが大好きだということが、一番よい教育につながっていると考えました。理由は、オーストラリアで私が出会った人たちはみんな、酪農や畜産について常に興味を持っていたことです。その楽しそうな話を一緒に聞いていると、その雰囲気だけで、私は畜産を今まで以上に好きになりました。私の周りでは畜産を職業選択に入れる人が少ないです。しかし、今回のように周りの人たちが畜産のことが好きで、農家や経験者ばかりだと、自然と自分も畜産をやりたいと思え、将来の職業の選択の一つになると考えます。私が研修前に想像していたような体験や講話は、気持ち的に畜産を好きになれない人が多くなると予想されるからです。
今の日本の畜産には、まずは私たちが学校をあげて地域の農家さんと一緒になって盛り上げることで、反映していけたらいいなと考えました。オーストラリアからの帰国直後に行った研修成果報告会でも発表したように、まず私たちが行動することで、活動の輪が広がり協力してくれる人が増えていくと思います。結果的にその影響で、周囲の大人の方たちへの畜産への関心を高めることができると思っています。
私たちの畜産班は、地域の和牛生産、特に肥育では、農家さんの検証圃場として一緒に活動しています。その牛舎に定期的に畜産に興味のある高校生を集めて、地域の農家さんと一緒に取り組みを話し合ったり、農家さんを訪問し、経営のこだわりやその取り組みを広めたいと考えています。今は様々な活動を紹介するツールがあるため、一緒になって考え「畜産が好き」という気持ちを発信していきたいと思います。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアの研修で私が一番関心したことは、働いている方たちが、自分の好きなことやプライベートを大事にしていることでした。ファームステイのホストファミリーとして、私たちを受け入れてくださったフィリップさんたちは、畜産は週に 10 時間の管理で経営を成り立たせ、本業もこなしていました。自身の生活と仕事のバランスを考え、生活を無理せず管理しているとのことでした。オーストラリアでは、仕事の評価は勤務している時間や身だしなみなどではなく、仕事の内容を主に見ているとのことです。私自身は、制服を着たり、たくさんの時間を費やして働くことが好きなので、今回聞いた話をすべて受け入れることはできませんが、たまに聞く「プライベートを優先したい考えは、不真面目な人の考え方だ」という、仕事中心な考えを全体に押しつけることは、雰囲気が良くならないと思います。

ファームステイでお世話になったフィリップさん

今回の研修で出会った多くの人が、あまり他人からの評価を気にしておらず、自分や自分の環境に自信を持っているように感じました。私は人からの評価を気にしたり、何事も完璧にこなしたいと思う性格なので、出会った人たちの性格に触れて、新しい学びがありました。また、オーストラリアの環境下で生活して様々な植物に触れたことで、植物について勉強したいと考えるようになりました。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
私が広めたいことは、畜産は選ばれた人や専門的な知識がないとできないわけではなく、「興味と畜産を好きだという心があれば、誰でも営むことができる」というイメージです。理由は、農家さんが多い地元の友達でも、実家が農家でない限り、将来農業に関わりたいと考えている人が少なく、理由を聞くと「大変そうだから」「楽しくなさそうだから」「汚れるから」など、農業の３Ｋと言われる「きつい」「きたない」「きけん」を理由に、畜産や農業を将来の選択から遠ざけている人を一人でも少なくして、みんなが畜産を支える国をつくりたいからです。
これらができると、国と畜産業界のつながりが強くなり、畜産や農業を経営したい人への支援がまずは畜産に限らず、農業の経営を楽に正確に行えるようになります。そして、AI が導入されることで、作業を正確に行ってくれたり、重いものを人が運ばなくて良くなったりして、効率が良くなることで経験が浅い人でも簡単に畜産に就職しやすくなります。そうすることで、若い人たちの選択に畜産が取り入れられるようになり、畜産の新規就農者が増えると考えました。さらに、新しいアイデアや後継者不足が解消され、日本の畜産は自給自足率が消費額ベース、カロリーベース共に向上し、輸入に頼らない自立した畜産を営めます。
次世代の畜産業は、高校生や、二十代の若い人たちが AI 機械と共生している畜産業だと考えます。オーストラリアの研修で、マランダ高校の生徒たちは、手動の機械と AI が搭載されている機械を用いて牛の耳に埋め込まれているチップを読み込んで、牛の管理をしていて、専門家の方は妊娠検査時に牛用のエコー検査を用いて検査を行っていました。同じ年くらいの人が、協力して楽しそうに授業に取り組んでいる姿に次世代の畜産を見た気がしました。

6．私の夢、これからやりたいこと
私は、適度な AI 機械の導入や畜産経営に関する宣伝活動を行い、安定的な経営をするための支援をしたいと考えています。AI の導入をすると、収穫時期や規格外品を見極めたりコンテナを運んだり、危ない機械を遠隔で操作できたりと AI を搭載した機械が「きつい」「きたない」「きけん」を適度に解消してくれると考えたからです。農業経営の宣伝ポスターは、失業したり、やりたいことが分からない人たちが、農業をやりたくなるようなポスターになるように修行していきます。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は非農家で、農業高校に入学するまでは畜産についてあまり詳しくありませんでした。そのため、自分なんかが本当に畜産を経営したり、支える仕事ができるか心配でした。
しかし、高校で畜産について学んでいくうちに、畜産の楽しさだけでなく農業の楽しさを身近に感じることができ、不安な気持ちは減っていきました。今は、畜産を支えたり、宣伝できるように努力しようと思えるようになりました。一見､不安や苦手意識、面倒くささを感じるときがあっても、それを乗り越えることが楽しいので、ぜひ諦めないでがんばってください。

畜産アンバサダー
宮城県加美農業高等学校
農業科２年
泉 海偉

1．テーマ
若者中心の畜産

2．キーワード
放牧

3．キーワードのつながりと考察
「若者中心の畜産」というテーマで、「放牧」について考えたとき、今の若い人たちに畜産に興味を持ってもらえるようにするには、小さい頃から牛と関わっていく必要があると考えていました。そこで私は、大自然の中で牛を飼う放牧がいいなと思いました。子供たちが登下校の際に、放牧されのんびりと過ごしている牛を見たり、触ったりするだけでも、子供たちは牛に興味を持つのではないかと考えていました。他にも、労働時間の削減や飼料代の削減もでき、経営的にも魅力を感じる放牧が一番良いと考えていました。
オーストラリアでは、国の取り組みとして、若いうちに農家やせり市場といった場所に派遣されて農業のことを学ぶと聞きました。見たり聞いたりすることよりも、若い世代から実際に現場に出て、畜産の良さを肌で感じることが、日本の農業のカギになって来るのではないかと考えました。そこで私は、学校で行っている教育ファームをもっと広い範囲で実施するのが良いと考えました。
オーストラリアの農業は、日本と同様に担い手不足が問題であるということでした。オーストラリアも就農率が下がっていて「若い世代が欲しい」「大変だ」と言っていました。このような問題に対し、国の企画で、若いうちに農家やせり市場に派遣するといった取り組みで改善しようとしています。話しでは、農業を営んでいるほとんどの方が、小さい頃から農業に触れてきたということでした。現在の日本は、農家数の減少が止まらず、子供たちが農業に関わる機会がさらに少なくなっています。そのようなことも、若者が農業に関心が薄い理由の一つだと考えます。そこで、私たち農業高校生が行っている教育ファーム活動などを通して、近隣の子供たちに畜産の出産から畜産物の生産、加工までのすべてを知ってもらいたいと考えます。残酷な部分もあるかもしれません。しかし、それを知るからこそ、喜びや感動が深いところに生まれます。牧場まで足を運べない子供たちには、リモートでの活動を考え、さらにはYouTubeやSNSなどを使って広く畜産について知ってもらいたいと考えています。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアのある農家では、若い人は募集していないと言っていました。理由を聞くと若い人たちは、仕事の覚えが悪く、すぐに辞めてしまうからだそうです。逆に、「高齢者のほうが辞めないでしっかり働いてくれる」と言っていました。日本も高齢化が進み、経験を重ねた方の採用や退職の延長という話を聞きます。日本とオーストラリアでは、共有すべき話題がたくさんあり、互いに抱えている問題を一緒になって考える機会はとても有益だと考えました。

研修を終え振り返ると、とても学びの多いものでした。私は、初めての海外であり、これまで日本の農業どころか我が家の農業しか知りませんでした。このプロジェクトに参加することを決めてから、毎日が不安でした。しかし、プロジェクトに参加している畜産アンバサダーの仲間がいて、みんなと話しているうちに不安がなくなり、逆に楽しみに感じるようになりました。さらには、農業のことだけでなく、オーストラリアの人々の暮らし方にも興味がわいてきました。実際、現地でオーストラリアの人たちと関わると、みんな優しくて明るい人たちでとても安心しました。畜産業を通して新たな仲間や世界とつながり、自分の夢に向かう力が湧いてきました。仲間とつながることや、見聞を広げることの大切さを学ぶことができたと考えています。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
畜産は、生きていく中でとても大事な仕事だということを若い世代に知ってもらいたいです。多くの人が思っている畜産のイメージを良いものに変えたいです。将来的に放牧をすることによって、子供たちが牛と触れ合える機会を増やし、牛の可愛さを知ってもらいたいです。それがはじまりとなり、より身近に感じ知ってもらうためには、交流牧場を運営し、消費者と生産者がつながることで、畜産業が食を支えているということも知ってもらいたいと考えています。それが、畜産経営者の意欲につながり利益にもつながると考えます。
それができると畜産のイメージが変わり、就農率が上がって私たちのような畜産アンバサダーがたくさん増えると思います。さらに、畜産食品をはじめ農産物、食料に消費者が心からつながることで、商品の価値は上がると考えます。その結果、酪農家さんの悩みが減り、赤字経営もなくなり、魅力のある畜産業になっていくと思います。
そして、次世代の畜産業とは、IT化が進んで、バーチャルフェンスを搭載した首輪をつけ、フェンスのないところでも放牧ができるような畜産業になり、遊休農地や管理が行き届かなくなった山地などで行う新たな日本式の畜産が生まれるのではないかと考えます。持続可能な食料生産への考えが高まり、穀物を極力控えた放牧で育った赤身の多い肉が生産されるようなるのではないかと考えます。最近では、培養肉や昆虫をタンパク源とする話題を耳にしますが、それでは食物に対する感謝の気持ちが薄くなっていってしまうと考えます。毎日感謝をしながら食事をいただくことが、生き物であり、人間らしさであると畜産の先生から聞きます。食べ物を大切にできる人が増え、平和な社会づくりの一部に畜産はなると考えます。

6．私の夢、これからやりたいこと
私の夢は、父が営む畜産業を継ぐことです。高校卒業後、農業大学校に行って畜産の専門的な知識を身につけていきたいと考えています。私は将来、使われていない土地を使って、短角種を放牧したいと考えています。そして、短角種を使った日本産の赤身肉を生産して加工も行い、商品の販売をしていきたいと考えています。他にも、放牧した牛を観光牧場として、地域の子供たちが牛に関われる空間をつくっていきたいです。その活動を行いながら会社をもっと大きくして、効率よく仕事を行うために、機械の導入を考えています。他にも、尊敬する父のように、人工授精師の資格を取り、色々な人の役に立てるよう仕事をしていきたいです。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は、放牧をするという考えはありませんでした。そして、このプロジェクトに参加することを決め、将来のことを具体的に考えるようになりました。オーストラリアは、広大な土地で放牧を行っています。それを見た私は、将来、絶対に放牧をしたいという気持ちになりました。今の畜産は問題が多いですが、私のようにこのプロジェクトに参加することによって、やりたいことの具体性が高まり、将来への意欲が高まると思います。畜産は大変な仕事です。皆さんも諦めずに夢に向かって様々なことに、是非チャレンジしてみてください。

畜産アンバサダー
栃木県立栃木農業高等学校
動物科学科２年
藤沼 大志

1．テーマ
畜産イメージアップ

2．キーワード
労働者の負担軽減

3．キーワードのつながりと考察
「畜産イメージアップ」というテーマで、「労働者の負担軽減」について考えたとき、私の家は、父、祖父母の３人で酪農を経営しているため、日々行う一人当たりの仕事量が多く、作業が大変だと感じていた。
今回のオーストラリア研修を通して私は、労働者の負担軽減をする方法について考え、そのことを学んできたいと思った。そして、その経験を生かし、自分の家や地域に還元することで、少しでも畜産業がより良くなればいいと考えた。また、「畜産イメージアップ」というテーマのもと、畜産についてよく知らない人が持つイメージが良くなれば、働き手が増加し、国産の商品を購入する人が増え、畜産業を経営しやすい社会になるのではないかと考えた。
実際に研修をしてみて、労働者の負担軽減という面でみると、「放牧」を取り入れることは良いと思った。放牧をすれば、排泄物の処理を省力化できたり、飼料代を削減できたりとメリットがあると感じたからだ。現在、私の家では委託して牛の育成を行っている。委託している育成牛を放牧することで、それまで掛かっていた委託代を減らすことができ、また牛舎と比べ作業量も少なくすむため、経営の中に放牧を取り入れたいと思った。しかし、オーストラリアと日本では、国土面積や気候などの違いが多く、オーストラリアの放牧のやり方を模倣するだけではいけないと感じ、放牧地に日陰をつくるなど日本の環境に合ったやり方で放牧を行うことが重要だと考えた。
私たちが訪問したオーストラリアの農場は、日本と比べて一頭当たりにかける作業量、一人当たりの労働時間が少なく、畜産が身近にあるため、就農しやすい環境にあると感じた。日本では、農業に関わっている人しかできない仕事、長時間で重労働などというイメージがあり、就農する人は少なく高齢化が進んでいる。今回の研修で学んだことを生かし、畜産に対する良いイメージを学校での発表やSNSを用いて広めていきたいと考えている。なぜかというと、若者が就職しやすい環境をつくることが重要だと思うからだ。働き手が増えれば、農家のできる作業の幅も増え、経営も良い方向に向かい、畜産業を盛り上げられると私は考えている。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
私は、オーストラリアの農家を見て、広い土地で放牧をして、のびのびと牛を飼育する経営に憧れた。放牧をすることで、少ない作業で牛を育てることができるのは、メリットだと思う。また、機械や環境が整っていれば、放牧地に2、3日行かなくてもモニター等で牛の様子を観察し、飼育することも可能だと考えた。しかし、日本では土地が狭く、日差しを遮るための屋根の設置が必要となり、放牧地の牛たちは、泥や糞尿で汚れてしまうという話を聞き、狭い土地では、放牧を主体で経営を行っていくのは難しいと思った。乳牛を放牧するのには、放牧地の近くに牛舎がないといけなく、北海道以外で搾乳を行っている牛を放牧させることを広めていくことは難しいと思った。それならば、育成牛を放牧するのはどうだろうか。育成牛なら成牛より体の大きさが小さく、糞尿の量も少ないため面積が少なくても放牧をすることができると思う。酪農家の場合は、子牛を放牧させるだけでなく、受精卵移植での和牛の子牛も同時に育てていけば、新たな財源を確保でき、経営しやすくなるかもしれない。これがオーストラリア研修を通して私が考えたことだ。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
労働者の負担を軽減するための対策を広めていきたいと考えている。現在の日本の畜産業は高齢化が進み、高齢者が少ない人数で作業しているところも少なくない。仕事は大変だが、牛がいるから毎日働かなければならない。このような現状を変えたいと思い、畜産アンバサダーとして負担軽減の対策について広めていきたいと決めた。
それができると、畜産に対するイメージが良くなり、畜産業への働き手が増えれば、高齢者の作業量が減り、若い働き手に牛舎を引き渡すことも可能になると考える。離農するのではなく、次の世代へつなげることで、高齢者は負担が減り、若者は一からお金をかけて畜産を始めなくてよいというWin-Winの関係ができればいいと思っている。そうすることで、日本の畜産業の高齢化の問題を少しずつ解決し、また「畜産はつらい仕事」などといったイメージを改善していきたい。
私が考える次世代の畜産業は、先端技術を導入した機械で作業を行なっていくものだと思う。今までは、人間が主体となって作業を行っていたが、これからは、機械が大半の仕事を行う時代も来ると考えている。現在、様々な機械が登場し、メリット、デメリットがある中、少しずつ機械化が進んできており、私の家でも、給仕機が故障したときには、機械の重要性を改めて痛感した。先端技術を導入し、若者が設定を行ってしまえば、あとは始動のボタンを押すだけなど簡単な場合も多く、高齢者でも慣れれば扱えるようになると私は考えており、機械の導入を進めていきたい。また、大型の機械でなくても、荷物を運ぶ作業をアシストするものなど、単純な機械も多くあり、それぞれに合った技術を導入することが大切だと思っている。

6．私の夢、これからやりたいこと
私の最終的な将来の夢は、父の酪農を継ぎ、人にも牛にも配慮した地域を支える酪農家になることだ。そのために大学に進学し、幅広く畜産について学びたいと思っている。そして畜産に対する様々な知識を得た後は、父と同じように酪農ヘルパーとして数年間活動していきたい。なぜかというと、酪農ヘルパーになれば、他の牧場に行き自分の目で見て学ぶことができ、酪農家の方から直の声も聞くことができるので、将来自分で経営を行っていくときに必ず役に立つと思うからだ。学んで知ってはいても見たことがない機械、そこの家の経営方針や考え方など、学校へ行くだけでは学べないことを、自分自身で作業を手伝いながら吸収し、工夫された知識が詰まった牛舎を私は経営していきたい。

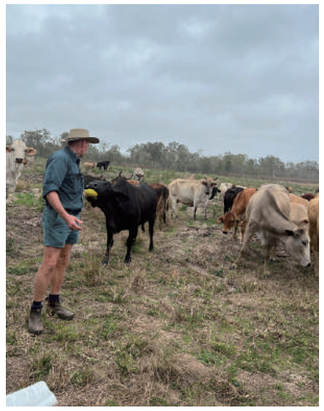
7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
畜産業は、自分が努力すればするだけ自分に返ってきて、やりがいのある仕事だと私は思っている。高齢化や社会問題、世界情勢などの影響もありつらい場面もあると思うが、それでも、そのつらさを超えるほどの楽しさや面白さが、この畜産業には詰まっていると思う。
みんなで協力し合い、楽しい畜産業を盛り上げていこう！！

畜産アンバサダー
群馬県立勢多農林高等学校
動物科学科３年
星　まどか

1．テーマ
若者中心の畜産

2．キーワード
スマート農業

3．キーワードのつながりと考察
「若者中心の畜産」というテーマで「スマート農業」について考えたとき、最初は、畜産現場の問題として3K（きつい・汚い・稼げない）があることから、若者の農業離れが起きていると思っていました。
それなら作業をほとんど機械化してしまえば、人は機械を動かすだけでよいので、汚い部分は機械に任せることができ、3Kのうちの一つである「汚い」が解消され、真冬や真夏に外に出て作業することも少なくなるので「きつい」も解消されるのではないかと思いました。
実際にオーストラリアで研修をしてみて、私が思う畜産の良さは、動物が生まれてから死ぬまでのお世話など、命を扱う職業だからこそ知れる「命の大切さ」や生まれたときからずっと育てているので牛は人に慣れ懐くのが可愛いと感じるところです。生き物を扱う仕事なので、世話は毎日欠かさずしなければいけないので、毎朝早く起きなければなりません。しかし、牛に合わせた生活をしていると、自分の生活時間にも規律ができるので、大変ではありますが良いことだと思います。しかし、畜産の作業をすべて機械化してしまうと、畜産ならではの良さが感じにくくなってしまいます。とにかくすべてを機械化してしまうのではなく、必要に応じて機械化を取り入れていくべきだと思いました。



今の日本の畜産は人手不足や後継者不足、若者の農業離れが深刻化しています。そのためにもまずは、畜産に対するイメージの改善を行い、興味を持ってもらうことが大切だと私は思います。
最初に考えていた完全機械化では、確かに作業効率は上がりますが、人間の手で行うからこそ得られる温かみや学びがなくなってしまうと考え、場面ごとに機械化を取り入れるべきと考えました。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
畜産に対する思いや熱意が日本に比べて強いと感じました。
研修中は、様々な農家や現地の学校を訪れましたが、どこへ行っても「やりがいを感じている」と答える農家ばかりでした。現地の高校で授業を受けたとき、現地の先生が「スポーツ選手やパイロットと農業従事者は同じくらい素晴らしい仕事だ、スポーツ選手やパイロットも食べないと生きていけない。その食べ物を作っているのは私たちだ」と言われ、畜産業はなんて素晴らしい職業なんだろう、そしてそれに携わっている私たちはもっと素晴らしいと誇りに感じました。
また、土地が広いため放牧が多数派ということが分かりました。日本では放牧できる土地が少ないため、主には繋ぎ飼いが多いのですが、オーストラリアでは放牧がメインなので、牛が日本に比べて自由に行動できるため、大きく育っているのではないかと思いました。
また、畜産業は男性中心というイメージが大きいですが、オーストラリアでは女性だからできないと考えている人はいませんでした。女性は頭を使うビジネス系の作業や、子牛の世話などがとても向いていると言っていました。女性には、計画的で頭の回転が早い人が多く、畜産には必要不可欠な存在だと私は思いました。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
畜産の魅力と、畜産のスマート化について広める活動をしていきたいと考えています。そのためにはまず、私自身がもっと日本の畜産について知り、スマート農業について学ぶ必要があると考えます。畜産のスマート化として搾乳ロボットや餌寄せロボットを導入し、省力化や時間短縮、人件費コストの削減に加え、牛へのストレス軽減につながると考えます。
また、IT化による個体管理として、ICチップで個体の情報を管理し、牛の発情周期を把握し種付けを行うことができたり、牛が病気にかかってないかということや乳量の変化などにいち早く気づくことができます。その情報を誰でも見られる便利さがあります。それができると、女性の畜産業での活躍がしやすくなっていくことや、3K（きつい・汚い・稼げない）の解消につながっていくと考えます。
作業をスマート化することで、私たちにかかる肉体的負担は軽減されるうえ、人件費の削減ができているので、牛のためにかけられる費用が増えます。そうすると牛へのストレスも減り、乳質や肉質の向上につながっていくと考えました。
次世代の畜産業は、女性が働きやすい現場になっていくべきだと思います。女性が畜産業に就くということは、力仕事や家事や育児の両立、収入が安定しないということもあるし、周りから反対されることもあるかもしれません。女性が気軽に畜産業に参入することは、難しいと私は考えました。
まず、畜産業は「女性にはできない、男性の仕事」という固定概念があります。しかし、仕事をするのに女性や男性なんてものは関係ありません。力仕事が得意な女性もいれば、力仕事が苦手な男性もいます。「個人の何が得意か」ということに重点を置いて、その人に合った役割を与えることが一番重要です。
そこで、女性が畜産業に参入しやすい環境になるよう、すでに牧場を経営している女性の方々や、私たち畜産アンバサダーがもっともっとアピールしていくべきだと考えました。今の時代、SNSが若い女性のコミュニケーションツールとしてあるので、InstagramやXで日々の作業のちょっとした動画やかわいい牛の写真などを投稿し、それをきっかけに女性だけでなく、畜産に興味を持つ人が増えるのではないかと思っています。
女性が畜産業を長く続けていくには、同じ女性によるサポートが必要だと私は考えます。男女どちらの意見も尊重し、一緒に手を取り合っていけば畜産業は今まで以上に盛り上がると私は考えます。

6．私の夢、これからやりたいこと
私の夢は、幼少期からの夢であった観光牧場へ就職し、畜産の魅力を伝え、動物に興味を持ってもらえるよう活動していくことです。そのためにはもっと、自分自身が畜産について詳しくなる必要があります。

現在は高校で畜産の勉強をしていますが、6次産業についてももっと勉強をしたいと考えています。普段から私たちが当たり前のように口にしている畜産物が、どのように生産され、私たちのもとに来ているのかを教えるなど、未来ある畜産のために畜産についてもっと色々な人に知ってもらえるようなことがしたいです。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私の家は非農家で、今まで畜産に関わる機会はほぼありませんでした。それでも私は動物が好きだったので「高校では動物の勉強がしたい！」と思い、農業高校への進学を決めました。農業高校では、今まで学んでこなかった畜産について学べるだけでなく、自分の周りは家が農家だという人が多く、最初はとても驚いたことを覚えています。畜産業に就く上で農業高校へ通い、畜産について学ぶといったことはさほど重要ではありません。もちろん、畜産についての最低限の知識は必要ですが、必ずしも小さい時から畜産業に関わっておくべきということはありません。
やる気さえあれば誰でも始めることはできます。若者や後継者不足が深刻化してきている今、私たちが畜産業を盛り上げていきましょう！

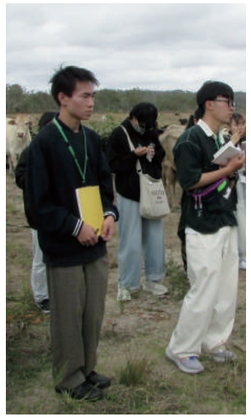
畜産アンバサダー
群馬県立勢多農林高等学校
動物科学科３年
大島 那哉

1．テーマ
若者が働きやすい経営

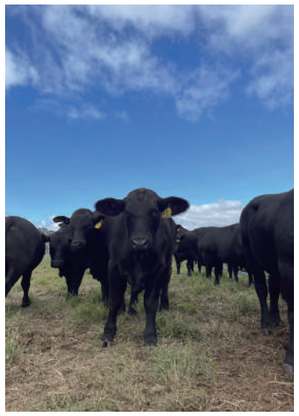
2．キーワード
付加価値

3．キーワードのつながりと考察
日本において最も深刻な畜産業の課題は、就業者の減少と高齢化だと考えます。そのため、日本の畜産を元気にするためには、若者の新規就農者を増やすことが重要だと思い、テーマを「若者が働きやすい経営」に決めました。私が決めたキーワードである「付加価値」は、畜産のきつく稼げない印象を払拭するために良い効果があると考えていました。実際、私は高校で養豚部に所属していて、養豚部では、豚の肥育から商品開発まで行う課題研究を５年以上前から受け継いでやっています。そのなかで、販売を学校外で行い、一般の人を対象に商品ができた経緯を話すと、畜産の課題や問題については共感が得られましたが、作業や知識的な話にはあまり興味を示してもらえず、普段農業に携わっていない人との意識の差を感じました。このことから、畜産の課題解決には悪いイメージの払拭が必要だと考え、最も重要な若者の参入と商品のこだわりが伝わりやすく、イメージを変えてもらえるきっかけになれば良いと思い、このチームテーマとキーワードを定めました。
オーストラリアも日本と同じように、就農者の減少と乳牛だけだと稼げないということを知りました。その対策としてまず、収益性の問題をキーワードの「付加価値」とつなげて挙げると、農地に使っていた広大な土地に工房を併設し、自分で生産し商品をつくるということ、作物生産を兼業し収益を安定させることがありました。この挙げた２つが、最も基本的で多く取り入れられていました。他にもダイナミック農法というオーガニックの手法より、上位という洗練された農法など各畜産農家がそれぞれの対策を講じていました。就業者の減少の対策について、研修中に行ったマランダという町では、幼いときに学校で農業をする学習があり、小さい頃から農業に触れることでより親しみやすい産業へと発展し、参入が促進されているのだと考えました。また、日本では畜産は労働力がかなり必要で、休みが少ないながら稼ぎが割に合っていないという印象があります。しかし、オーストラリアのある農家は週休３日、１日４～５時間で年１回長期休暇が取れるのに、年収2,000万円という理想の生活スタイルを確立していました。これはワークライフバランスというもので、「稼ぎより休み優先」とする人が多いという、今の若い人たちが流入してもらいやすい環境であり、もしこの生活スタイルが構築できれば、私たちのテーマとしては良い策になると考えます。
研修で学んだことから陥ってはいけないのが、このプロジェクトで学んだことをそのまま日本で投影しようとすることです。南国の果実が北国で育たないように、オーストラリアでいくら推奨されている農法やスタイルも、日本の風土に適していないと実にならないということです。私は、付加価値について、主に消費者が手に取った商品の製造過程のこだわりを知ってほしいと考えています。日本に適した付加価値の付け方として大前提なのが、”知ってもらうこと”です。日本では普段農業に携わっていない人にとって商品の背景にある物語がどうしても、他人事に捉えられてしまいがちです。それこそ、畜産アンバサダー活動を通して、畜産は人々の身近に存在していることを伝え、広めていくのが私の展望です。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアに来て、日本との違いを感じたことが二つあります。
一つ目は消費者の意識です。研修中、私はよくホストファミリーにマーケットに連れて行ってもらいました。マーケットには、発色が豊かで色とりどりな生鮮品が立ち並んでいました。マランダ高校の生徒と会話中、マーケットに行った際の商品を選ぶ基準を聞いてみると「美味しそうなもの、安全（オーガニックなど）なもの」と言っていました。日本はどちらかというと安さ重視で、それはどの商品をとっても安全に食べられるからなのだと気付かされました。



二つ目は、時の流れがゆったりしているということです。マランダ高校で一緒に授業や実習を受けていたときや農場を見学した際、広大な敷地が相まってか、誰一人として急いでいる人がおらず、のんびり時間が流れているなと感じました。人同士の交流も、すれ違う人と必ず挨拶や立ち話をしていて、横断歩道で車が歩行者のために停止したときでさえ、歩行者がジェスチャーを交えて運転手とコミュニケーションを取っていて、誰も先を急ぐ様子がないことが不思議でした。このことから、畜産アンバサダー活動では、オーストラリアと日本は文化や価値観が大きく異なっているので、学んだことはただ新しいものとして飲み込むのではなく、日本の風土とうまく混ぜ合わせ、改変させていくべきだと考えました。



5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
日本の農業は誇るべきということです。オーストラリアの広大な農地や全く想像もつかないような農法、マーケットの薄利多売な販売システムは、規模でいうと日本の何倍も大きいことは間違いありません。しかし、そんな農業大国に負けず劣らずの国が日本です。日本は中山間地域が多く農地が狭いことや、ウクライナ侵攻の長期化や円安で輸入飼料が高騰しているにも関わらず、農作物の値上げを大幅にすることなく耐えています。また、国産の検査システムはとても厳しく、非常に健康的です。なぜ、誇りを広めたいか、それはそんな厳しい状況下で経営を続ける農家を応援してほしいという願いがあるからです。
離農が例年の倍の速度で進んでいるという話がありますが、国産品を応援することで、経営の圧迫を多少緩められ、農家の負担軽減に一石を投じられると考えています。また、経済的に負担が軽減されると生産効率以外の面にも目を向けられ、AIでの飼養管理化やロボットによる作業などのスマート農業の普及が期待され、結果的に作業自体の負担も軽減することができれば理想です。そのためには国産が重視され、国にも注目されることで、政府や自治体からの補助金を得やすくなり、畜産業の活性化が務まると思います。
そして、私が描く次世代の畜産業は「高齢者が手作業で行う印象」から「若者がロボットを使う産業」に変わっていることです。スマート農業が進み、負担が軽減され、サラリーマンのように、もしくはそれ以上に休暇が取れるような、そんな畜産業の世界が理想です。

6．私の夢、これからやりたいこと
私は今回の研修を通して、地域に役立つ生産を行える経営がしたいと考えています。近い将来の話からすると、私は大学で繁殖学について学習し、きちんと知識を身につけたうえで研究を行いたいと考えています。研究では個体差の生まれない品種を生み出すためには、どうするべきかを考えたいです。
日々、動物を扱っていると想定外の事象が起こることが多く、常に人の手が必要でスマート農業の導入が円滑に進んできませんでした。そのため、個体差をなくすことで、一定の力量だけで作業がすむため、スマート農業の普及につながるのではないかと考えます。そして、卒業後にはいつか自分の農場を持ち、地域の気候を生かしながらスマート農業を行い、たくさん若い従業員を雇いたいです。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は、このプロジェクトに参加された先輩方の堂々とした畜産アンバサダー活動をしている様子や、校内で発表している姿に憧れて、今回のプロジェクトに参加することを決意しました。プロジェクト事務局の皆戸さんや石原さんをはじめ、引率してくださる先生や、メンターの方々は親身になって指導してくださったので、すごく自分にとって有益になりました。
また、全国から集まった少数精鋭の農業高校生と過ごす時間は、常に刺激的で有機的な時間を過ごせました。学校では味わえない高度な畜産の知識と、年齢差の壁を超えた一生もののかけがえのない友は、私にとっての財産です。そして、担い手が不足と言われるなか、この業界に飛び込んでくれたこと、そして飛び込んでいくことを本当に尊敬します。

畜産アンバサダー
筑波大学附属坂戸高等学校
総合科学科２年
下川　弥音

1．テーマ
若者が働きやすい経営

2．キーワード
生産者と消費者のつながり

3．キーワードのつながりと考察
「若者が働きやすい経営」というテーマで「生産者と消費者のつながり」について考えたとき、最初は私を含む若者の消費者と、畜産農家などの生産者にはどのような関係があるのかと思い、そこから生産者と消費者のつながりが弱いと考えました。なぜなら普段生活している上で、私たち消費者が生産者の生産現場を知る機会は限られており、そこに関心を抱く人も少ないからです。その上、消費者は生産者のような第一次産業よりも小売業などの第三次産業とのつながりのほうが強いと考えられます。さらに「若者が働きやすい経営」という点において、若者はライフワークバランス（休息と利益の両立）を求めていることが分かりました。多くの利益を得るということ、すなわち、多く人に商品を手に取ってもらうためには消費者の注意を引く工夫が必要だと思います。だからこそ、この先の畜産業のためにも消費者と生産者により強いつながりをつくるアクションが必要だと考えていました。
まず、事前研修を通して日本の畜産業に携わっている方が仕事に誇りを持っている一方で、苦労が多く、休みが少ないことで、家族との時間が取れないという問題があることが分かりました。
私にとって、畜産農家さんのお話を聞くことが初めての経験であり、様々な工夫をして経営していることを知るきっかけとなりました。私自身消費者ですが、この研修に参加していなかったらこのような隠れた工夫に気がつけなかったと思います。このように生産者は工夫を重ねているが、それを消費者は理解しきれていないということが分かりました。
オーストラリア研修を通して、オーストラリアの消費者は、日本と違って安さだけではなく畜産物の持つ付加価値に理解を示していることが分かりました。日本では、付加価値より安さに魅力を感じる人が多いですが、オーストラリアでは付加価値に魅力を感じる人が多いという印象を受けました。このことから、日本との大きな違いは消費者意識であると考えます。
しかし、日本とオーストラリアでは最低賃金や平均収入、税金制度に違いがあるため、このような消費者意識に差が生まれてしまうのは必然であるとも言えます。そのため、オーストラリアのような消費者の意識を日本にも反映させるには、生産現場を消費者にアピールする機会をつくり、関心を抱いてもらうことの必要性を再認識しました。研修を通して、日本は消費者と生産者のつながりがまだ弱いことが分かったので、日本にも消費者と生産者のつながりを強くするアクションの必要性を感じました。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアの研修を通して、オーストラリアでは ICT と広い土地を最大限に活用していて、ライフワークバランスが充実していることに気づきました。ICT を活用することは、広い土地に人手がなくても放牧ができ、牛の耳標についているチップで簡単に個体識別や、細かな情報を確認することなどができます。このように、オーストラリアでは放牧を通して、家畜のストレスフリーな畜産が行われていることが分かりました。また、ICT を効果的に使うことで労働時間の削減につながり、ライフワークバランスが充実するため、農家にとってもストレスフリーな労働環境になっていることが分かりました。
近年、日本でもスマート農業を取り入れた畜産が増えており、搾乳作業の自動化や個体管理を AI が行うなど様々な取り組みが行われています。日本の畜産農家において、ICT 活用率は 80% を超えているというデータがあるのにも関わらず、ワークライフバランスが充実していると実感する農家は少ないように思えます。オーストラリアのライフワークバランスが充実した経営に憧れを持った私は、日本の畜産は ICT をさらに効果的に活用することができるのではないかと思いました。ICT の効果的な活用によって、ライフワークバランスの充実しているオーストラリアの畜産のように、日本の畜産にもライフワークバランスを充実させることが可能であると考えます。
さらには、労働環境にライフワークバランスの充実を理想とする若者にとって、畜産農家を魅力的に思い、若者の新規就農者数の向上につながると思います。これにより日本の畜産業はさらに良い方向に進むでしょう。

	1991 年	1996 年	2001 年	2006 年	2011 年	2016 年	2019 年
日本	416 万	425 万	427 万	426 万	433 万	423 万	431 万
オーストラリア	504 万	530 万	575 万	619 万	670 万	680 万	672 万

日本とオーストラリアの平均年収推移
（世界の平均年収移＊１と日本より改変）
＊１1991 年から 2019 年のデータを使用した。

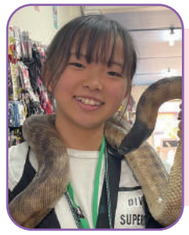
耳標を読み取る機械

オーストラリアの肉牛

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
私がこれから畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいことは、この研修を通して学んだ畜産農家の隠れた努力についてです。現在の日本では、消費者から生産現場を知ることが難しいです。確かに、スーパーなどに売られているお肉には個体識別番号が書かれていることがあり、性別や出生場所、生産者の情報を瞬時に調べることができます。ただ、どのようにして育ってきたのか、その成長過程にフォーカスが当たることはほとんどないです。そして消費者もそれに興味を持っていない、この状況が問題であると思いました。
オーストラリアでは家畜の飼育をするうえで、生産者はアニマルウェルフェアの考え方を大切にしており、消費者もそれを認知し、そこに魅力を感じて商品を手に取っている光景が見られました。
近年、日本ではアニマルウェルフェア自体の認知度は上昇しているものの、それに対し関心を持つ人が少なく、よく理解をされてはいないため　畜産農家がどれだけアニマルウェルフェアに気をつかっても、消費者にはその努力が伝わることは少ないです。この普段知られることのない、畜産農家が直接消費者に伝えにくい生産過程における隠れた努力を広めることが、このプロジェクトに参加した私の使命であると思います。隠れた努力を広めることで、消費者の畜産や畜産農家に対する意識や関心がより高くなると思います。
特に私の学校は総合学科で、農業系の授業を受けない生徒もいるため、畜産に興味を持っていない人に対して広めることが可能だと考えています。また、畜産の現状は「大変そう」という一言で片づけられ、他人事に捉えられていることが多いため、この活動を通してもっと「畜産が楽しそう、やってみたい」と農業や畜産に興味を持ってもらえれば、消費者の畜産に対する関心をより高められると考えます。さらには、この関心から若者の農業離れを改善でき、これからの未来を担う若者の就農者数の増加に貢献できると思います。最終的に、隠れた努力を知ってもらうということで、消費者が生産者に対して関心が高まり、今より畜産に対する認知のつながりが強くなると思います。

6．私の夢、これからやりたいこと
私がこれからやりたいことは、海外に行き、農業に関心を持つ同世代の外国人の友達をつくり、ともに農業を学ぶことです。オーストラリアは自然が豊かで動物との距離が近く、英語に不慣れな私のために分かりやすい英語で話してくれ、とても親切に接してくれました。私は、そのような日本では味わえない非日常的な環境で生活することに、強い憧れを感じました。
また、オーストラリアのマランダ高校では、同世代の農業や日本に関心を持っている生徒に出会い、関わっていく中で、価値観の違いや文化の違いを目の当たりにしました。その中でも同じように農業に関心を持つ子に出会い、私も同じ環境で、自分とは違う国の生徒と学びたいと思いました。そのため、今後は農業に関することで留学をし、そこから新たに自分がやりたいことを見つけていきたいと思います。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
畜産業は、農業の分野において他とは少し違う印象を持たれがちです。なぜなら家畜の命を責任を持ってたくさん飼育していかなければならないからです。
農業を学んでいる私でさえも、このプロジェクトに参加するまで、畜産という分野のどこかに壁があるように感じていました。でも、このプロジェクトで様々な視点で知識を得て、壁なんて存在せず、誰もが畜産業に携わって良いんだと考えを変化させることができました。
「畜産業は人々が生存していくのに不可欠な存在である」このプロジェクトで何度も考えたことです。
畜産業は今までも、これからもなくてはならないのです。そんな畜産業に“携わりたい”と思うことができるのは、とても素晴らしいことであると私は感じます。ぜひその思いをこれからも大切にしてほしいなと思います。
私たちの手で日本の畜産を元気にしていきましょう！！



畜産アンバサダー
東京都立瑞穂農芸高等学校
畜産科学科２年
吉田 穂乃里

1．テーマ
創造する畜産スタイル

2．キーワード
地形の活用

3．キーワードのつながりと考察
私は「創造する畜産スタイル」というテーマから、家畜が本来の姿で暮らせるような環境をつくりたいと考えました。また「地形の活用」というキーワードからは、日本は土地が狭く平地も少ないため、整備されていない山を使って放牧を行っていきたいと思いました。この二つから、私は山を用いた放牧を日本の主流とし、牛が自由に暮らせるアニマルウェルフェアの環境をつくりたいです。しかし、放牧をする上では土地や柵が必要です。日本で山を放牧地とするなら、どのように場所をつくるのかを考えました。
実際にオーストラリアでは、一つ一つの農家が広大な土地を持ち、牛を多頭飼いして放牧を行っていました。この光景を見て、日本にも牛が自由に暮らせる環境をつくりたいと強く思うようになりました。しかし日本の問題として、土地が少ないことがあげられます。オーストラリアでは、平地をうまく活用して放牧を行っていました。そして、電気柵や首輪を使って場所を制限していました。日本で山を放牧地にするには、傾斜が多いため、柵の設置が困難だと思われます。そのため、首輪に電気を流すなどの技術を取り入れ可能にしていきたいです。また整備されていない山や、耕作放棄地帯を放牧に使うことは、環境保全につながると考えていましたが、木を切り倒してしまうため環境破壊になるのでないかと思うようになりました。このような課題があげられる中で、日本にどのようなかたちで放牧を取り入れるのか、本当に放牧を行うことは可能なのか不安になりました。

そこで私は、全て放牧にするのでなく、牛舎と放牧地を半分に分け、牛がどちらにも行ける環境をつくりたいです。このようにすることで、放牧の欠点である気候の影響を受けず、個体管理も徹底できます。今までの私は、全て放牧することが牛にとってのストレスフリーとなり、幸せになると考えていました。しかし、実際にオーストラリアで放牧を見たとき、牛が一定の場所に固まっていることに気づきました。そのため面積を必要以上に大きくせず、放牧を行えるのでないかと考え、頭数、場所を少なくし、規模を縮小することで放牧地をつくることが可能だと思います。そして、この特色を生かし生産物の質を高め、価値を上げていく酪農のかたちにしたいです。放牧による牛が繋がれていない環境が、アニマルウェルフェアにつながり、乳量乳質の向上や病気の予防、運動不足の解消につながります。土地の限られた日本では、価値を高めていく経営方法にしていきたいです。

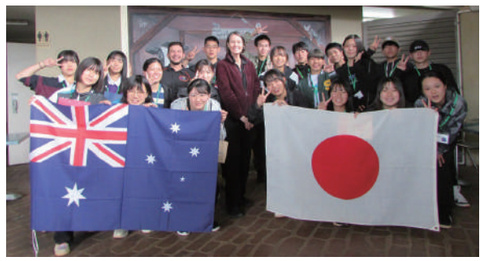
4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアの農家に畜産業のやりがいを尋ねたところ、どの農家も共通して「動物、外が好きだから続けている」と答えていました。堂々と自分たちの農場について話している姿を見て、農家という仕事に強い誇りを持っていると感じました。私は、そんなオーストラリアの農家がとてもかっこよく見えました。研修期間中、私たちは肉牛や酪農など様々な農家を訪ねました。そこで私は、日本と比べ女性の農家が多いと気づきました。オーストラリアでは、女性が活躍する農業に偏見はなく、機械化が進んでいるため、女性も仕事がしやすくなっていると感じました。一方、日本ではいまだに女性は農業に向いていないという考えがあります。その理由として、力が弱い、小柄である、それによって農業をするには体力が足りないし、危険だと言われています。この昔ながらの考えで、女性の可能性が閉ざされてしまっています。私はオーストラリアのように広く、強い心でチャレンジを重ねる必要があると感じました。日本は、昔のことや伝統を大事にする文化がありますが、マイナスに言えば新しいことを避け、不安定になることを恐れています。畜産業をこれからよりよく発展するためには、伝統だけではなく新しい考え、チャレンジすることが大切だと考えました。そこで私は、これからの畜産業を良くするため、オーストラリアの農家が持っていた強い心を伝え、

自分の夢や目標に向かって恐れずチャレンジすることを進めていきたいです。そして酪農を発展させるため、海外での経験や、自分が感じたことを周りの人に伝え、少しずつ変わるように新たな酪農のかたち、日本に合うかたちを実現していきたいです。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
私は畜産アンバサダーとして、畜産の魅力と大きな可能性を多くの人に広めたいです。日本は畜産現場を知らない人や、新しいかたちに発展させるのをあきらめている人が多くいます。その理由として、畜産が身近にないことや、赤字経営が続いていることだと思います。私はこの課題を解決するためには、情報を伝えることが大事だと気づきました。まず一つ目に、畜産の魅力を伝えたい理由として、畜産には良いところがたくさんあるからです。畜産は、人々の生活を支えている必要不可欠な仕事です。こんな素晴らしい仕事を衰退させるわけにはいかないと思い、知ってもらうべきだと感じました。二つ目に、畜産業に大きな可能性があることを伝えたい理由として、一般的な畜産のイメージとして生産物をつくり、商品として提供するだけだと思われていますが、今回オーストラリアに行き、国際交流の場にもできると感じました。国ごとの畜産の特徴を知ることによって、お互いに畜産を高められると思います。このような活動を増やすことにより畜産の発展となり、将来への希望が見えてきます。畜産業の魅力と大きな可能性を広めると、畜産に興味を持つ人が増え、就農者が増えると考えています。現状日本は、大規模化や企業化が進んでいますが、生産性を求めるだけで、アニマルウェルフェアに対応していないと感じます。そこで、消費者に畜産の魅力や酪農について知ってもらうことで、生産物の価値を上げられると思います。そして、これらの情報を伝えることによって、畜産業を応援する人や農家同士のつながりが生まれ、さらに良い方向に発展していくと考えられます。
そこで私が思う次世代の畜産業は、生産者と消費者のつながり、そして生産者同士のつながりができ、情報が常に共有されていくことです。この情報が伝わることによって、価値を広めることができるのでアニマルウェルフェアを取り入れやすくなると思います。このように、つながりをつくることによってお互いに競い合い、良いものができると考えています。そして経営が回らないときは助け合い、協力しながら畜産を衰退させないように守っていきます。この経営のかたちを広めることができれば、畜産は発展していくと感じました。

6．私の夢、これからやりたいこと
私の好きな動物は馬と牛です。そこで将来は、馬と牛が共生している牧場をつくりたいです。そしてアニマルウェルフェアに特化し、消費者が生産者を身近に感じるような夢のような牧場にし、畜産の魅力や酪農の現状を伝えていきたいです。オーストラリアでは、自分の夢や目標を強く持つことが大事だと感じました。今考えて難しいことでも、可能性を信じ、新たな酪農のかたちをつくっていきたいです。そのために今は様々な経験を重ね、酪農の知識をつけていきます。そして高校卒業後は大学に進学し、知識や技術を高めるように努力します。日本の持つ課題は多いですが、あきらめず粘り強く頑張っていきます。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は今回の研修で海外の現状を知り、酪農現場をもっと知りたいと思うようになりました。そして、これからの畜産を繁栄するためには、どのようにすれば良いかを考えるようになり、以前より視野が広がりました。異なる文化と触れ合うことによって自分の考えの幅が広がり、これから何をしていきたいかが見えてくるはずです。
また、畜産業は命を扱う仕事なので、大変なことや辛いことが必ずあります。それを乗り越え自分たちの目標に向かって頑張っていきましょう！



畜産アンバサダー
神奈川県立中央農業高等学校
畜産科学科２年
青木 希恋

1．テーマ
若者中心の畜産

2．キーワード
飼料

3．キーワードのつながりと考察
「若者中心の畜産という」テーマで、「飼料」について考えた当初、飼料問題について他国は関係なく、日本のみが抱えている問題だと思っていました。オーストラリアは農業大国と呼ばれるだけあり、子供たちが生まれたときから、農業や畜産が身近な環境にあり、牛などと戯れているイメージが強く、誰もが自然に後継者として農場を継ぎ、問題なくこの産業が続くことが当たり前なのだと考えていました。また、広大な敷地を利用した放牧経営が中心であるため、十分に自給飼料が確保でき、飼料を購入する必要がないため、飼料価格高騰の影響を受けることなく、安定した収入を得ることが可能で、農場の後継者不足などには困っていないものと思っていました。
オーストラリアでは、若者が農業や畜産に興味を持ってもらえるように、国が補助金を支出し田舎地域での農業や畜産体験活動を実施している取り組みを知ることができました。若者の畜産従事者を増やす為に国全体の問題として捉えていることや、一軒当たりの農場敷地面積も広いため、自給飼料の生産量を増やし、濃厚飼料の給与量を調整していくことで、コスト削減ができ、離農リスクなどを軽減できるのではないかと考えました。またオーストラリアでは、国土面積がとても広く、東西南北で気候に違いがあるため、できる限り各気候条件に対応できる牛の品種や牧草選びもとても大切であると考えました。
日本でのこれからの畜産は、まず国土面積に限りがあるため、耕作放棄地などを活用した自給飼料の生産や、食品を製造する過程で出た野菜の皮、規格外で販売されない農作物などを利用したサイレージの生産やエコフィードとして活用することで、食品ロス問題の改善にもつながり一石二鳥の取り組みが実現できると考えます。若者中心の畜産業界にするためには、幼稚園生や小学生を対象とした酪農教育ファームの実施や野菜の収穫体験などの農業体験を幼い頃から経験させ、農業や畜産について興味を持ってもらうことが必要だと思います。また、写真撮影だけが目的で、食事をせずに料理を残す若者も多くいます。その畜産物や農産物がどのような過程で自分の目の前にあるのかを正しく理解してもらい、改めて「いただきます」の意味をもう一度考えもらうことも大切だと考えています。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
私が研修を通して学んだことは、二つあります。一つ目は、飼料自給率がとても高いということです。日本とオーストラリアでは、土地の広さが圧倒的に異なり、飼料を自給しようとしても、敷地の確保など日本は難しい状況に陥っています。これに対してオーストラリアは、放牧を主流としているため粗飼料を購入する必要はないが、濃厚飼料は購入せざるを得ないため、近年の世界情等による飼料価格の高騰が離農の要因にもなってきています。そのため日本では、耕作放棄地や使用していない土地を有効活用して、自給飼料の生産をより高めていくことが大切なのではないかと考えました。
二つ目は、若者が農業や畜産業に就きやすい社会環境づくりの大切さです。現在オーストラリア、日本どちらでも離農や跡継ぎ問題など業界的に人手不足となっています。実際に私が訪れたファームステイ先は 50ha の敷地で草花や樹木、野菜の栽培や 40 頭の肉牛飼育を夫婦二人のみで管理していました。跡継ぎは決まっておらず、娘二人は都会で暮らしていると実際に伺いました。このことを聞き、畜産大国であるオーストラリアでも、日本と同じような問題を抱えているということが分かりました。この問題を解決するためにオーストラリアでは、国がサポートし、若者を実際の農家さんのもとで、農業や畜産体験ができるようなシステムが活用されています。この体験事業に若者が誰でも参加できる体制になってることは、とても良い政策だと思いました。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
畜産の楽しさや魅力を、日本全体に伝えていきたいと私は考えています。畜産業のイメージとしては臭い、きつい、汚い、の 3K のイメージや牛や豚、鶏をと殺することへマイナスなイメージを持っている人の方が多いのではないかと思います。この 3K イメージや可哀想だという考えを改善できれば、これまでマイナスのイメージで捉えていた畜産業や家畜動物への印象が変わり、畜産業に携わってくれる方が増えるのではないかと思います。
現在、私の高校の牛舎は、搾乳ロボットや哺乳ロボット、餌寄せロボットなどの作業性をより向上させるための機械化が進んでいます。設備に費用が掛かる代わりに、重労働などが軽減でき、その分、各個体を観察できることで病気などの早期発見にもつながっています。今後は先生方と協力をして、畜産現場での AI を活用したたくさんのことに挑戦したいと思っています。3K の中で、きついというイメージは少しずつではありますが、機械化を取り入れることにより改善されてきていると思います。
私が思う次世代の畜産業とは、若者中心の畜産で畜産業が「かっこよくて楽しい仕事」となることです。若者が中心となることでどんどん新しい発想が生まれ、機械化だけでなく職業としての魅力を、外部により発信できるのではないかと思います。先程も述べたように、現在は畜産業にマイナスのイメージを持っている人の方が多いと思いますが、畜産業がなければ日本や世界の食を支えている畜産物が無くなってしまいます。野菜を育てるために使用する堆肥も利用できません。そのため、畜産業が日本や世界から消えてしまうことは、大きな問題であるということを多くの人に知ってもらいたいと思います。そのまず第一歩として、私が「畜産はかっこいい仕事」であることを広めていき、畜産に対するイメージを変えていきます。

6．私の夢、これからやりたいこと
私の夢は、牛と人どちらもが幸せになれる酪農家になることです。今回の研修を通して、海外で畜産業をしてみたいと思うようになりました。限られた範囲とはいえ、広い土地でゆっくりと草を食べながら山道を進んでいく牛を見ると、繋ぎ飼いより牛にかかるストレスがなく過ごせることが、牛にとって一番幸せではないかと私は考えました。
将来、海外での畜産に取り組むことも視野に入れ、これからは所属している酪農部での活動を中心に、畜産現場おける知識や技術をしっかりと身につけていきたいと思います。そして、19 歳になったら国際農業者交流協会のアグトレに参加して、もう一度海外で畜産を深く学び、一頭でも多くの牛たちに、私の牧場で生まれて良かったと思ってもらえるよう、夢に向かって頑張ります！

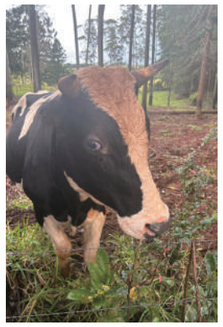
7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
畜産は、臭い、汚い、きついの 3K 職業としての認識や、家畜を食用にすることなどへのマイナスなイメージを持っている人の方が多いと、私は思っています。しかし、畜産業が存在しないと、日本や世界の人々が必要とする生産物が無くなってしまいます。そのため、農業や畜産に取り組むことに誇りを持ち、また命を預かっているという責任感も忘れず、毎日たくさん考えて、たくさん悩んで、壁にぶち当たることがあれば先生や先輩、仲間に頼って楽しく素晴らしい畜産ライフにしてください。

畜産アンバサダー
長野県佐久平総合技術高等学校
食料マネジメント科２年
市川 真優

1．テーマ
畜産イメージアップ

2．キーワード
飼育環境

3．キーワードのつながりと考察
「畜産イメージアップ」というテーマで、「飼育環境」について考えたとき、放牧は牛にとって一番ストレスのかからない飼育方法だと考えていました。なぜなら、牛は自由に散歩したり、本来の姿で生活することができるからです。それに設備や安全面でも日本とは違い、放牧している範囲から出ると、首についているセンサーが反応して電気が流れるようになっており、人が見ていなくても牛の管理がしっかりとできるのです。
しかし日本は、オーストラリアのように土地が広くなく、技術が発展しておらず、気候も違い、放牧での飼育が難しいため、多くの牧場が繋ぎ飼いで飼育しています。繋ぎ飼いは、牛にとってストレスでしかないのではないかと私は考えました。そこで私は、今回の研修を通じてオーストラリアでの放牧のメリットとデメリットを繋ぎ飼いと比較して考えました。
実際にオーストラリアに行き、放牧で飼育されている牛を見たとき、放牧が牛にとって一番ストレスがかからず飼育できる方法ではないということが分かりました。私がファームステイ先で見た放牧されているホルスタインの牛は、野犬により片方の耳が食いちぎられてしまい、耳が無くなっていました。また、パパイヤの生産を行い、放牧で牛の飼育を行っている農家さんでは、



牛の体に多くの虫がついており消毒しても取り切れないため、牛が自分から虫を払っている動作がみられました。このようなことから、放牧での飼育はメリットだけでなくデメリットもあり、確実に適した飼育の仕方とは言えませんでした。よく考えると、繋ぎ飼いの方が決まった時間に牛は餌を食べられて、野犬などにも襲われず安全であり、土地も放牧のように広くなくて良いので、経済面でとても良い飼育方法だと考えました。
今回の研修を通してまず考えたことは、日本は牛を襲うような野犬はおらず、放牧飼いは適していると思いました。しかし、日本とオーストラリアは、環境や気候も違っており、牧草での飼育ではなく、配合飼料を与えたりすることなどを考えたところ、やはり繋ぎ飼いが向いているのではないかと考えました。そして、繋ぎ飼いは牛にストレスが溜まるなどのデメリットも多くあります。しかし、日本のように狭い土地での飼育や安全面などを考えると、人の目の届く範囲で飼育できるという点から、繋ぎ飼いでの飼育が向いていると考えました。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアは日本とは違い、ほとんどの牛が放牧により育てられていると知っていましたが、実際にオーストラリアに行き、放牧されている牛を見たときには感動しました。大草原に放牧されている牛は自由に草を食べていたり、自由に寝たり、走っていたりと、日本では見ることのできない、牛本来の姿を見て観察することができました。また牛に配合飼料はほとんど与えず、牧草で飼育している農家が多かったです。私が見に行った農家では、パパイヤを生産しながら牛の肥育を行っていて、時々規格外品のパパイヤを牛の飼料として与えていました。この農家の牛は人によく懐いていたし、廃棄となるパパイヤも無駄になることはなく、とても良い飼育の仕方だと考えました。
また、オーストラリアは日本とは違い、女性も酪農家として働きやすい環境にあると思いました。日本では、酪農は男性の仕事という考えの人が多く、女性の酪農家はあまりいないと考えられます。しかしオーストラリアでは、学生のときから義務教育で農業の授業があり、女性でも男性でも全員が農業に触れることができるのです。日本にも農業高校がありますが、その学校に行かないと農業に関わることもできないし、知ることもできません。そこで私が牧場を経営し始めたら、農業にふれあい、仕事の体験できる場をつくり、多くの人に農業に興味を持ってもらいたいです。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
自分のキーワードとして定めた「飼育環境」のことについて考え、伝えていきたいです。一つ目は、放牧のことです。日本は、オーストラリアのように土地が広くないため、放牧での飼育の割合が低いです。しかし放牧は、メリットだけでなくデメリットもあります。まずメリットとしてあげられるのは、牛が自由に動けるため、ストレスがかからず飼育できるということです。日本では、繋ぎ飼い牛舎が約 90% と大きな割合を占めています。繋ぎ飼いは、牛一頭一頭に目が行き届き、健康状態が良く観察でき、牛舎の面積が少なくても良いため、日本ではとても良い飼育方法の一つとしてもあげられています。しかし一生繋ぎ飼いで過ごすというのも、牛にとってはストレスです。そのため、フリーストール式の牛舎を日本では広めていきたいです。フリーストール式は、飼料を与えるときなどは牛を繋ぎ、その他のときは、牛を放牧のように外に放して飼育することができます。フリーストール式なら、放牧のデメリットである牛が野犬に襲われたりする心配もなく、柵で区切られた土地の範囲のため、牛がストレスをかかえる原因の一つであるハエやアブなどの消毒が念入りに行えるため、安全に健康に育てることができます。また、放牧のように広い土地が必要ないため、どこの牧場でも取り入れるのが可能という意見の方が多いと思います。
二つ目は、濃厚飼料のことです。日本はオーストラリアの牧草飼育とは違い、配合飼料での飼育の割合が高いと思います。私はそこで考えました。オーストラリアのパパイヤ農家では規格外品となったパパイヤを牛におやつとして与えており、食品ロスを減らしていました。そこで、日本でも黒毛和牛にリンゴでつくった餌を与えるように、その土地の作物を食べた牛を育ててみたいと考えました。
最初からこの目標をあげて実現するのは、難しいと思います。しかし、将来、私は母が経営している牧場を継ごうと思っているので、放牧の面などに関してはどこまで実現していけるのか、まず実家の牛舎に取り入れ考えていきたいです。私が牧場を経営し始めたときに、何が大変で、こんなところが良かったなど、これからの畜産に役立つよう、私が経験したことを広めていきたいです。

6．私の夢、これからやりたいこと
私は将来、祖父の代から受け継がれている家の牧場を継ぎ、地域で有名なブランド牛、蓼科牛を多くの人に食べてもらい、広めていける農家になりたいです。私の家の牧場は、牛を放牧できるスペースが少ないため、牛にストレスが多くかかってしまっていると思います。そこで、牛がストレスを感じず過ごしていける工夫を考えていきたいです。
また、日本は女性の農家が少ないので、今回のプロジェクトを通じて、日本の畜産農家が増えるような取り組みを考えて、実行していけるような人材になりたいと思います。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は肥育牛に関しての知識や経験はありましたが、乳牛に関しての知識は少なかったので、今回の研修で様々なことを身に付けられて、とても良い経験になりました。全国に畜産の魅力を広めていきたいと考える高校生がたくさんいることを知れたので、私も皆さんと一緒に全国に畜産の魅力を広めていけるように頑張ります。そして女性の畜産農家さんが増えるように、これからもインターネットを使って、女性の畜産農家さんを紹介したりなどして、もっと広めていけるように頑張りたいです。
これからも力を合わせて、日本の畜産を盛り上げていきましょう！

畜産アンバサダー
静岡県立磐田農業高等学校
生産流通科３年
河野　花音

1．テーマ
創造する畜産スタイル

2．キーワード
飼育環境

3．キーワードのつながりと考察
「創造する畜産スタイル」というテーマで、「飼育環境」について考えたとき、最初はただ家畜にとって過ごしやすい飼育環境が、私たちがつくり上げる畜産のかたちだと考えていました。しかし、「家畜にとって過ごしやすい」これは大切なことではあるが、それだけではないと学びました。良い飼育方法としてあげられるものに放牧がありますが、日本では推奨はされているものの、中々その割合は上がりません。その背景には土地の問題や費用の問題があるのだと考えます。
実際に研修をしてみて、私の創造する畜産スタイルとは、放牧することによって家畜と経営者、両者にプラスを与えるものです。

放牧することは、労働力の削減や飼料面において大幅なコストカットにつなげることができます。人とお金をできるだけかけずに経営できるのです。土地の問題については、33.6 万 ha に及ぶ耕作放棄地を利用するのが最善だと考えます。農業の大きな問題となっている耕作放棄地を再利用するのです。
日本の畜産には、飼育方法を畜舎での飼育だけにこだわらないべきだと考えました。畜舎での飼育が駄目というわけではありませんが、あまりにも畜舎での飼育にとらわれすぎていると思います。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアでは、中学生のときに農業・畜産業の授業があることを知りました。これは、オーストラリアと日本の教育の大きな違いであると感じました。オーストラリアでは、地域の農業と畜産業に誇りを持っています。それは、学校で学ぶことによって、大切にしていこうという意識が定着したのだと考えます。それに比べて日本では、農業高校に進学しなければ農業・畜産業を学ぶことはできません。農や食について考える機会もほとんどありません。日本でもオーストラリアのように義務教育で、農業・畜産業を教える教育体制が良いと考えます。その学びが、豊かな農と食を育み、就業者を増やし、地域を持続可能にすると考えるからです。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
はじめに、畜産業を知らない人に楽しさや魅力を伝えていきます。この仕事は、同じことの繰り返しではありません。自然の中で毎日様々な経験ができる楽しい仕事だと思います。そして、出会いと別れという「命」とダイレクトに関われるという魅力があります。伝えることで、畜産業に対する悪いイメージを少しでも良いものに変えたいです。
また、実際に体験してもらうのが一番だと考えます。なぜなら、私自身が、幼少期の

搾乳体験を鮮明に覚えているだけでなく、酪農家さんでの体験が将来の夢につながったからです。考えてもらうだけではなく、体験してもらうことが畜産業について考える第一歩だと思います。
畜産業にある 3K（汚い・稼げない・きつい）、この悪いイメージの払拭ができると思います。飼育環境が整うことで「汚い」は最低限に抑えることができます。また、放牧を取り入れていくことでコストが削減されるだけでなく、生産以外にも力を入れることで、今以上に「稼げる」ようになるのではないでしょうか。しかし、「きつい」というイメージは、実際に働いた人がどう感じるかによって様々な意見が出ると思います。その意見をできるだけ反映させ、機械を導入して労働力を軽減していくべきです。
次世代の畜産業は、飼育環境の改善を行うとともに、従事者の意見を反映させた働きやすい環境づくりを行う必要があります。そのために、機械化の導入も大切だと思います。畜舎をはじめとする飼育環境と放牧のバランスを取りながら、農業経営と家畜の幸せ、地域の活性化を行う持続可能な畜産業を考えていく必要があります。

6．私の夢、これからやりたいこと
私は、将来グリーンツーリズムを取り入れた体験型の酪農を行いたいです。これからの畜産業は、生産だけでなく、多面的機能を生かした牛との触れ合いや酪農体験など、消費者との交流によって、副収入を得ることが必要だと考えます。オーストラリア研修で学んだ多くのことや、畜産アンバサダーの仲間たちから受けた刺激を生かしていきたいです。
高校卒業後は、農業系短大に進学し、畜産を基礎から学んでいきます。多くの農家を知り、学ぶことで未来の畜産業のために貢献できる人になりたいです。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
夢を実現させるために挑戦しよう！私にとってこのプロジェクトに応募するのは、大きな挑戦でした。
その結果得られたものは計り知れません。挑戦して良かったと思っています。実現の過程で悩みや挫折があると思いますが、それは大きな学びだと思います。次につなげていきましょう。
私は自分の夢のために挑戦し続けたいと思います！日本の畜産を一緒により良い産業へと変えていきましょう！

畜産アンバサダー
岐阜県立岐阜農林高等学校
動物科学科３年
浅野　椿

1．テーマ
畜産イメージアップ

2．キーワード
放牧

3．キーワードのつながりと考察
「畜産イメージアップ」というテーマで、「放牧」について考えたとき、オーストラリアでは、放牧がさかんに行われており、効率的に畜産業が行われていると最初は思っていました。テーマとした畜産イメージアップというのは、畜産業への悪いイメージをなくして、畜産業の魅力をもっと広めていくために考えました。オーストラリアでの畜産を実際に見ることで、オーストラリア特有の畜産業について学んだり、日本とオーストラリアの違いを見つけたりして、それを発信できたら良いと考えていました。個人のキーワードに決めた放牧では、牛にとっても、人にとっても、放牧は良いものだと考え、実際に放牧をしている様子を見ることで、そのやり方やメリットを学びたいと思っていました。しかし、まとまって広大な土地を確保することが難しい日本では、簡単に導入することはできません。そのため、どうしたら放牧や自給飼料の生産ができるかということを考えていました。
実際に研修をしてみると、一般的に日本の畜産の繋ぎ飼い牛舎などでは自由がなく、飼われている牛がかわいそうだという良くないイメージを持たれがちですが、どの農家の方々も自分が飼育している家畜のことを大切にしていて、頑張っているということが分かりました。そんな頑張っている農家の方々を支えるために考えたのが、畜産イメージアップカンパニーの活動です。この活動は、高校生が農家の方々を取材してその現状と魅力を発信し、また、少しだけお手伝いをしようというものです。そうすることで、農家さんの頑張る姿がもっとたくさんの人に伝わり、畜産のイメージが上がると考えました。また、個人テーマである放牧は、必ずしも簡単ではないことが分かりました。オーストラリアでは放牧をしていても常に栄養のある草が生えるように工夫し、栄養価が足りないときには濃厚飼料をあげていました。そのため日本でも、全ての農家がオーストラリアのように放牧を行うのではなく、土地や気候に合ったやり方で家畜を飼育するのが一番だと考えました。
今後の日本の畜産には、私たちが研修を通して学んだことや考えたアイデアを広めたり、実践したりしたら良いと思います。私たちのグループが考えた畜産イメージアップカンパニーだけでなく、他のグループが考えた消費者のニーズに合わせた肉の販売や、SNS を使った発信などの企画もとても面白く良いものだと感じました。それを広め実践していくことで、畜産に興味を持つ人が増え、担い手不足を改善できると思います。また、その内容が農政などを司る人の目に留まれば、新たな枠組みや補助金等の仕組みが充実し、畜産農家にとってもプラスになると思います。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアでは、まず規模の大きさに驚きました。何百 ha という土地にたくさんの牛を飼っていて、単純にすごいなと思いました。しかも副業として牛の繁殖を行っている農家も多く、少ない労働力で経営をしていました。また、ほとんどが放牧のため、餌を購入することもなく、少ないコストで生産をしていました。日本では輸入飼料の高騰により経営が苦しくなっていますが、オーストラリアはその影響をあまり受けていませんでした。オーストラリアでは、人にも牛にも負担がかからない畜産をしているように見えました。私は日本でもオーストラリアのようにのびのび牛を放牧させて、酪農をしたいなと思います。しかし、土地が狭い日本ではなかなか厳しいのが現状です。
オーストラリアの人たちに話を聞いてみると、私たちが「オーストラリアって凄い」と思うのと同じように、オーストラリアの人たちも「日本の畜産について凄い」と思っていることが分かりました。例えば、和牛のきめ細かいお肉などです。日本は放牧をしていないから悪いというのではなく、日本に合った畜産をしているということが、海外に出てみて分かりました。私はその国に合った飼い方で、家畜を飼育していくのが良いと考えます。そのなかで出てきた課題を、互いの国同士で協力しながら解決していくのが大切だと思います。現地の高校生やホストファミリーと交流してみて、皆、温かく良い人たちでした。飼料価格の高騰や地球温暖化など様々な問題がありますが、世界が一丸となって解決していくことが大切だと思います。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
日本の畜産は素晴らしいということと、畜産は楽しい仕事だと伝えたいです。前の項目で述べたように、日本の畜産は私たちが思っているより、海外の人から評価を受けているからです。また畜産業はネガティブな 3K の仕事と言われることがありますが、そんなことはありません。成長を見守ることができ、日々変化があり、面白い仕事です。こうしたポジティブなイメージが増えていくと、今、畜産業をやっている農家さんに自信を持ってもらえるようになり、活性化につながると思います。また、畜産の面白さを広めることで、若い人たちに興味を持ってもらえると思います。そうなると、担い手不足の解消や畜産のイメージ改善をすることができます。若い人が畜産業に就くことで、これまでになかった新しいアイデアが生まれるかもしれません。畜産のイメージを上げることで、消費者に畜産をもっと身近に感じてもらえると思います。
そして、私が考える次世代の畜産業とは、輸入飼料に頼らず、自給飼料を活用していくことだと思います。今、輸入飼料の高騰により、多くの酪農家の経営が悪化しています。その状況を改善するために、農家が自ら飼料を生産することができれば、飼料を購入するより、コストが削減できます。飼料作物を栽培する場所には、耕作放棄地を利用すればよいと考えます。将来、日本の飼料自給率がもっと上がるように取り組みをしていくことが大切だと思います。

6．私の夢、これからやりたいこと
私は、高校卒業後、大学に進学して、さらに学びを深めたいと考えています。大学では、家畜の栄養学を学び、その家畜に合った飼料を考えられるようになりたいです。また、地域の資源を生かした飼料生産の研究にも取り組みたいと考えています。大学生活では、大好きな馬や牛のことを学びながら、いろいろな人と交流を深めて、楽しみたいと思います。そして、将来は酪農家を支える仕事に就きたいと考えています。畜産局などで働き、酪農家さんの経営の手助けになるようなアドバイスができるようになりたいです。
そのために、これから勉強を頑張っていきます。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
畜産の勉強はとても面白いです。学校で畜産の勉強をしていると、休日も学校に登校しなければいけなかったり、放課後に残らないといけなかったりと大変なこともあると思います。しかし、今、畜産の勉強をしていることは、他の普通科の高校などではできない体験であり、貴重だと感じます。
また、畜産には色々な良さがあります。私が感じる畜産の良さは、日々変化があり、自分が手をかけると動物たちがそれに応えてくれるところです。皆さんも自分が思う畜産の良さを見つけてみてください。

畜産アンバサダー
大阪府立農芸高等学校
資源動物科２年
松江　璃音

1．テーマ
若者が働きやすい経営

2．キーワード
風土に合った経営

3．キーワードのつながりと考察
「若者が働きやすい経営」というテーマで、「風土に合った経営」について考えたとき、この二つの項目はともに利益を出すことに通ずると思った。なぜなら、若者が働きやすい経営を行うためには、できるだけ利益を出す必要があり、利益を出すためには風土に合った経営を行う必要があると私は考えるからだ。
現在、日本は少子高齢化とともに農業の若手の担い手不足に陥っている。今以上に農業現場に若者を増やすとするならば、労働環境の改善をするにほかない。ここで風土に合った経営が大切になってくる。適地適作を行い、なおかつマーケティング層を絞ることで大きな利益を生み出せるのではないかと思う。私は、このようなノウハウがオーストラリアにあるのではないかと思い、このキーワードを選択した。
私は研修中、消費者や労働者目線に立ちどのような商品を購入したいか、どのような環境で働きたいかということを頭に入れた上で「風土に合った経営」というキーワードについて考えた。オーストラリアの肉牛経営を例にあげてみると、繋ぎ飼いは少なく、ほとんどが放牧で飼育されている。放牧では餌代が少しで済むことに加えて、糞尿の掃除もする必要がないため低コスト、低労働力で経営を行うことができる。また、日本より多くのオーガニック製品が販売されている現状を知った。しかしこれは広大な土地や、高い金額を出してまでも購入したいという国民の価値観があってこそのものだと研修を通して感じた。
日本の畜産には、オーストラリアの働き方を取り入れることができれば、今以上に日本の畜産が良いものになると思う。島国で山の多い日本で、オーストラリアのような土地を用意することは難しいであろうとともに、オーガニック製品を購入する人をオーストラリアと同じ水準まで増加させるのも難しいと思う。しかし働き方なら、取り入れることは不可能ではないと私は思う。季節繁殖を行い、ある程度まとまった休みを取ることや、輪換放牧を短い期間で行うことで、牧草を絶やすことなく飼料費を落としながら放牧中心で飼養をすることができる。このように、休暇を取れる環境であれば新規に農業に携わりたいと思う若者が増え、日本の畜産がより良いものになるはずである。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
初めてオーストラリアに行き、とても貴重な経験ができたと思う。渡航前は「日本人差別にあったらどうしよう」という気持ちが少しあり不安な面もあったが、渡航後は差別なんて起こりえないという気持ちに変わっていた。なぜそう思ったかというと、オーストラリアは多民族国家で、ワーキングホリデーなどを利用してやってくる方が多く、スーパーマーケットなどでも世界中の宗教や文化に合わせた商品が販売されており、移民にやさしい国だということがすぐに分かったからである。研修期間中のファームステイ先では、楽しくて快適な９日間を過ごさせてもらった。私のファームステイ先の方は、デンマークとイギリスからの移民の方であった。その方たちは、言葉で思うように伝えられないようなことであっても、ジェスチャーをくみ取ってくれることや、私の興味のある野生動物のことは、分かりやすい英語でとことん教えてくれた。ファームステイ期間中は、毎日夕食後２時間ほど、お互いの生活の違いやその日の研修内容など話を楽しんだ。このような研修を通して、オーストラリアの畜産だけではなく、人として大切な部分についても十分に学ぶことができた充実した研修だったと思う。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
畜産アンバサダー活動では、日本の畜産の良さや、これからの畜産業をより良くしていく思いを大きくアピールできたら良いと思う。新たな働き方や日本の畜産を知ってもらうことで、これからを担っていく若者が少しでも畜産に興味を持ってもらい、将来の選択肢の一つに入れてほしいという気持ちがある。それができると、これからを担う若者が畜産業に参入することで、若者らしい畜産というものを展開できると思う。若者らしい畜産とはより効率的な生産方法や働き方を導入し、現在の若者が働きやすいと感じるものである。現在の若者は、休暇や肉体労働の多さという点で畜産業参入が少ないように感じる。そこで私たちが、新たな未来の畜産業を創り実行することで、就農者を少しでも増やしたいという気持ちがある。そうすることで、日本の畜産は途絶えることなく良い水準を保っていけると考える。これからの畜産を担っていくのは私たち若者であるということを、前向きに考えているということをしっかりと伝えたい。そして日本の畜産をより良いものにしたい。
私の考える次世代の畜産は、スマート機器などが導入され、肉体労働が少なく誰もが携われるものである。今の日本の畜産では肉体労働という面で女性が携わりにくいことや、命を相手にするため休日を取りにくく仕事と趣味の両立が難しいということがある。ここでスマート機器が導入されれば、そのようなことを解決できると思う。次世代の畜産を実現するには、多くの人が現状の畜産に疑問を持ち、どうすればより良くなるのかということを話し合い、そして改善案を試行錯誤することが大切だと強く思う。

6．私の夢、これからやりたいこと
私はこれからの人生で畜産という分野だけにとらわれず、広い分野で学習していきたいと考えている。多くの分野を学習し学びを深めることで、何か問題にぶつかったときでも、様々な分野の中から適材適所な解決法を見つけられる。高校卒業後は、水産学もしくは野生動物学を四年制大学で学びたいと考えている。水棲生物や野生動物が好きという理由もあるのだが、一番は自分の興味のあるまったく学んだことのない分野を学習したいという好奇心の面が強い。この分野を学ぶことで、どこか現在の畜産業の課題点とリンクすることを見つけられると思っている。そうして、これからの日本を担っていく若者として活動していきたい。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は非農家出身で、高校に入学してからわずか２年しか畜産というものに携わっていないが、畜産の魅力をたくさん知ることができた。肉体労働で、努力や思いがすべて反映されるものではないということを、身をもって感じた。しかし、私にこの畜産に関わっていきたいという思いがなくなることはなかった。
それは、新たな命が誕生した時の感動、誰かの役に立っているという誇らしさを感じられたからである。
人間の生活になくてはならない「食」という分野に関われる喜びを感じ、私たちティーンネイジャーがより良い日本の畜産を創っていこう！

畜産アンバサダー
島根県立出雲農林高等学校
動物科学科３年
木村　自然

1．テーマ
若者中心の畜産

2．キーワード
若者

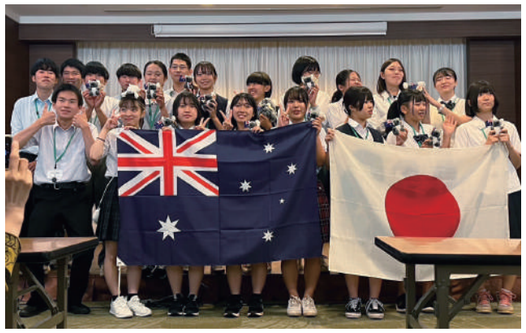
3．キーワードのつながりと考察
「若者中心の畜産」について考えたとき、最初は日本の若者の就農率は低く、現在では高齢化による後継者不足という課題もあるが、オーストラリアは畜産大国のため、日本と同じように若者の就農率が低いという課題はないと考えていました。オーストラリアの学生さんは、小さい頃から農業に携わっている人が多く、その知識を学校で深めていく人が多いのではないかと考えていました。日本で若者の従事者を増やしていくためには、まず若いうちから農業や畜産に興味を持ってもらうことが、私の中では重要なのではないかと考えていました。そのため普段農業や畜産に関わる私たちが、身をもって感じたことを色々な人に発信していくことが、この日本の課題解決に近づける方法だと考えていました。
実際に研修をしてみると、オーストラリアでも、日本と同じように若者の就農率が低いという課題がありました。大人になると都会の方に出て仕事をしたりする人もいれば、高校までは農業や畜産について学ぶが、実際は農業や畜産系の仕事には就かない人が多いのが現状だと聞きました。その課題を解決するために、オーストラリアでは政府がお金を払って、田舎での農業体験機会提供をしていると聞きました。私は、実際に牛と関わるまでは、命の大切さや畜産物を生産する大変さを知りませんでした。そのため、身をもって新しい体験をすることは、色々な感情が生まれ、農業や畜産の意外な一面を知ってもらえる良い機会になるのではないかと、私は思いました。日本において、政府がお金を払って実施するのは難しいかもしれないけれど、こういう体験が畜産従事者を少しでも増やすためには必要だと考えました。
帰国直後に行った研修成果発表の結論で、私たちのチームは、近くの小中学生にはVRでの搾乳体験、遠くの小中学生にはオンラインで畜産の魅力について知ってもらうというアイデアを考えました。私たちにとっては、実施しやすいアイデアなので、これを実際に実施することで、畜産に少しでも興味を持ってくれる人が増えたらいいなと考えます。
日本の畜産は、オーストラリアに比べて労働時間がとても長いと感じました。労働時間が長いとどうしても自由な時間も取れないし、精神的・身体的にきつくなってしまうのではないかと思いました。そのため、人手の増加による労働力削減や、可能な限り放牧をして、個体管理の手間を省くことが必要なのではないかと考えます。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアはまず土地が広く、ほとんどが放牧をやっていました。放牧は個体管理に時間をかける必要がないため、肥育農家の場合ですと、病気や怪我の有無の確認だけを朝・夕に行うと聞きました。そのため畜産農家を営む方は、だいたい副業として畜産農家を経営しているそうです。それに比べて日本は、国土面積がオーストラリアに比べて圧倒的に小さいため、オーストラリアのような放牧は厳しいです。そのため、個体管理に時間がかかってしまいます。また、近年日本の畜産業の課題としてあがる飼料代の高騰も、オーストラリアも多少は影響を受けていると聞きましたが、離農者の増加はないそうです。そのことから、オーストラリアは国土面積が広いため、ある程度は飼料を自給できているのではないかと思いました。日本にはオーストラリアとは違う畜産の良さがありますが、世界情勢の影響が大きいので、この対策について日本では考えていく必要があると感じました。
もう一つは、畜産業はどうしても収入が安定しないのが現状であるため、国からの支援などを強化したら離農者減少を防ぐことができると考えました。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
私は、日本に畜産業がなぜ必要かと、日本の畜産の課題と未来について広めていきたいと考えています。
まず、なぜ畜産が必要かについては、私たちが普段食べているお肉などは畜産物だからです。何気なく口にしているお肉や卵、牛乳などは畜産動物によって生産され、畜産業を経営している人たちによって食べることができていることを実感してもらいたいからです。
日本の畜産の課題と未来については、まず日本の畜産業が抱えている課題について知ってもらうことで、今、日本の畜産業に必要なことがより明確になり、それを解決することで日本の畜産業がより良くなると思ったからです。畜産物が、畜産動物や畜産経営者によって生産されていることを理解してもらうことで、畜産業や食の興味を持ってもらうことができると思いました。
また、日本の畜産業の課題について知ってもらうことで、将来畜産がなくなってしまうかもしれないという危機感が生まれ、様々な解決につなげることができ、今よりも日本の畜産業を発展させることができると思ったからです。
次世代の畜産は、機械化が進み、今よりも仕事の内容的には楽になると思います。しかし、人と動物との関係には変わりはないので、常に動物に配慮することが重要になってくると思います。飼料の高騰が近年の課題としてあげられるため、海外輸入に頼る日本はなるべく多くの飼料を自給し、世界情勢の影響を受けない畜産業にしていくことが大事だと思います。

6．私の夢、これからやりたいこと
私は将来、家畜人工授精師の資格を取り、繁殖・肥育農家として就農したいと考えています。そのため高校卒業後は、島根県立農林大学校に進学し、様々な資格を取りたいと考えています。私は現在、課題研究で和牛甲子園に取り組んでいるため、その経験を生かしながら肥育牛の育成もしたいと考えています。肥育では独自の飼料をつくってみたいです。繁殖牛は牛になるべくストレスのかからない放牧を行い、飼料給与にも時間をかけないようにして、牛にも人にも優しい経営を目指しています。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
今回の研修を通して同じ思いを持つ高校生たちと出会い、ともにいろいろな経験をして、自分自身とても勉強になりました。研修を経て、日本の畜産業をもっと元気にする方法を様々な方向性で各チーム考えていたので、それをもとにもっと日本の畜産を元気にしていけたらいいなと思っています。
後輩たちは、自分たちと似たような課題にぶつかると思うので、どうやったら畜産業を良くしていけるのかを日々ともに考えて、日本の畜産をもっと元気にしていきましょう！



畜産アンバサダー
広島県立油木高等学校
産業ビジネス科３年
田邊　綱汰

1．テーマ
創造する畜産スタイル

2．キーワード
コスト削減

3．キーワードのつながりと考察
「創造する畜産スタイル」というテーマで「コスト削減」について考え、オーストラリアでは広大な土地を利用した粗飼料の大量生産や、大型機械の導入、除糞や餌やりなど日常管理の機械化により、省人化や産業のスマート化をしているという考えでした。このプロジェクトの事前研修では、ウクライナ情勢による飼料価格の高騰、干ばつによる牧草の生育不良課題を知り、オーストラリアにおいて飼料問題がある中で、アニマルウェルフェアをどのように実践しているのか興味を抱くようになりました。
オーストラリア研修では、様々なことを実際に経験しました。まず農家さんは 10ha 以上の広大な土地での放牧飼育をやっており、牧草も圃場一面に繁茂しており、のびのびと飼育できる環境を目の当たりにしました。そしてオーストラリアでは、自然授精を行っていることに大変驚きました。オーストラリアでは、完全な放牧をしているところが多く、牛の出す糞尿は自然に還り、また草が生えるというような循環型農業の実践をしており、機械化はあまりしていませんでした。しかし牛の個体情報（例えば一日当たりの体重の増減）をデータ化し、耳標に似た物を専用のスキャナーで読み取ることで全てが分かるということを学び、この体験は私自身初めてのことで想像を超えていたので、とても衝撃的でした。
オーストラリアで掛かるコストでいえば、飼料代は穀物の種や乾いた草、そしてハエやアブなどの吸血昆虫の予防注射などでした。このことから、オーストラリアのコスト削減方法は、放牧することによって飼料代があまり掛からない、人工授精代が掛からないなどで、大幅な利益が出ていると考えました。

研修中、オーストラリアで行われているせりを見学する機会がありました。この日の取引最高値は、750kg の約 21 万円でした。日本と比べ安価である現状に驚きました。また私は他の牛においても、取引値段は安価であると考えます。飼料代や人工授精代が飼育の経費を掛けないことが、肉質向上に限界を与えていると考えました。オーストラリアでは牛の取引値が安価であることで、牛肉の消費が普及していると感じました。日本においても、自国の牛肉の消費量を増大させることが課題だと私は考えています。
しかし、オーストラリアで行っていることを、そのまま日本でやることは難しいです。例えば人工授精という側面で考えた場合、日本の繁殖は人工授精が主で、人工授精において、育種価値の高い牛を繁殖することで「和牛」のブランド化につなげています。しかしそれにより、コスト削減にはつながっておらず、消費者の需要の低下にまで影響していると考えています。では、人工授精にかかわるコスト削減をするにはどうしたらよいのか、それは人工授精による受胎率を向上させることに解決策があると考えました。日本では放牧があまりされておらず、受胎率が悪いと考えています。オーストラリアのように放牧ができたら、受胎率向上だけでなく、分娩時の母牛の健康状態にも影響すると考えます。そのためには人工授精や放牧について、私自身ももっと専門的な知識を習得する必要があると考えました。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリア研修に参加するにあたって、最初はうまく仲間と協力していけるだろうか、異国の地でやっていけるだろうかといった不安がたくさんありました。しかしホストファミリーの方々や、現地の人の優しさに触れ、そして 19 人の仲間がいてくれたおかげで、とても充実した研修になりました。
また日々の研修や見学を通じて、自分の知らないことや知らない世界が次々と知れて、普通の高校生活では味わえない充実した研修となりました。報告会に向けたチーム活動では、仲間の知識量の多さや主体性に圧倒され、しんどい部分もありましたが、みんなで協力して一つの発表にまとめたあげたときの達成感や、充実感は私自身の成長につながり、一生忘れられない思い出になりました。
またオーストラリアで会った農家さんのほとんどが、半袖短パンという服装で、ワイルドでカッコいいという印象を抱くと同時に、「自分たちはこのオーストラリアの食を支えている」という畜産業への誇りと自信を感じとることができ、私もこのようなカッコよさや誇りを、これからの若者に伝えていくことがとても大切で、私自身もオーストラリアの方のような大人になりたいと思いました。

アニマルウェルフェア面でも一定の基準があり、見学に行ったどの農家さんも大事にしていると言われて、私自身も自身の牛に対して尊厳をもって接したいと思いました。またジェンダーフリー面においても、オーストラリアでは女性の働ける環境が増えており、実際、獣医さんの 80％が女性という点も、オーストラリアと日本との大きな違いを改めて感じました。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
私が広めたいことは二つあります。一つ目は畜産現場の現状（リアル）を伝えていくことです。多くの消費者は、生産者が牛を育てていく現場を知らないのが現在の状況です。消費者もそうした状況があるため、何をしたらいいのか分からないのではないかと思いました。そういった人たちへのアプローチとして、最近の便利なツールである Instagram に、畜産をしている様子などを載せていけば効果的だなと思います。
二つ目は畜産業の魅力です。畜産業は第一次産業に属し、私たちの食や生活を支えていくうえでなくてはならない産業です。しかし、若者の担い手不足が農業の課題です。そこで、若者に農業を知ってもらううえで必要なことは、教育だと考えます。オーストラリアのマランダ高校を訪れて聞いた話に「小学校から農業の授業を学び、中学校で 8 週間だけ農業の勉強をする」ということから、小、中学生で農業に触れる場面がオーストラリアはあるので、若者の重要性が浸透していると感じました。そこで、日本でも農業の時間を小学校高学年ぐらいから設けることができたらと思いました。また私たち農業高校生が、小、中学生に体験方式で農業を教える活動ができればと考えています。
このようなことができると、消費者は生産者の現場を知り、理解してくれる人が増え、コロナ禍で大変な情勢のときなど、食べて応援してもらったり広めてもらえたりと、生産者と消費者とが互いに手を取り合った畜産業になっていくと思います。実際に、2018 年 7 月の西日本豪雨の際やコロナ禍において、私の住む広島でも酪農家さんが乳廃棄をされているという現状がありましたが、一部の消費者によるクラウドファンディングが実施されていました。このような事例ができたらいいなと考えます。
最後に、私の考える次世代の畜産業は、生産者は消費者のニーズに合った生肉をつくり、コスト削減を可能にし、自国の誇れる「和牛」を自国で消費してもらえる未来を理想としています。安定した経営をし、消費者を支え、自給率を向上させたいです。また消費者には、積極的に畜産のことを知ってもらうために、地域で小規模のセミナーを開いたりして、消費者が生産者を応援できる環境を創っていきたいです。

6．私の夢、これからやりたいこと
私は将来、実家の繁殖経営を継ぎ、神石高原町の繁殖和牛の飼育を発展させていきたいと考えています。そのためには、畜産業種だけでなく他の農業分野との連携も必要だと考えています。そのために、高校卒業後は畜産を勉強できる四年制大学へ進学し、人工授精の知識や、より詳しい和牛の勉強をするのはもちろんですが、農業経営や資源活用などの専門的なことも学びたいと考えています。そして具体的な目標としては、人工授精師の資格取得を目指しています。
また、今回オーストラリアに行ったことにより、牛を広い土地でストレスなく飼うことに興味を抱き、将来は放牧に挑戦してみたいと思います。牛を良い環境で飼うことで、消費者の信頼や購買欲が向上してくれたらいいなと考えます。これからも、消費者に何らかのかたちで伝える場面があったら積極的に参加していきたいです。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
皆さんは、普段どんなことを考えてお肉（牛肉）を買いますか？値段、産地、品質いろいろな意見があるでしょう。私もついつい安い海外産のお肉を買ってしまいます。しかしそれにより、和牛の値段が下がり、日本の繁殖農家や肥育農家は経営が厳しい現状です。日本の和牛は、世界に誇れる最高水準の肉質、飼育管理です。無理に買う必要はありませんが、日本の畜産業の素晴らしさを知ってもらい、そういったことを知った上で、肉をできれば買っていただけるといいなと思います。また、畜産業の魅力として動物と触れ合いながら、自分の育てた動物が良い値段で売れたときの達成感だと感じています。
これからの畜産業を一緒に盛り上げていきましょう！

畜産アンバサダー
熊本県立熊本農業高等学校
畜産科２年
原田 里佳子

1．テーマ
創造する畜産スタイル

2．キーワード
消費者とのつながり

3．キーワードのつながりと考察
「創造する畜産スタイル」というテーマで、「消費者とのつながり」について考えたとき、私の考える日本の畜産業の課題としては、消費者に畜産業界における後継者不足の問題や、飼料価格の高騰などの課題を含め、現状を知ってもらえていないことだと考えていた。そこで、私が知識として持っていた飼料費や後継者不足などの畜産業の「現状」を消費者に発信することで、消費者がより畜産に対して興味を持ち、生産の輪の中にある消費者の立ち位置や商品への関心、購入意欲等を含め、消費者の行動に何らかのアクションを起こせると考えていた。生産者と消費者の関係を普段から身近に感じられるような活動や取組が、新しい畜産業のスタイルとなり、将来の畜産業の力となっていくと考えた。
実際に研修をしてみて、畜産が盛んなオーストラリアでさえ、まだまだ消費者の関心が足りないと言われていたが、それでも「オーストラリア産」に対し、消費者は安心で美味しいものだと信頼をおいていた。これは日本でも言えることで、私はここから消費者へ、日本の畜産業について広めたいと考えた。この消費者の持つ「日本産」への信頼が、生産者や研究者により良いものをつくる意識を持たせ、それにより限られた土地の日本が、世界に誇れる肉をつくれているのだと考えた。何かを広めるために、課題などのマイナス面の主張ばかりを考えていたが、消費者が実際にどれだけ畜産業の力となっているのかを主張するのも、新たな視点での取り組みで試してみる価値の高い内容であると考える。

日本の畜産に今回の研修成果を反映させるため、まずは多くの方に考えたことを発信したい。高校生の視点から見たオーストラリアの畜産業や、感じた日本の畜産に対して興味を持ってくれる人はたくさんいると思う。よって、中高生や一般の消費者の方々に分かりやすいように伝え方を工夫しながら発信していきたい。また、高校生という社会や現場を大人の方よりも知らない私が、実際に見て体験して感じ、考えたことは、同じ社会や現場を多くは知らない若者に伝わると考える。そして、今回の研修でディスカッションの重要性に気づいた。そのため、私の研修報告を行うと同時に、より深いディスカッションができるように研鑽を積みたい。聞いた内容を深めるだけでなく、多種多様な人の考えに触れることで、新たな価値観に出会い、自身の視野がより広がると考える。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアの広大さを生かした放牧や、クイーンズランド州のメインの仕事の傍らで畜産業を行うことができることに驚いた。しかし、それと同時に、日本の畜産や牛への向き合い方について考える機会となった。私が感じた日本の畜産は、科学技術や血統を重視し、一頭の価値を高め日本の技術の高さや科学の進歩具合、人間性を感じることができた。人間性とはオーストラリアの人ほどゆったりしてないし、自分の家畜に対するこだわりの強さも一等級だと思った。限られた土地、日本では栽培するには効率が悪い飼料、年間で大きく変化する気温、少子高齢化などさまざまな課題や制限のある中で、そこを乗り切るために技術面を向上させていたのは、「さすが技術の国日本だ」と感じた。日本で生まれ育ち、日本について外から見る機会がこれまでなかったため、日本の政治や学校の在り方など海外の話を聞くたびに、日本についてマイナスな感情を抱くこともあったが、今回のオーストラリア研修で日本も課題はたくさんあるが、それでもその課題と立ち向かえるほどの技術向上の意識は高いことを改めて感じ、私もその技術を向上させる一員になりたいと強く思った。

晴らしさを伝え、生産者と消費者、両方が互いに尊重しあえる関係を創っていきたい。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
日本を外から見ることの大切さ、日本の畜産技術の高さ、消費者と畜産業のつながりを伝えたい。それにより、いかに日本の畜産業のレベルが高く、素晴らしいかを伝えたい。これは、私が研修を通して感じ、考えたことであり、知らなかったことでもあるため、多くの人が認知していないことでもあると考える。ニュースなどで日本の畜産業は課題が多く、危機に面しているということは多くの人が知っていると思うが、なぜ日本人は「日本産」に信頼を抱いているのか。この問いに対して、オーストラリアの畜産業や「オーストラリア産」に信頼を抱く現地の消費者と関わることで感じ、この答えに多くの人の関心を集められると考えた。それができると、日本の畜産業は、消費者の関心は高まると考える。それにより、何らかの大きなアクションを起こせずとも、日本の畜産業について知ってもらうだけで、きっと小さな変化を生み出せると思う。畜産業の抱える課題は、複雑で経済と密接に関わっている。だから、多くの人の関心を集められることで、日本の畜産業がこれからも豊かに続いていく未来をつくれると思う。
次世代の畜産業は、さらにデジタル化が進み、対面での「繋がり」が減っていくことを懸念する。それでも、世代や職業を超えてネットでの「繋がり」は加速していく。それが、農業だけでなく、さまざまな職業への関心を生み、日本独自のブランドや生産物への尊厳へとつながり、互いを尊重し合う「繋がり」が育まれてほしい。
昔のような接触による繋がりが減少している現代に、SNS などを用いることによって、遠くの人の声も届けられるため、スマホなどを介した新たな繋がりが生まれている。この良い繋がりをより強固なものにしていくためにも、多くの人に畜産業の価値や素

6．私の夢、これからやりたいこと
日本の技術力の高さを知り、さらに日本の農業について知りたいと思った。そのために、大学へ進学し、より専門的な知識の習得へつなげたい。また、海外での現地研修により、日本を世界と比較しながら考えることの重要性を知ることができたので、オーストラリア以外の畜産業が盛んな国へも足を運び、学びを深めたい。そして、農業を間接的に支えられるような職業に就き、日本の科学技術の発展に貢献できるような人間になりたい。この夢を叶えるために専門教科や英語により力を入れ、農業高校生だからできる経験をより多く積んでいきたい。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
農業よりももっと効率的に稼げる仕事や、キツくない仕事もあると思う。でも、農業は全ての人が生きるために必要な「食」をつくるやりがいのある仕事。現在さまざまな問題を抱え、暗いニュースも続く中、「食」はみんなを笑顔にできる。農業は、そんな「食」を支える最高の仕事。
今回の研修で、日本と違うスタイルに触れることで、見えてきたものがたくさんある。現状が全てと思わず、視野を広げていろんな角度から見る大切さ。皆さんも身近な「畜産業」にいろんな角度から触れてみてください。
新たな発見と、楽しさが見つかるはず！明るい日本の畜産業をみんなで築いていきましょう！

畜産アンバサダー
熊本県立熊本農業高等学校
畜産科２年
井　真莉亜

1．テーマ
若者が働きやすい経営

2．キーワード
ジェンダーフリー

3．キーワードのつながりと考察
「若者が働きやすい経営」というテーマで、「ジェンダーフリー」について考えたとき、女性が畜産や農業をすることに対する差別や偏見、不安をカバーすることが大切だと考えました。未だに「女性は牛飼になれない」「牛飼は男性の仕事」「牛飼に嫁いだら跡継ぎを産まなければいけない」など、このような考え方が残ってしまっています。実際、畜産農家の男性に嫁ぐことに不安を感じるなど心配なことがある方、子供を産んだときに、仕事と育児の両立に自信がないという方もいるのが現状です。それらの課題を解決するためには企業経営にして、産休、育休、子供が熱を出したときに、看病をするための休みなどを取りやすくし、プレッシャーや不安を軽減する方法が良いのではないかと最初は考えていました。
実際に研修をしてみて、企業経営のハードルの高さやジェンダーフリーを進める前に、人手を増やすべきということに気がつきました。そのため、私は未来の畜産を担う新しい人手。つまり、「若者」が働きやすい経営について考えました。若者が働きやすい経営とは、「ライフワークバランスの確立された経営」だと思います。なぜなら、休みを得ることで、人も家畜も気持ちをリラックスさせることができるからです。私たちの考えるライフワークバランスの確立とは、「家庭を養うために家族との時間を削る働き方」ではなく、「AI を導入するなどして効率を良くし、家庭の時間を密に過ごせる働き方」です。この働き方が私たちの目指す理想の働き方であり、新たな畜産の魅力になると思います。このことからライフワークバランスの確立をする必要があると考えました。
私は今回の研修成果を二つの方法で反映すると良いと思いました。一つ目は、SNS を利用して発信する方法です。Instagram や TikTok で「畜産ってなんだろう」と興味を惹き、新聞やテレビなどより多数のメディアの目に止まるように工夫するとより良いと考えました。二つ目は学校に出前授業や地域の方々との意見交流会を開く方法です。小さい頃や学生時代の経験は、将来の夢に大きく影響します。畜産の魅力を今回のオーストラリア研修の話と一緒に伝えることで、印象に残り興味を惹けるのではないかと考えました。また、地域の畜産農家の方との意見交流会では、各農家さんの抱える課題や、それについての対策方法などを交換してより地域のつながりを深め、今回のプロジェクトの研修成果も報告できたら良いと考えています。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
プロジェクト参加メンバーと事前研修で初めて顔を合わせたとき、緊張や本当に自分が行けるのか不安でした。また、研修報告会に向けての準備もなかなかイメージがつかずドキドキでした。しかし、事前研修を行っていくうちに緊張もなくなり、19 人の仲間とも打ち解けることができました。無事、オーストラリア研修を迎えることができて良かったです。オーストラリア研修を通して、人との繋がりがいかに尊いものかを改めて実感することができました。プロジェクトに参加しない限り、一切関係を持つことのなかった私たちが、みんなで「畜産業の活性化」という一つの目標を目指して集まり、海外研修で学びを深めるのは、一つの冒険のようでとても心に残りました。ホストファミリーや研修先の方々との繋がりも自分一人では、つなげない素晴らしいものだと感じました。また、人の意見は十人十色でひとつの話題の中でも、別の視点を持っている人の質問から「その視点いいかも」と良いヒントを得ることもできたのが面白く感じました。気の合う友達もできて、一生の思い出に残る良い経験になったので良かったです。
今回のプロジェクトに参加してみて、自分の将来についてより深く考えるようになりました。高校卒業後は、もう一度海外の畜産業を学びに行きたいです。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
私は畜産アンバサダーとして、理想の働き方と新しい畜産の魅力を広めていきたいと思っています。今回のオーストラリア研修で学んだことを踏まえて、私たちは「週休 3 日、1 日 5 時間労働」を目標にしたいと考えました。なぜ、私たちがこのように考えたかと言うと、家庭との関わり方を見つめ直す必要があると感じたからです。1 日 8 時間労働と言われている世の中ですが、朝早くに家を出て夜遅くに帰ってくる。子供や奥さんの寝顔しか見れない一日もある方も、一定数いることが事実です。実際に酪農をしている私の祖父母も、朝とても早くに家を出るため、朝に顔を合わせることがほとんどありませんでした。忙しく働いている大人をみて、私もそのような生活に耐えられるか不安になったこともあります。私の他にも、そのように感じたことのある人もいると思います。
そこで私は「週休 3 日、1 日 5 時間労働」に設定し、残された 3 時間で夜ご飯をつくったり、子供のお迎えに行ったりなどができる時間をつくることが大切だと考えました。しかし、これらを取り入れるためには、より作業効率を良くするために AI ロボットの導入や人手が必要不可欠です。初期投資が高く、なかなか手につけることができない AI ロボットを国からの補助を利用して導入したり、外国人労働者と働いたりすることでより目標に近づけると思います。それらができると日本の畜産業の新しい魅力になり、若者や新規就農者が増えるはずです。
私の考える次世代の畜産は国民を支える誇り高き職であり、若者中心の活気溢れる畜産業です。誰もが畜産の素晴らしさに気づき、一緒に畜産業を盛り上げ、応援してもらえるようにしたいです。このことから、私は理想の働き方と新しい畜産の魅力を広めていきたいと考えました。

6．私の夢、これからやりたいこと
私の夢は、若者の目標になる畜産農家です。具体的にはライフワークバランスの確立をし、新しい魅力として発信し、どの職業よりも人気のある、輝く畜産経営をしたいと考えています。そのために、私は他の国の畜産経営方法をもっと自分の目で見て体験してみたいです。なぜなら、何を一番に考えるかの意識の違いで、働き方やライフワークバランスが変わることを、身をもって体験し、面白いと感じたからです。他の国の経営方法をヒントに、休みがないきつい印象の畜産のイメージを変えることができるのではないかと興味が湧き、私の将来のワクワクとアイデアが何倍にも膨らみました。それらを " かたち " にできるように、これから頑張りたいです。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
普通に生活していたら踏み入れることのない畜産業に、各々が素晴らしさや魅力を感じて入ってきたと思います。経験したことがある人にしか分からないやりがいを、もっともっと世の中に発信していくべきです。今現在、根強く残っている「きつい・汚い・稼げない」の 3K のイメージを、私たち若者がキラキラ輝いて働くことで、そのイメージを取り払うことができると思います。
一緒に新しい未来の畜産のスタートラインに立ちましょう。日本の畜産を担うのは私たち若者です。

畜産アンバサダー
熊本県立菊池農業高等学校
畜産科学科３年
松尾 晏奈

1．テーマ
畜産イメージアップ

2．キーワード
自給飼料

3．キーワードのつながりと考察
「畜産イメージアップ」をテーマとして考えたとき、私自身は非農家で、牛も飼っていませんが、牛が大好きで今ここにいます。イメージアップするには、やはり育ってきた環境もそうですが、身近に畜産があり、学べる環境があると必然的に興味が出てくるのではないかと考えます。
そんな中、今の畜産経営情勢から研修のキーワードに決めた「自給飼料」の大切さを実感し、研修を通して海外の取り組みを日本へ生かせないかと考えました。イメージアップと粗飼料とにつながりはないように思いますが、牛の主食は牧草です。牛がのんびり反芻している姿に、私は癒されます。そこで、オーストラリアでの農業スタイル、自給飼料率について日本と比較しながら、メリットとデメリットについて学んできました。
実際にオーストラリアの農家を見てみると、広大な敷地の中、牛一頭あたり 1ha の放牧地を持っています。今回訪問したクイーンズランド州テーブルランドでは、土地があるから牛を育てる牛メインの農業ではなく、畜産をサブワークとして取り入れていたところが多く見られました。そのため、畜産業にあてる仕事時間が一日に約 4 時間と、日本に比べ非常に短いことが大きな違いです。管理方法も、時期によって牧草を変え、

牛が草に飽きないよう行っています。また、去勢や除角などをしないストレスフリーな飼育と、90% 以上を自給飼料で賄っています。日本は集約農業なので、限られた条件の中、牛一頭一頭を丁寧に育てているため、時間やお金、労働力が必要になっていると思います。
ここで感じたのが、オーストラリアの乳牛は日本に比べると痩せていて、乳量も半分以下だったことです。どっちが良いかと考えたのですが、答えが見つからなかったです。しかし、牛を取り巻く環境がどちらの国においても、牛を考えた畜産経営が行われていることに気づきました。
私たちグループが考えたのは、畜産イメージアップカンパニーとして、高校生による農業体験部といった部活動をつくってみることです。この計画は、地域の農家さんの牛の管理方法などを SNS で発信し、畜産業の魅力を高校生の目線で伝える。それが伝わった人には行動に移る。農作業の手伝いや農家さんとのつながりをつくり、理解を深めることができる。そのメリットとして、国産畜産物の消費量増加や、労働力が増えることによって、生産者の活性にもつながると考えます。さらに、担い手育成にもつながると思います。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
オーストラリアの研修を通じて考えたこと
今まで学校の牧場しか見たことがなかったので、オーストラリアの放牧を初めて見てみて衝撃を受けました。40ha や 80ha で放牧されている牛は一つの品種だけでなく、大きなケアニーナ種から小さいアンガス種まで同じ環境で育てられています。オーストラリアの農家の方々は、良い草をつくるためにこだわりをもって栽培されていました。例えば、バイオダイナミック農法です。私は初めてこの農法を知りました。バイオダイナミック農法とは、宇宙を含む自然の全てと調和する農業です。その方法として角の中に堆肥を入れ、30 分間水の中でかき混ぜ 1ha ずつ牧草に植える方法です。そうすることによって土が良くなり、良い牧草が育つそうです。草にこだわると牛が健康でいられ、人間にも負担がかからない飼育方法だと感じました。
また、訪問した農家の一つが取り入れている VR 搾乳体験も印象的でした。子どもたちでも搾乳を体験できるよう、酪農家のアイデアでつくられたものです。先端技術を生かした取り組みで、興味関心を持ちそうなユニークなアイデアでした。オーストラリアでも、若い人たちは都会に行き、農業を継いでくれる人が少なくなっています。しかし、畜産業を盛り上げるために、現代的で面白い発想をし、担い手を増やしていく。日本でも、AI を使った農業体験など、誰でもできるような教育の場を設けていくと良いと思います。これからの農業を盛り上げていくには、時代に合った技術の利用と、昔からある農業方式を重ね合わせることで、興味関心を広げることが必要だと思いました。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
私は畜産アンバサダーとして「畜産は昔から人の命をつないでいる、なくてはならない職業」ということを広めていきたいです。野生動物を改良し、今の畜産動物がいます。先人の努力があって、今の私たちに生かされている。そのことをしっかり捉えながら、畜産の大切さを伝えられたらと考えています。
そのためには、一人ではどうにもできないこともたくさんあります。仲間が大事であることに気づかされました。仲間と話し合うことで、発見や新しいアイデアが生まれ、次へのステップができました。畜産を広めるためには、仲間づくりから始める。仲間の大切さを広めたいと思うようになりました。仲間とは同じ目標や違った目標でもいいので、語れる場を設けることが大事だと考えています。好きな牛のことをもっともっと話していきたいと思います。
同じような仲間ができることで、色々な角度から畜産を見て畜産の改善点を見つけることができます。改善点を見つけることによって、働きやすい畜産業を発信することができ、担い手不足にも貢献できます。日本の畜産業は、若い人が増えていくことによって農家にもやる気を与え、人にも牛にも余裕ができ、バランスの良い畜産業になっていきます。こういった研修の場をどんどん増やしていくことが大切だと感じました。日本がさらに畜産体験の場を増やしていくことを望んでいきたいです。私自身は、体験したことを身近な人に話していくことが、これからの畜産業を盛り上げていく一つの道になればと考えています。
私が考える次世代の畜産業として、大切なものの一つに耕畜連携があります。畜産に偏りすぎているので、野菜や作物農家などが協力し合うことが必要になってきます。なぜなら、協力し合うことで相乗効果が期待できます。さらにはスマート農業を取り入れることによって、労働力削減や今まで気づかなかったことに気づけ、経営に余裕ができ、人や家畜の負担軽減にもなります。

6．私の夢、これからやりたいこと
今回の海外研修を受けて、自分の考えがかなり変わりました。オーストラリアでは、畜産業をサブワークとして、一つのことだけでなく、他のことをメインにして農業を楽しんでいます。畜産業は牛だけ豚だけなど、一つのことしかできないと思っていましたが、オーストラリアの農業のあり方を見ると、牛以外にも果物や野菜、加工まで行っていました。それに付加価値をつけ販売をすることによって、利益を得ていました。私は将来的には、酪農をしていきたいです。私が目指す酪農は、牛一頭一頭を健康に育てるため餌の質にこだわり、牛だけでなく働いている人たちにも楽しんでもらえるよう 6 次産業を取り入れた農業です。この夢を実現するために、畜産の知識はもちろん、自分が詳しくない分野や経営についても勉強していきたいです。そして、みんなで語る場所をつくることが、今の私の夢です。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は今回の研修で、本当に色々なことを学びました。畜産は、動物だけではなく草や土、環境などたくさんのことを知れるチャンスだと思います。また、たくさんの人と出会い色々な話をしていくと、どんどん視野が広がっていきます。そして、SNS を活用して私たちと一緒に畜産の魅力を発信し、畜産業を盛り上げていきましょう。
自分の夢の実現に向けて、今しかできないことにチャレンジしましょう！！

畜産アンバサダー
宮崎県立都城農業高等学校
畜産科２年
永緑　花琳

1．テーマ
若者中心の畜産

2．キーワード
施設

3．キーワードのつながりと考察
「若者中心の畜産」というテーマで、「施設」を自身のキーワードとした。私は将来、最新の機械を導入した酪農家になりたいと思っている。そのため、オーストラリアへの渡航前に宮崎県内の酪農家の施設を見学した。地域の酪農の最新技術を見ていれば、どのくらい進歩しているか分かると思ったからだ。
オーストラリア研修中に訪問した農家では、ロータリーパーラーで搾乳していた。ロータリーパーラーのメリットは、少ない搾乳者かつ定位置で作業ができるので、人件費と作業コストを抑えられる。実際に60頭の搾乳を２人で行っていた。ロータリーパーラーのデメリットについて聞くと、悩む間もなく「ない」と返答があった。宮崎県内の酪農家を見学したとき、パラレルパーラーで搾乳していた。このパーラーのメリットは、牛を縦に並ばせるため一度に多くの牛を搾乳できる。デメリットは、一斉退出式なので搾乳時間がかかりやすい。これらのことから、私は最新の機械を取り入れれば良いとしか思っていなかったが、それは間違いで、最新技術を導入するためには、その農家の牛の頭数や人手によって何を導入すべきか考えるということが分かった。
このロータリーパーラーを導入している酪農家の施設で、もう一つ驚いたことがある。それは､6次産業化を進めていたことだ｡搾った生乳の10%～12%をチーズやチョコレートづくりに使用するため、4℃のバルクで保管し、殺菌後の牛乳に味をつけ、味を選び、その味をチーズやチョコレートに入れるという作業を、牧場の敷地内に工房を構えて行っていた。これらの作業には多くの人手がいるため、日本の農家さんが行うのは難しい。
そこで私は、生乳をメーカーに売るのではなく、直接お店と連携して商品を販売すれば良いのではないかと考えた。例えばパン屋さんとつながり、パンの生地づくりに生乳を使い、パッケージに農家さんの情報を記載すれば、その農家さんに対するお客さんの関心が湧くのではないかと思う。そうすることによって、農家さんの生乳の売れ行きが高くなるのではないかと考える。私はこれから、搾乳形式や生乳販売方法を日本に合ったやり方で取り組んでいきたい。そして、この取り組みをSNSで発信していきたい。インターネット環境さえあれば、誰でもどこでも見れるSNSの活用は、現代の情報発信方法として最適だと思う。このSNSを通して、多くの若者に畜産の重要性を知ってもらうとともに、畜産業は男性だけの仕事ではなく、女性でもできることを広めたい。

4．オーストラリアの研修を通じて考えたこと
①オージーは畜産業に対する男女差が全くない
日本の畜産業は、多くの人が女性にはできないと考えている。実際に私も言われたことがあるが、オーストラリアでは、そのような考えは1ミリもなかった｡その背景には、哺乳や牛の体調の変化に気づきやすい、きれい好きといった女性特有の行為が男性の理解を深め、男女差別のない畜産業が実現しているのではないかと思う。男性が得意ではないことを女性がする、女性が得意ではないことを男性がする、このように、私は男女が支え合う畜産業を目指したい。
②労働力削減の取り組み
オーストラリアの牛は放牧されているが、行動範囲を区切る柵があまりなかった。これは、牛の首輪に付けているセンサーが、進入禁止の場所に近づくと電気が流れる仕組みになっているため、柵がなかった。日本は放牧する土地があまりないため、この取り組みではなく、繋ぎ飼いやフリーバンの牛たちにベルトにセンサーが付いた（発情探知機）ものの装着を積極的にすると良いと思う。そうすることにより、センサーで通知が来るため、人間が牛を直接見に行かなくてすむので労働力削減につながると思う。
③オーストラリアも離農者が増えている
オーストラリアの畜産従事者は、政府からの援助を受けている人が多かった。これは、若者が都会に行ってしまうのを少しでも減らす取り組みであった。政府が援助することによって、就農しやすい環境にあった。例えば田舎の農家に訓練生として行き、働いて政府から給料をもらう取り組みがあった。

5．畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと
私は畜産アンバサダーとして、畜産業は誇りのある仕事ということを広めていきたい。私はオーストラリアの農業や畜産を学び、どの研修先に行っても、楽しく堂々と働く農業従事者の姿を見て、この仕事に誇りを持って働いているのを実感した。オーストラリアは放牧がメインで、副業として農家を営んでいる人も多く、自分の好きな仕事ができているから、楽しさが現れているのかと思っていたが、そうではなかった。農業従事者一人一人が、農家であることに誇りを持ち、家畜を大切にしていた。特に「農業は、医者やパイロットと同じくらい素晴らしい仕事だ」という言葉を聞いたときは、心を動かされた。そして改めて、農業や畜産について考え直すと、人の生活を支えている食は、農業従事者がいるから、生産物がつくられ続けていると思う。もし農業従事者がいなくなれば、人は生きていけないと思った。このことを広めて、食事に対する感謝の気持ち（農業従事者に対する感謝の気持ち）を持つ人が増えてほしいと思う。
現在の日本は、新規就農者が増えつつある。新規就農者の意見はとても大切で、私たち畜産アンバサダーや新規就農した若者の意見、これを今後どう畜産業に生かせるかがカギであると私は考える。そのためには、私たちの意見を農業従事者と対話できる機会（共進会、せり、学校の実習で農家さんを訪問するときなど）で意見交換して学ぶ。このように農業従事者の経験を聞いて行動していく、継承していくことが必要だと思う。そして、農業従事者になっていく私たちと農業従事者になりたての新規就農者が、これからの畜産を支えるべきだと思う。また、私たちが新規就農者の意見、例えば成功した事柄（搾乳時間の配分）、失敗した事柄（エサの飼料配分）などを聞き、アドバイスをもらうことも必要だと思う。このように私は、先輩農家さんと未来の農業従事者が助け合いながら、日本の畜産を支えていきたいと考える。

6．私の夢、これからやりたいこと
私はオーストラリアでの研修を終えて、はっきりと決まった夢がある。それは実家の酪農を継ぐことだ。研修前は悩んでいた夢だが、畜産農家を目指す仲間に出会って、未来の日本の畜産業を支える一人に私もなりたいと強く思った。
今の目標は農業大学校への進学である。そこで、人口受精士の免許や農業機械の運転免許を取得することが目標である。大学校卒業後は、酪農ヘルパーとなって経験を積み、両親に認められる後継ぎになりたい。
そして宮崎の牛飼いの一人として、日本の畜産業を支えていきたい。

7．畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
実家の酪農や宮崎の畜産しか知らなかった私だが、このプロジェクトに参加したおかげで日本各地の畜産、オーストラリアの畜産といった様々な面から、畜産の楽しさ、誇らしさ、やりがいを実感できた。この経験は簡単にできるものではないと思った。畜産業に興味のある仲間に出会えて、もっと牛が大好きになった。
「畜産って楽しそう、私牛が好き」と思うあなた、今こそ、その気持ちを持ってこのプロジェクトに参加してみてほしい！そして、これからの日本の畜産業を一緒に支えていきましょう！

メンター
左草ブラウンスイス牧場
藤田 春恵

1．はじめに

私は現在、岩手県和賀郡西和賀町で、両親と私の 3 人で酪農を営んでおり、約 60 頭の乳牛を飼育している。日本では珍しい乳肉兼用種である「ブラウンスイス種」を飼育し、搾乳をリタイアした経産廃用牛やオスの子牛を肥育し、生乳生産の傍ら、牛肉や加工品の販売を独自に行っている。日本の乳牛・肉牛の中で決して主流になることのない牛を飼育・販売している立場から、この度のオーストラリア畜産研修で見聞したことと所感を綴り、報告とする。

2．オーストラリアの牛肉生産概要

(1) 地理的概要

オーストラリアは南半球に位置し、国土面積 769 万平方キロメートル(日本の約 20 倍)、気候は熱帯から温帯と幅広く、地域ごとに多種多様な動植物、自然、人々の文化が存在する。
国土の 58％が農地で温暖な気候を利用し、様々な農業を展開しているが、広大な農地の大部分で行われているのは畜産であり、自然植生を利用した放牧主体の飼育管理である。

(2) 世界屈指の牛肉輸出大国

オーストラリアの人口は約 2,500 万人、これに対し牛の飼養頭数は約 2,600 万頭。国内需要をはるかに上回って生産される牛肉の出口は輸出であり、オーストラリア産牛肉（以下、オージービーフ）の 71% は、アジア、米国など世界 100 か国近くに供給されている。
牛肉は輸出相手国によって生体牛、または精肉として流通している他、ハラルミートや低脂質高たんぱく質のワニやカンガルー肉など、消費者のニーズに対応した輸出向

けの商材展開も行っている。
オージービーフの強みは、その安全性と透明性である。四方を海に囲まれたオーストラリアは、外来の病原菌などが侵入しにくい上に、国として厳しい防疫体制をとっており、BSE 発生リスクが最も少なく、口蹄疫ゼロの清浄国とされている。
また、電子イヤータグを用いたトレーサビリティシステムにより、国内全ての牛の給与飼料、投薬歴から、出生農場・肥育場・家畜市場・輸送、加工・流通まで一元的に管理され、即座にデータにアクセスすることができる。
このシステムには多くの業界関係団体や組織が関わっており、オージービーフの品質は官民一体で守られている。

(3) 牛肉生産の多様性

「オージービーフ」と聞くとどんな牛を思い浮かべるだろうか。
アンガス？ヘレフォード？ WAGYU ？
オージービーフは、「オーストラリアで生産された牛肉」の総称である。南北でかなり気候や自然条件が異なるオーストラリアにおいて、赤道に近い北部では耐暑性があり吸血昆虫に強い小柄なアジア系品種が多く、比較的冷涼な南部では大型で産肉性の高いヨーロッパ系の品種が飼育される傾向があり、国内外の需要を見ながら肉質改良と環境適応性の両方を目的とした雑種強勢も積極的に行われている。

環境に応じて飼いやすい牛を選定していくと、品種が多岐に及ぶのは自然なことだと感じたが、日本はどうだろうか。私の牧場で乳用種の主流であるホルスタインとブラウンスイスを比較すると、後者は乳量こそ少ないものの耐暑・耐寒性に優れ、疾病にも強く、飼いやすさという点で前者に勝る。医療費や日常管理の手間の削減は、経営にとって出荷乳量と同じくらい大切な要素である。
今年、岩手県は、8 月の最高気温が毎日 30 度を超えるという記録的な猛暑だった。「このような夏が今後も続くようなら、経営において何を重視するのかを再考しなければならないな」と気付く良い機会となった。

3．牛と生きるライフスタイルの実現 ～クイーンズランド式「半農半 X」～

クイーンズランド州は、オーストラリア内の牛の約 46％が飼育されている最大の牧畜地域だ。乾燥した中央部において、牛たちは 1 頭当たり約 6ha の草地面積が必要なのに対し、比較的湿潤で粗飼料が豊富な同州では、1 頭当たり約 0.8ha の面積で飼育できる。私たちが訪れた同州テーブルランド地区の畜産農家は、概ね 40 ～ 100ha の草地に 60 頭から多くても 100 頭規模の農場が多く、これは日本でも珍しくない経営規模である。
しかし特徴的だったのは、視察先の多くの農場主に農場経営以外のメイン収入があるという点だ。ある肉牛生産者は、パパイヤ生産（こちらは国内屈指の大規模経営）を主軸に規格外のパパイヤを牛に与え差別化を図り、また別の生産者は地方でチェーン展開するスーパーマーケットのオーナーで、毎日職場に行く隙間時間に牛の世話をしていた。
草地面積にゆとりがあり、管理に手のかからない牛を選定することによって、生産コストと作業時間が大幅に削減でき、そこから生まれた時間を活用してメインのビジネスをしているのだ。スーパーマーケットオーナーの場合、農場の労働力は一人で、牛にかかる作業時間は週 10 ～ 12 時間。日本の肉牛農家の週当たり平均労働時間は、この約 2.7 倍である。一日たりとも世話を欠かすことのできない畜産業を営みながら、日々の簡単な管理を他の人に頼めば休暇も取れると言い、次の休暇には日本への観光旅行を計画中だった。

この日豪の違いを若い世代はどう見るだろう。「働き方改革」という言葉を、高校生たちも耳にしていると思う。しかし日々の学校での実習や、生産現場の現状から畜産はそこには含まれない、と無意識に思い込んではいないだろうか。
かつては日本の農村でも、牛は家々で数頭飼育されていた。それが時代とともに集約化され、現在の畜産業は専業農家が主流になったが、省力化とコストカット、そして副業との組み合わせで小規模高収入、自分の好きなスタイルでできる畜産という視点は、デジタルネイティブ世代の業界への新たな参入活路にならないかと期待したい。

4．人育ては積み重ね

2018 年に始まった本プロジェクトも今回で 5 回目を数える。今年、プロジェクト第 1 期生である森田七海さんと、メンターとして一緒にペアを組めたことは個人的に大きな出来事だった。プロジェクトを継続的にお手伝いさせていただく中で、かつての参加高校生と今、同じ立場で仕事をするという嬉しさは想像以上である。
国際農業者交流協会の海外農業研修経験があ

り、より高校生に近い世代の森田さんと、多感な高校生とどのように接したら良いか話し合いながら、ときには彼女を頼りながら過ごしたオーストラリアでの 10 日間だった。
人材育成や世代交代は「はい、次よろしく」とバトンだけを渡して終わるものではなく、未来で主役となる若者たちのビジョンを主軸に、彼らを取り巻く環境と、先人の積み重ねた歴史が入り混じりながら緩やかに受け継がれるものだと考える。

日本の畜産業は、今後益々困難な段階に入ると予想されている。
今の高校生たちは、そんな時代に働き盛り世代を迎えることになるのだが、それでも「畜産をやりたい！」と言う彼等はまさに希望の光である。
酪農経営をされているある参加生徒のご両親は、帰国報告会で高校生たちの発表を聴き「ここ数年、酪農業界は本当に苦しい。でも、今日ここに来て高校生たちの素晴らしい発表を聴いて元気をもらった。これで今日からまた頑張れる」と仰っていた。
「日本の畜産をもっと元気に！」がテーマの本プロジェクトは、参加した 20 名の高校生と多くの関係者のお力添えにより、既に一戸の農家に希望と元気を与えた。
引き続き、畜産アンバサダーたちには生産者、消費者双方に畜産の魅力を伝える活動を期待するとともに、5 年にわたり素晴らしい人材を発掘、育成し続けている本プロジェクトがこれからも継続されることを願い、報告の結びとする。

メンター
帯広畜産大学
畜産科学課程４年
森田　七海

1．はじめに
～プロジェクト参加者から メンターになった私～

私が海外の畜産に興味を持ったきっかけは、本プロジェクトの前身である 2018 年度未来の畜産女子育成プロジェクトです。当時、高校 3 年生の私は「将来､酪農家になりたい」と夢を抱き、海外の酪農を自分の目で見て、日本の酪農をより良いものにしたいと思いプロジェクトに参加しました。その後、高校を卒業し、北海道の帯広畜産大学に進学しました。大学を 1 年間休学し、国際農業者交流協会のプログラムを利用し、長く憧れを持っていたスイスでの酪農研修に参加しました。2023 年の 3 月に帰国し、縁あって本プロジェクトにメンターとして携わらせていただきました。

2．オンライン事前研修
～日本の畜産はすごいんだよ！～

日本は縦に長い島国であって、北から南までの気候や環境には大きな違いがあります。それぞれの地域で、家畜に適している気候・環境もあれば、そうでない地域もあります。その中で、日本の農家さんは、各場所で家畜を健康に飼育できるように様々な工夫をしています。家畜を健康に飼育することで、消費者が安心して口にできる食を食卓に届け、我々の食を支えてくれています。私は実際に、スイスの人から「どうしてスイスに勉強しに来たの？日本の農業（畜産業）はすごいのに」と言われることがありました。それだけ海外の人からの注目を、日本の畜産業は浴びていると実感しました。

3．オーストラリア研修
～働き方って大事だな！～

2023 年度のプロジェクトに参加させていただき、オーストラリアで感じたことは働き方についてです。オーストラリアへ行く前は、大規模農家が放牧をしている農家のイメージが強かったです。しかしその中には、別のメインの仕事の傍ら、サイドビジネスとして畜産業を営む農家や、小規模で経営している農家も視察することができました。今回プロジェクトに参加してくれた高校生たちも、その部分に注目している子が多いと感じました。

今の若者が、どのようにしたら畜産業に魅力を感じ、畜産業に従事するかを考えると「ゆとり」というキーワードが鍵になってくると感じています。私は、23 歳になります。自分の周りにいる若者と呼ばれる人たちには、後継者や畜産業に興味がある人も多くいます。しかし、自分の将来を考えた際に、畜産業に従事することで、生き物を扱う職業のため、自分の時間が失われる、休みが無いのが当たり前という現実があります。そんな中で、その当たり前を突き通していくと、今後の畜産業へ参入していく若者は、どんどん減少してしまうのではないかと私は感じます。

これは畜産に関わらず、今の社会に対して若者が思っている部分だと思います。自分自身の就職活動のために、20 代前半から 30 代前半の先輩方に話を聞くと、一般企業の会社員でも「休みを重視して職を選んだ方が良い」というアドバイスを多く耳にします。この若者の傾向から、畜産業は生き物の命を扱う仕事とはいえ、休みが無いのが当たり前という考えと向き合わなければいけないのではないだろうと感じます。

オーストラリアでは、パパイヤ栽培の傍ら放牧し、肉牛の元牛生産をしていたり、ある畜産農家では、週に 12 時間の管理で済んでいる農家もいました。しかし、それを日本の畜産農家も真似するべきだというわけではなく、それが畜産業だという誤った認識をしないようにしなくてはいけないと思います。毎日の管理あってこそ、家畜が健康に飼育され、安心安全な畜産物を口にすることができています。

4．プロジェクトと大学での研究とのリンク

実際に私は、大学の卒業研究で「魅力的な畜産業（酪農）の在り方とは」という題で、調査を行っています。身体的・精神的ゆとりが、飼養形態によって違いがあるのか、経営者・配偶者・従業員によって違いがあるのかという部分について着目しています。一日の労働時間と自由時間を調査したところ、繋ぎ・フリーストール・放牧の 3 形態では、合計時間的にはさほど変化はありませんでした。違いがあった部分は、まとまった自由時間の確保の違い、労働の質の違いがあげられます。

繋ぎ飼いとフリーストールでは、朝晩の牛舎作業に加え、日中の給餌や掃除があり、細切れの自由時間になっていました。一方、放牧をメインとしている牧場では、朝夕の搾乳後に放牧することで、日中に給餌や掃除をする必要がなくなり、日中にまとまった自由時間を確保することも可能でした。また、労働の質については、例え、牛舎の作業時間が同じくらいかかったとしても、身体的な疲労が同じだとは限りません。そもそも、放牧では日中を自由時間にすることも可能であったこと、毎日必ずしも日中の作業が必要なわけではないこと､このように作業しない日があり、他の繋ぎ飼い・フリーストールに比べ疲労感は弱かったです。

また、繋ぎ飼いとフリーストールでは、フリーストールの方が規模が大きく、牛舎の形態的に機械導入をしている農家がほとんどです。そのため、繋ぎ飼いの方が手作業や肉体労働が多く、フリーストールに比べ、繋ぎ飼いの方が疲労感が強かったです。このようにして、3 形態での労働の質に変化がみられました。時間的にはこのようにして比較ができましたが、精神的には人によって様々であり、現段階では比較が難しいのが現状です。調査させていただいた農家さんは、概ね 50 歳代以上の経営者・配偶者でした。お話を聞くと「休みなく働くのが当たり前だったから、身体的に多少しんどくてもゆとりをもっとつくろうとはあまり思わない」という声も聞かれました。「生き物を飼育しているからそれが当たり前で、何十年もやってきているから慣れた」とも話していました。その気持ちとは裏腹に、自分と同世代の後継者たちは、適度な休みが必要だと話し、現状、疲弊している様子が伺えました。そのため、農家の実際の生の声を聞き、どのようにしたらこれからの畜産を担っていく若者が増えるのかを考えたときに、「ゆとり」という点が鍵になると感じました。そして、その部分に関してこのプロジェクトでも学ぶことができたと強く感じます。

5．みんなの夢と私の夢

私は、畜産ティーン育成プロジェクトの前身である未来の畜産女子育成プロジェクトの 1 期生としてプロジェクトに参加させていただきました。当時､高校 3 年生で､ニュージーランドの酪農について勉強することができ、私にとってとても大きな経験となりました。そして、今回メンターとして、畜産ティーン育成プロジェクトに参加させていただきました。

前回は、自分自身が畜産について学ぶ立場だったのが、今回は当時の自分と同じように畜産を学びたいと参加してくれた高校生のサポート側として、このプロジェクトに関わらせていただき、考える部分が多くありました。

正直な話をすると、年齢を重ねるごとに、現実を見なければいけないという部分で、自分がやりたいことや、夢を思い描くということに対して、その思いだけでは進みづらくなってきました。しかし、今回様々な夢を抱いた 20 人の高校生たちに出会い、5 年前の自分を振り返ったときに「同じような気持ちを抱いていたな」と思い出しました。

もちろん、現実を見ることは必要になってきますが、それと同じくらい夢を抱き挑戦するということも大切で、現状維持で良いことなんてひとつもないと思います。人間が生み出す、科学や知識・技術はどんどん進化し、畜産についても同じで、どんどん飼育に関する新しい知識・技術が出てくると思います。

だから、今ある夢を忘れず、そこに向かって新しいことをどんどん吸収して、挑戦してほしいと感じました。また、自分自身も負けじと、自分の夢や目標のために頑張ろうと思います。

引率教員
宮崎県立都城農業高等学校
畜産科　教諭
福重　美帆

1．はじめに

畜産ティーンプロジェクトのことは、平成30年度（2018）年に実施された未来の畜産女子育成プロジェクトの案内を目にして以来「いつか機会があったら是非参加したい」と報告書を拝見させていただいていた。全国的には畜産県で知られる宮崎県といえども、農業高校に入学してくる生徒は様々で、農家や、祖父母が畜産農家という生徒ももちろんいるが、過半数は非農家の生徒だ。しかも、入学時は、動物が好きだからという理由や、動物園や水族館の飼育員に憧れて入学してくる生徒も多い。そのような中、牛や豚などの命に限りがある経済動物に興味を持ち、自分の将来につなげたいと思う志の高い生徒とともに、私も一緒に今後の日本の農業について考え、今後の教育活動に生かしていきたいと思ったからだ。今回は引率教員としての立場から見た、研修中の生徒の様子や日々の成長、オーストラリアの教育現場等についてまとめたいと思う。

2．参加生徒について

今回のプロジェクト応募者の中から選ばれた20名は、農家9名、非農家11名。専門も酪農、肉用牛、養豚と様々で、中には学校で家畜を飼育していないという生徒もいた。学年は2年生が11人、3年生が9人であった。初めての顔合わせは、オンラインの5日間の事前研修であったが、自己紹介から始まり、5人の4つのチームに分かれ、慣れないオンライン上のさらに限られた時間でチームでのディスカッション、まとめ、発表と行ってしまう生徒たちには正直、驚いたし、これが海外に行ったらどれだけの成長を見せてくれるのかと、楽しみに感じるほどであった。インスタグラムを立ち上げて、研修までのカウントダウンを、毎日工夫を凝らした画像で行ったり、現地での投稿や、報告会もインスタライブで発信したりと、バイタリティにあふれた個性豊かな生徒たちであった。

3．海外研修

生徒たちが報告してくれているであろう細かな研修内容については、省略させていただくが、学年や、学校での畜種別の専攻によって専門知識の差はあったものの、みんな「畜産」という大きなくくりの中で、各研修先の農家さんや先生方の話に熱心に耳を傾けていた。最初はただ自分の興味がある質問、調べればすぐに答えが分かるような質問をしていたが、メンターのアドバイスなどで、自分たちのグループ発表に関係した質問や、自分の研修のキーワードに関したことでも、みんなの有益になるような深い質問へと変化していった。特にマランダ高校での授業は、質問が次から次へと出てきて、時間がなくなってしまい、次の日の朝に、デイビッド先生が質問の時間を特別に設けてくださったりした。そして、通訳のあけみさんも素晴らしい方で、豊富な経験で頼りになり、常に生徒の思いに熱心に対応してくださったのも本当に有難かった。また、ヤギの体重測定や哺乳、牛の直腸検査などの実習では、我先にと積極的に参加している姿は、さすが日頃の実習で鍛えられている農業高校生らしく、生き生きととても印象的であった。

今回は、事情により、すべての生徒が同じ宿舎に泊まることが実現できず、参加生徒は帰国前日を除きすべてファームステイとなった。そのため、夕方にホストファミリーの方々がお迎えに来ていただくと、生徒たちは翌朝の集合時間まではそれぞれのファームステイ先にバラバラになってしまうので、一人一人とゆっくり話す時間がなかったが、現地では毎日提出される生徒の記録簿の点検をしていたため、生徒の些細な驚きや思いなど、その日にどんなことを感じていたのかが分かり、毎日の点検は大変であったが、楽しい時間でもあった。また、面とは向かっては言えない悩みなども書いてあったりしていたので、その対応に役立ったり、大切なコミュニケーションにもなった。はじめは簡単な日記のような記録簿も、研修が進むにつれて、自分の報告書のテーマもはっきりしてくると意識が変わり、より具体的な反省や次の日の目標を記入してくれている生徒が増えて嬉しく思えた。しかし、やはり対面でもっと深くコミュニケーションを取ったり、研修のフィードバックを行う時間や、さらに日本各地の畜産のことや、学校のこと、語り合う時間が欲しかったと個人的に思う。また、健康管理についても、予想外の雨続きで寒かったためか、後半に体調を崩す生徒が出てきた。さらにファームステイ先でも体調不良者の隔離が難しく、同じ家に滞在しているメンバーに次々と風邪がうつってしまった時も、対応が困難で申し訳なかった。幸いにも全員が無事に帰国し、大事にはいたらなかったが、そういう意味でも、生徒と引率メンバーがある程度は、同じ宿舎で過ごす重要性もあると感じた。ただ、生徒たちにとっては、最初はたどたどしく話していた英語も、週末のファームステイ受入農家巡回訪問の時には、どのファームステイ先でも自然に楽しそうにコミュニケーションを取っており、何より、ホストファミリーとの別れの時の涙が、ファームステイの充実度を物語っており、それはそれで生徒たちにとってはかけがえのない経験であったと思う。

今回研修に参加した生徒たちは、コロナ禍で制限のある中学・高校時代を過ごしていた年代であり、止むを得ない部分もあるが、研修の前半はどこか浮かれたような観光的な感じがしていた。事前研修から少し時間も経っており、チームのテーマ設定や、個人のキーワードの違いも曖昧なまま海外研修がスタートしてしまった感じがあったので、最初に対面での事前指導の必要性も感じた。また、全国各地から集まった20名の生徒それぞれの校則も違い、引率教員として、どこまで生徒に立ち入った指導をしていいのか、判断に迷うところもあった。しかし、遊びに来ているのではなく、このプロジェクトの目的を達成するために、どのようにすればいいのかというところを考え、その都度、引率メンバーで話し合いをして、全体または個別に対応した。ほとんどがファームステイであったため、なかなか、チームでの話し合いの時間が取れず、それぞれのチームにメンターと引率教員が一人ずつ入るかたちでバスでの移動中を利用したりもしたが、思ったように進まずに焦りも感じていた。それでも、参加者の意識が変わったと思えたのは、研修6日目の午後から予定を変更して行ったイーチャム湖で、しっかりとチームでの話し合いをし、発表の概要が出来た時ではなかろうか。厳しい評価を受けつつも、さらに良い発表を目指してのその後の生徒たちの頑張りには目を見張るものがあった。帰国前日のユースホステル。帰国後のホテルでの丸一日。スライドの編集や話し合いは夜中まで続き、報告会では、たくさんの参加者を前に第三者としての提言ではなく、自分たちが実現したい具体的な夢について高校生らしい自由な発想を発表し、発表後はみんな自信に満ちあふれた顔をしていた。

4．オーストラリアでの研修の意義

オーストラリアは、とても親日家が多く、移民の国という事情もあるのか、男女や外国人に対する偏見などを全く感じなかった。オーストラリアは、あらゆるところで女性が当たり前のように男性と同じ仕事をし、生徒たちも事あるごとに「女性の働き方」について質問していたが、そんな質問をすること自体がナンセンスな感じであった。セールヤードで、馬を巧みに操り牛を誘導するカウガールや、視察先の畜産農家でも女性が経営手腕を発揮していたし、女性も

一個人として尊重され、自然に働いている姿は、今後の生徒たちの励みになるのではと感じた。
オーストラリアの教育制度は日本と異なり、各州によって異なるようだが、マランダ高校では中学部の授業で農業が必修となっていたり、小学校でも農業の授業があるということで、進路選択に役立っていると感じた。また、オーストラリアは公立の職業訓練校などのキャリア教育が広く展開されており、学校から仕事への移行がより自然に行われているところも興味があった。また、全くの余談かもしれないが、日本では、生徒の安全を考えて、実習中の服の着方や帽子の着用などを細かく指導するのに、マランダ高校の実習服が、ショートパンツにTシャツまたはジャンパーを羽織ったラフなオージースタイルで、足元も長靴よりもブーツの生徒の方が多かったのには驚いた。

5．最後に

私自身、この研修を終えてから、畜産大国オーストラリアも、実際は日本と同じように後継者問題、飼料費、燃料費の高騰、乳価の低迷等の問題を抱えていることなどを知ることとなり、より身近に感じられるようになった。そして、改めて畜産の面白さ、素晴らしさ、可能性が感じられ、もっと畜産について学びたいという思いが湧き上がり、帰国後、私自身がいろんな本を買いあさってしまった。多感な高校生ならなおのこと、五感で感じ取った貴重な経験は心の芯に残り続けるのだと思う。農業教員として、農業の楽しさや、大切さ、誇らしさを若い世代に伝えたいと思って、農業教員を志した私だが、新しいことを体験する楽しさや、学び続けることの大切さ、わくわく感を久しぶりに味わせていただいた。私も畜産アンバサダーの一人として、これからの教員生活の上でも、この研修のことや、オーストラリアで学んだことを生徒たちに伝え続けていきたいと考える。

日本の人口減少は免れない事実で、農業人口も減少する一方だ。しかも、世界の人口が80億人を突破し、今後も増え続けると予想されている。現在の日本の経済状況を考えても、輸入に依存した畜産では対応出来なくなってくるのは明らかで、これからの農業は、世界にも目を向けないとやっていけない時代だと思う。しかし、マランダ高校のデイビッド先生が仰った「医者やパイロットは優れた職業だが、どんな人でも生きていくためには食べていかなくてはならない。その食べ物をつくる農業はもっと素晴らしい職業だ」というように、食料生産という重要な任務を背負っている農業は、これからも確実に生き残っていく産業である。
こちらがハッとさせられるくらいの、真剣な討論。帰国直後の報告会での、生き生きと畜産の魅力を語り、堂々と将来の夢を語った生徒たちを見ていると、本当に日本の畜産の未来は明るいのではないかと感じた。今回の畜産ティーン育成プロジェクトの経験で、世界が少し身近になったであろう生徒たちの今後の活躍を心から応援している。

最後に、このような機会を与えてくださった皆戸さん、石原さんをはじめとする国際農業者交流協会の皆さま、メンターの春恵さん、七海さん、引率教員の土肥先生、福重ママと呼んでくれた20人の子供たち(!?)、このメンバーで素晴らしい経験が出来たことを幸せに思います。
本当にありがとうございました！

2023畜産ティーン育成プロジェクト 大人チーム

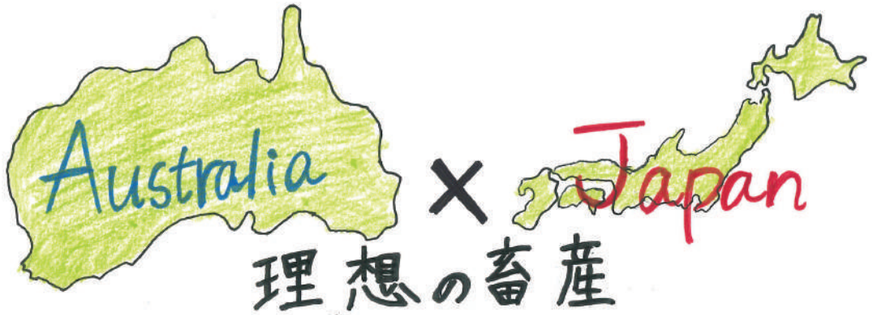
7 未来の畜産業に対するアイデア

20人の畜産アンバサダーが、
このプロジェクトを通じて学び考えたことを、
一枚の紙にまとめました。
外国のやり方が素晴らしいから
日本に取り入れるというのではなく、
畜産が素晴らしいから、
どうしたらもっと魅力的になるのか、
フレッシュで心温まるアイデアをご覧ください。

海外研修の様子は、2023畜産アンバサダーのInstagram
もーもーふぁいたーず からご覧いただけます。

YouTubeのアグトレ・情報チャンネルからもご視聴いただけます。

北海道帯広農業高等学校　舛屋 笑麗奈



理想の畜産

低コストで高品質な畜産物の生産 & 健康経営の実践

オーストラリアの畜産

- 世界が認めるオージービーフ
- 気候や環境に合わせた牛の品種
  (ブラーマン、ドラウトマスター、シャロレーなど)
- 仕事とプライベートの均衡が保たれている

理想の畜産を実現するために

- 食品製造副産物(エコフィード)の利用 → SDGsにも繋がる
- 作業をマニュアル化する
- ヘルパーを利用する
- ICT技術の導入

→ 誰でも作業ができる 休暇が取れる

舛屋笑麗奈

北海道静内農業高等学校　松本 結愛

オーストラリア研修 Since 2023.8.6 ~ 8.17

Australia training

Yuina Matsumoto

女性が畜産業に進出するには?

<オーストラリアと日本の現状>

~Australia~

- 畜産業で女性が働く事について前向きな思考!!
- オーストラリア政府は、女性でも働ける環境を整え、呼びかけを行っている!

~Japan~

- 畜産業に携わりたい女性がいても「女性に畜産は適していない」という思考がある!
- 女性の畜産業従事者が少ない!

女性ならではの視点や考え方!!

その人の強みを生かす!!

男性 = 機械作業や力仕事

女性 = 分娩介助や飼養管理

お互いがお互いに不十分な部分を補い合うことで女性の負担を減らし、進出へと繋がる!

畜産業に女性は必要不可欠で、女性の従事者が増えることで日本の課題である担い手不足にも貢献できる!

北海道倶知安農業高等学校　大久保 愛和

畜産教育について…

大久保愛和

理想

みんなが自由に就職、学べる「畜産」

何をするの?

マラウンド高校で「農業(畜産)の教育は小学校の頃からやっている」と学んだので

農業実習の授業を

日本でも取り入れると良いと思います。

ですがあまり現実的でないので、

まずは私が周りの人に畜産の良さや、間違ったイメージを明るいイメージに伝えることからはじめようと思います!

これから畜産を学んだり、就職を考えている方々と、感謝の気持ちを持って支え合っていけることが大切だと思いました。

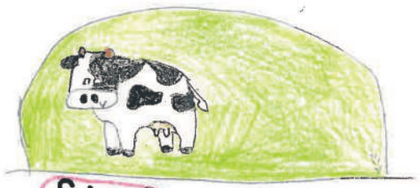
宮城県加美農業高等学校　泉 海偉

地域の課題解決に向けた

未来の畜産業

宮城県加美農業高等学校

泉 海偉



StepO オーストラリア研修

広大な土地で放牧していた!

日本の少ない土地を活用!

Step1

耕作放棄地に放牧!

労働時間削減!

飼料費削減!

Step2

自分の牛舎を開放できる!

自分

多くの人が牛と関わる機会を作る!

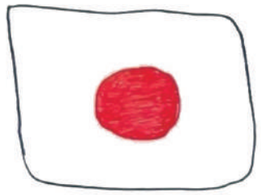
Step3

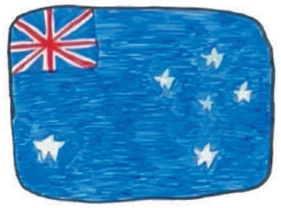
将来的に全世界の畜産人口が増えてほしい!

栃木県立栃木農業高等学校　藤沼 大志

群馬県立勢多農林高等学校　星 まどか

Australiaの畜産業





日本とオーストラリアの人で
畜産に対する考えが違う!!

日本では…

きつい・汚い・稼げない
という悪いイメージが強い

オーストラリアでは…

どんなに優れた人で
あっても食べなければ生きて
いけないのは同じで、
そんな食を支える仕事を
している私たちはとても
すばらしいと誇りに思っている

群馬県立勢多農林高等学校
星 まどか

群馬県立勢多農林高等学校　大島　那哉

今、必要なコト

1. 休日
2. 新しい挑戦
3. 畜産アンバサダーの活躍

オーストラリアで学んだコト

1. 週3日制、乾燥期には長期休暇のトコもある。
2. 経営が厳しい酪農では農地に工場、頭数を減らしチーズやチョコレートなど商品を開発。
3. 義務教育で農業の授業を選択できる。

大島 那哉

めざせ！若者でいっぱいの農場！

若者がのびのび働けることが畜産業を元気にするきっかけに結びつく！ 僕のように非農家でも農業に興味のある若者はいろが現状、始めたくてもやり方が分からない、始めたけど上手くいかずやめてしまう…！ たっっっくさん！

休むことが若者を救う!?

休みの間の空いた期間は雇用機会になります。新規で農業従事者が参入できたり、これから畜産業に関わる方への研修の場として活用できます。

独自の商品開発

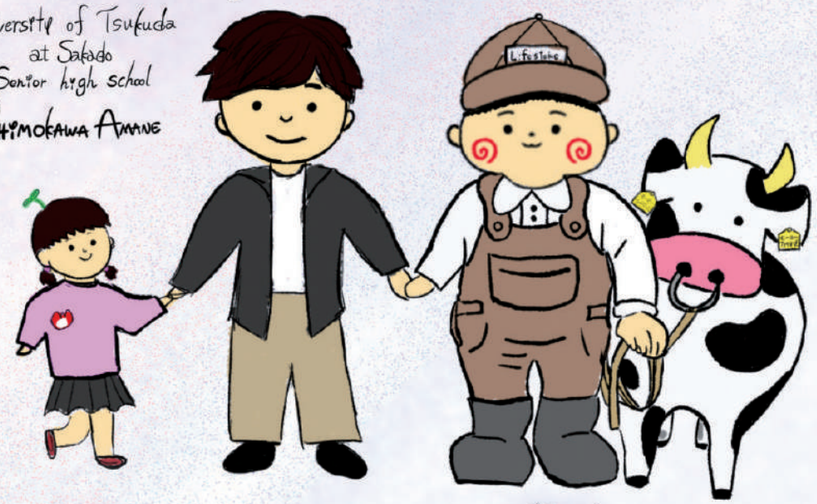
付加価値による収益の増大で人件費を補い、さらなる雇用機会に寄与

畜産アンバサダーとして広めることが最も重要！

筑波大学附属坂戸高等学校　下川　弥音

Australia
~ Queensland ~

University of Tsukuba at Sakado Senior high school
SHIMOKAWA AMANE

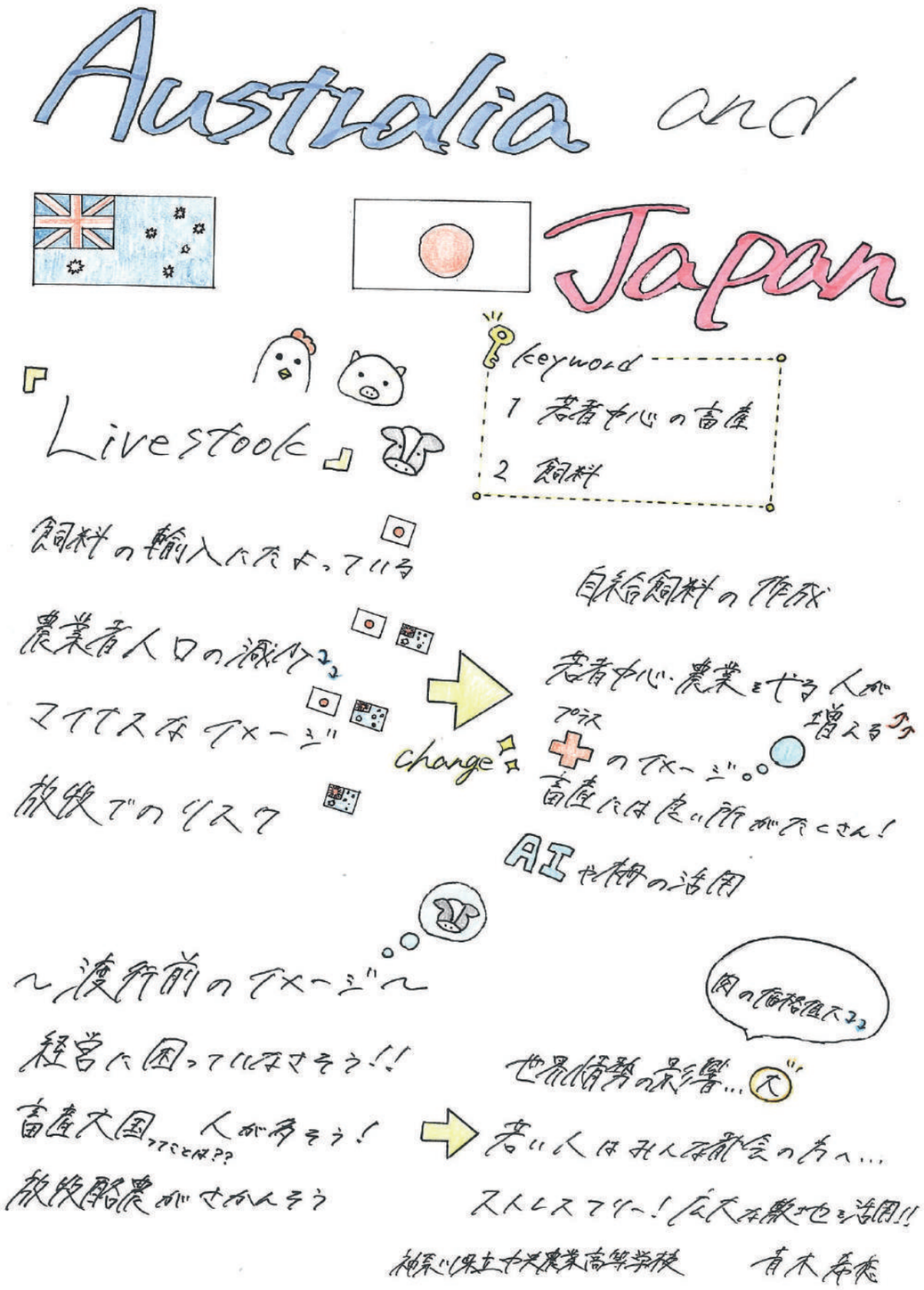


Consumer × Farmer

- 消費者と生産者の"つながりが強い"
  ⇒ 畜産への興味・関心を持つ
  畜産のマイナスイメージを撤廃
- Life work balance の充実
  ⇒ 若者が働きやすい環境

東京都立瑞穂農芸高等学校　吉田 穂乃里

神奈川県立中央農業高等学校　青木 希恋



長野県佐久平総合技術高等学校　市川 真優

オーストラリアで畜産を学んで考えた私の畜産

その土地のものをあたえ育てられる

飼料代がかからない

労働者減る

労働者の負担も減る

牛にストレスがかからない

安心した環境ですごせる

その土地の有名なブランド牛として育てられる〜!!

放牧での飼育

濃厚飼料をあたえない

食べる人が安心して食べれる

私の考える理想の畜産

- 将来は放牧での飼育も少し取り入れて、女性の畜産農家が増える取り組みなどを考えていきたい!!
- 日本は土地がせまいため放牧での飼育を取り入れるのは難しいけれどいつかはやっぱり放牧で育てたい〜!!

〜また有名な地域のブランド牛を育てたい〜

(例) 薩摩牛のような〜

地元のブランド牛です

これからこのプロジェクトに参加する後輩たちへ〜

畜産に興味があってこのプロジェクトに参加することになった君たちなら日本の畜産をもっともり上げていけると思います。
応援してるよ〜!!
頑張ろうね〜

市川 真優

静岡県立磐田農業高等学校　河野 花音

Australia

河野 花音

海外研修を経て

大規模な放牧 … 主流!?

牛舎を持たず決められた土地の中で放し飼い

中学校で畜産・農業が学べる

学校の敷地内に牛舎があったり畑があったり…

日本でも義務教育で学べるような環境があればなの

ア・イ・デ・ア

未来の畜産業

放牧 & グリーンツーリズム

- 耕作放棄地を再利用する
  - 農業の課題に立ち向かう
- 牛の健康増進につながる
  - 解放された飼育方法、アニマルウェルフェア
- 労働力・労働時間・コストを削減

土地を放牧地として開拓し、有効活用させることが大切!

省力化とコスト削減で持続可能な飼育体制を確立させる。

- 消費者に畜産を体験してもらう
  - 搾乳、餌やり、清掃、子牛へのミルク など
- 畜産について考えたり学んだり交流活動を行う
  - イベント企画、ポスター作製 など
- 副収入を得る
  - 体験料や商品購入による収入少しでも経営安定につながる

体験が人の心を動かす

沢山考えて感じてもらう為には、経営者側の豊富な知識が欠かせない。畜産への理解を広げる。

牛と人が元気に!畜産が元気に!

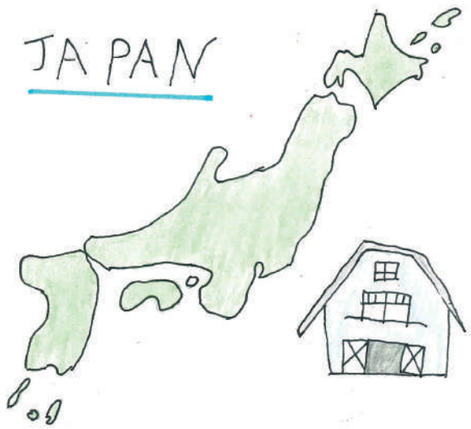
畜産業が盛り上がる↑↑

岐阜県立岐阜農林高等学校　浅野　椿

大阪府立農芸高等学校　松江　璃音

Australia

－風土に合った経営－



- 繋ぎ飼いが主流
- 流通する国産牛の9割はホルスタイン種や黒毛和種
- 日本のWAGYUブランドは海外でも人気!!

- 放牧飼育が主流
- 気候にあった様々な品種を飼育
- 豊富なオーガニック製品

↓

日本でも多様性のある品種を飼育することを提案!!

たとえば…

アンガス種やキアニーナ種の導入

赤味肉の美味しい

ジャージー種 × 黒毛和種 ＝ ジャー黒

日本短角種 × 黒毛和種 ＝ たん黒

などの交雑種の生産!!

大阪府立 農芸高等学校
松江 璃音

島根県立出雲農林高等学校　木村　自然

オーストラリアの魅力は「放牧」

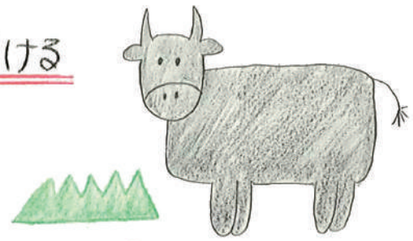
放牧をすることで…

実際に労働時間が一週間に10時間の農家さんもいる

・飼料給与の手間が省ける

・労働時間が短いため副業が可能!!

・個体管理の手間が省ける



それに比べて日本は…

・飼料給与や搾乳に時間がかかる

・精神的・身体的に負担が大きい

・家族との時間がない

⇓ そのため

限られた土地で「放牧」をすることで

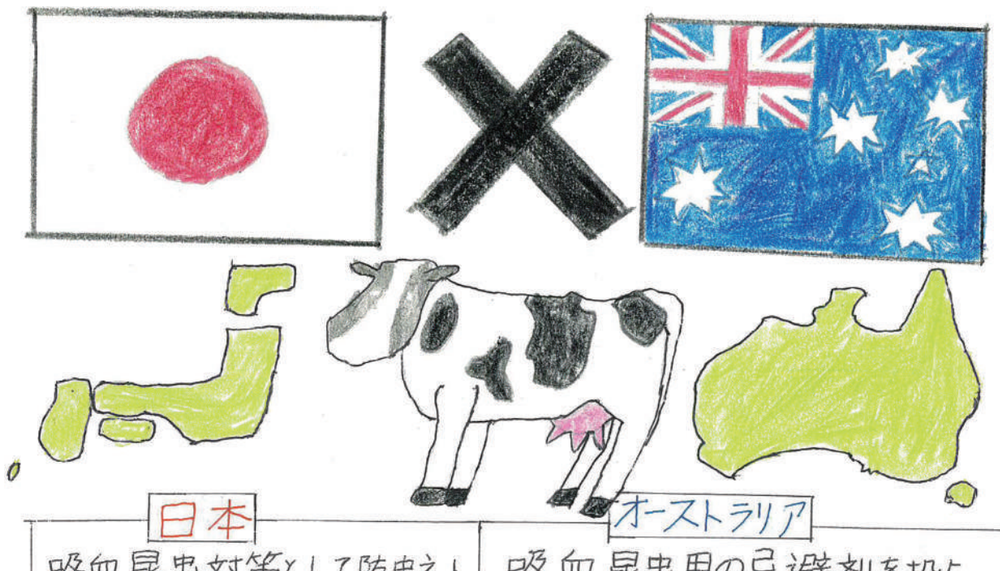
・牛も人もフリー

・作業の手間が省けて負担を軽減!!

木村自然

広島県立油木高等学校　田邊　綱汰

私の考える日本とオーストラリアの経営の特徴



日本	オーストラリア
吸血昆虫対策として防虫ネット 濃厚飼料を与える 粗飼料を作って与える 人工授精が主流 係留飼育が多い セリは60万円が平均	吸血昆虫用の忌避剤を投与 屠殺100日前から穀物種類が混った飼料を与える 自然授精で牛を増やす農家さんが多い 放牧→ストレスフリーで粗飼料がいらない セリは最高値21万円前後

私の目指す畜産経営～これからのアンバサダー活動～

人工授精の技術を身につけニーズにあった種を選んで人工授精する
農地を拡大し、放牧に挑戦し、元気で健康な牛を育てる
若者に向けて畜産の魅力を発信する

まとめ

この研修を通してオーストラリアの方々と国際交流ができ英語に対しての関心が深まりました。またアニマルウェルフェアを取り入れた畜産を直接見ることができ大変勉強になりました。　油木高校 3年 田邊 綱汰

熊本県立熊本農業高等学校　原田 里佳子

消費者との繋がり をテーマに

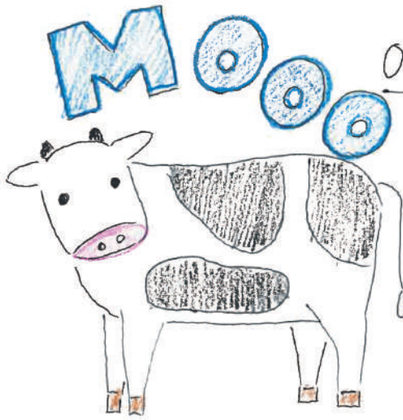
この夏 Australia へ

01 見たこと・知ったこと

オーストラリアらしい広い土地を生かした農業！
豊かな自然で牛さんたちと一緒に過ごす人々がいました。
そんな中で作られた牛乳やチーズ，アイスを販売している農家さんも。
その方から『おいしくてリピートしてくれる』という言葉をききました。

02 学んだこと・そのために

"おいしい"というところから
畜産について知るのも
大切！
これを育むために私たちは
毎日の家畜との関わりを大切にします。
みなさんも「おいしい」をたくさん口にして下さい



03 後輩ちゃんへ

畜産はたいへんなことも多いです。
でも，外で受ける実習も，動物と触れることも，思ってるより幸せです!!
ぜひ，今年も来年もこれからも畜産を続け，このような海外研修へも参加してみてください
一生の思い出になっちゃいます（笑）

Hikaruko

熊本県立熊本農業高等学校　井 真莉亜

熊本県立菊池農業高等学校　松尾 晏奈

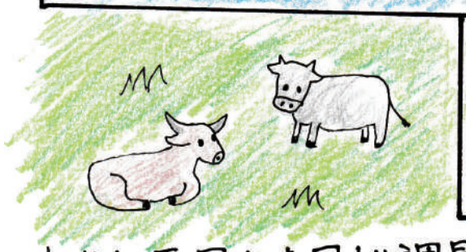
畜産イメージアップ

松尾晏奈

牛一頭あたり1haの放牧地で飼育。畜産をサブワークとして取り入れており去勢や除角をしないストレスフリーな飼育を行っていた。

畜産業の違い

集約農業なので限られた条件の中、牛を育てているため、時間やお金、労働力が必要となっている。飼料も輸入に頼っている現状。



しかし両国とも同じ課題があった

それは…

後継者不足

なぜ？
・若い人たちは、都心に行ってしまう。
・3K（汚い、きつい、稼げない）のイメージがある。
など…

どうすれば同世代の人が畜産に興味をもってくれるか？

AIなどを使った農業体験など誰にでもできるような教育の場を設ける。実際にではVR搾乳体験を行っていた。

農業を学んでいる若い人たちが『畜産の魅力』をSNSで発信する。また全国の畜産を学んでいる人たちの交流の場を増やす!!

農業の重要性を国をあげて、消費者に伝える。食料として、癒しとして、何より経済を支えていることをもっと知ることが大事

私は畜産アンバサダーとして畜産の良さを拡散する!!

宮崎県立都城農業高等学校　永緑 花琳

私の目指す牧場はこれだ！

永緑花琳

施設の機械化

例えば…哺乳ロボットの利用を増やす
→子牛の体調管理→女性でもできる！
…機械に乗って、除糞や農作業をする
→女性の雇用を増やす→畜産業に女性もたずさわれる！

新しい牛の導入

オーストラリアでは…
アンガス牛、マリーグレー、ショートホーン
とくに「ブラーマン」と言って高温地帯も飼育できて、病気にも強い肉牛を多く放牧してたよ！

→日本でも外国種の飼育を増やして、地形や気温にあった種を飼育すると育てやすいのでは？

消費者への理解

アンバサダー活動で畜産の魅力を発信！
その方法は…SNS！
例えば…所属している畜産研究部酪農班での取り組みを部活動生で協力して発信!!

実際にやってみた効果は？

ヘルパー育成事業の方や全国の牛好き高校生、農家さんからのフォローをたくさん頂き、多くの人に情報が届いていることを実感！
ちなみにオーストラリアでは、レストランと工房があるお店でVRを使った搾乳体験を行っていたよ！これを見て私は、日本でも酪農教育ファーム以外のイベントで畜産体験ができると、子どもも気軽に楽しめて、参加しやすい！と感じました。

大型商業施設のイベントとか！

畜産ティーンで広げた視野や出会いをこれからもっと広く深くして、たくさんの事に挑戦していきたいです！

8 むすび

令和 5 年度畜産ティーン育成プロジェクトを無事に終了でき、今は安堵しているところです。このプロジェクトの前身は、平成 30 年度（2018 年）から実施してきました未来の畜産女子育成プロジェクトとなりますが、昨年度事業からは畜産ティーン育成プロジェクトへと名称を変え、女子ばかりでなく男子高校生も参加できるプロジェクトとなりました。

近年、ケアリング・マスキュリニティ（ケアする男性性）が提唱されています。これは、他者に共感し、ケアできる男性を増やすことがジェンダー平等につながるというもので、このプロジェクトにおいても、畜産業を目指す農業女子への理解促進の目的の一つとして、男性にも加わっていただきたいという思いがあります。

新型コロナによる影響で、2 年間、オンラインを主体としたプロジェクトが続きましたが、新型コロナウイルス感染症法上の位置付けが 5 類感染症になるという報道を受け、今年度のプロジェクトは、4 年もの間、温めてきました念願の海外研修を計画しました。
4 月 28 日から開始したプロジェクト参加者の募集については、応募締切日前日まで定員割れをしており、果たして 20 名の参加者が集まるのか不安を抱えたまま迎えた応募締切当日、応募締切 3 時間を切ったあたりから、どっと応募が集まり、最終的には募集定員の 2 倍となる多くの学校からお申込みをいただきました。
応募してくださった皆さんの熱意ある応募動機や、次世代の畜産業をテーマとした作文を読み、さらにオンラインによる面談で一人一人から畜産への思いやプロジェクト参加の意気込みを聞くと、できることならすべての方に参加してもらいたいという気持ちと同時に、日本の将来の畜産に対する明るい未来を想像することができました。

いよいよ今年度のプロジェクト参加者である 20 名の畜産アンバサダーが決まり、オンラインでの事前研修を実施しました。参加者同士によるグループワークを毎日行い、畜産アンバサダーたちが自ら考え行動し、「もーもーふぁいたーず」という Instagram アカウントが立ち上がり、プロジェクトのことや畜産の魅力について情報発信が行われました。また研修の様子は、それぞれの畜産アンバサダー所属学校がホームページで紹介していただくなど、プロジェクトの啓発にもご協力をいただきました。

8 月の海外研修が近づく中、種々の困難があり、オーストラリアへ渡航した後も 40 年ぶりの悪天候により研修地域のテーブルランドはとても寒く、体調不良者を出してしまいました。しかし、体調不良者に代わり、他の仲間がサポートやフォローをし合うなどの協力が見られました。畜産アンバサダーたちの何でも学び取ろうとする姿や、マランダ高校で実施した農業実習では David 先生の「これをやってみたい人」というかけ声に対して多くの手があがり、「こんなに積極的なグループは今までになかった」と評価いただきました。いつも笑顔で元気で、農業視察先では一生懸命にメモを取り記録をつけ、ファームステイ先では自分たちだけで会話をしようと挑戦しました。

帰国後に実施した研修成果報告会では、事前に決めた 4 チームで発表に臨みました。発表の直前までパワーポイントでの作業を行い、「日本の畜産業を盛り上げるんだ！」という元気とアイデアを会場に届け、堂々とした発表は立派でした。

そして、各地での畜産アンバサダー活動では、たくさんの方に畜産の魅力を伝えることができました。畜産アンバサダー活動も、学校内、地域、日本各地の会場で実施できました。
本会主催で実施したブロック別国際化対応研究会（宮城県、静岡県、京都府、香川県、福岡県の 5 会場）では、研究会参加者たちから高校生たちへ、「若い時の自分を思い出した。明日から頑張れる力を逆にもらった」と賛辞やエールが贈られました。発表前は緊張した面持ちでしたが、終わった後は充実感に満ちた笑顔を見せていました。こういった経験を通じて畜産に対する思いをさらに強くし、将来に向けて畜産ライフを充実させていってくれると思います。

前回の海外研修をニュージーランドで実施したのが 2019 年 8 月でした。その翌月には、日本国内でラグビーワールドカップが開催されました。日本チーム ブレイブ・ブロッサムズの躍進もあり、大変盛り上がりを見せた大会でした。2023 年に開催されたフランスでのラグビーワールドカップは記憶に新しいと思います。日本チームの躍進を支えた魔法の言葉は 2019 年は「ONE TEAM」、そして 2023 年は「OUR TEAM」でした。ONE TEAM から OUR TEAM へ、このプロジェクトを通じて、海外の畜産を学んだ未来を担う若人たちが、広い視野を持ち、夢を追い続け、日本の畜産業を明るく照らしていけるよう、私たちも一緒に努力を続けてまいりたいと思います。

最後に本プロジェクト事業実施にあたり、多大なご支援とご協力を賜った皆様に対する感謝の印としてここにご紹介し、むすびといたします。（順不同）

日本中央競馬会
公益財団法人 全国競馬・畜産振興会
農林水産省 経営局 就農・女性課
クイーンズランド州政府駐日事務所
全国農業高等学校長協会
全国高等学校農場協会
日本学校農業クラブ連盟
TAFE Queensland International
Banora International Group
海外研修受入高校 Malanda State High School
海外研修視察受入先の皆さん
ファームステイ受入家族の皆さん
通訳 深津あけみさん
近畿日本ツーリスト株式会社公務営業支店
関谷牧場 関谷達司さん
尚絅大学 現代文化学部 光成有香 先生
事業推進委員　横田　祥 先生
　　青山浩子 先生
　　遠藤友治 先生
　　星　知希 先生
メンター　藤田春恵さん
　　森田七海さん
海外研修引率教員　土肥正毅 先生
　　福重美帆 先生
スペシャルサポーター　岸田隆志 先生
事業に応募してくださった高校生の皆さん
畜産アンバサダーの皆さん

ご支援とご協力を頂きました皆さま
本当にありがとうございました。

令和 6 年 3 月
畜産ティーン育成プロジェクト事務局

日本中央競馬会 令和５年度 畜産振興事業
畜産ティーン育成プロジェクト事業報告書

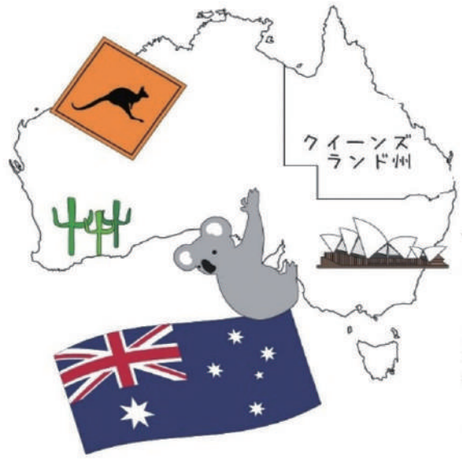
発行	令和６年３月
発行者	公益社団法人 国際農業者交流協会
住所	東京都大田区西蒲田５丁目 27 番 14 号 日研アラインビル８階
電話	03-5703-0252
E-mail	mirai@jaec.org
URL	https://www.jaec.org/
校正・デザイン	Ami Muraguchi
印刷	株式会社 エーヴィスシステムズ

無断転載禁止

集まれ！
畜産アンバサダー

Again!

オーストラリア・クイーンズランド州
2024年畜産ティーン育成プロジェクト始動



オージービーフに代表されるオーストラリア。
広大な土地を生かした放牧、オーガニック、輸出、
アニマルウェルフェアの考え方をキーワードに
クイーンズランド州の畜産業を学びます！

◆ プロジェクト参加者募集 ◆

研修参加者（生徒）20 名
引率者（教員）２名
募集開始：令和６年４月下旬予定

※募集の詳細については、
４月下旬頃に本会ホームページ
にてご案内いたします。

◆ 畜産ティーン育成プロジェクト（予定）◆

オンライン
事　前　研　修
６月中の５日間

▶

オーストラリア
海　外　研　修
８月中の 10 日間

▶

研修成果報告会
帰国後、都内にて

▶

全　国
畜産アンバサダー
としての活動

海外の畜産業を学んでこれからの日本の農業を考えよう
畜産業の素晴らしさやその魅力をプロジェクトに
参加する仲間と一緒に発信しよう